
IS～インフィニットストラトス～『鋼鉄の咆哮』

始まりの翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニットストラトス）『鋼鉄の咆哮』

【Nコード】

N1392Q

【作者名】

始まりの翼

【あらすじ】

世界最強の兵器『インフィニット・ストラトス（IS）』。男女のパワーバランスが崩れ、女尊男卑が当たり前の時代。主人公の織斑一夏は、男なのにISを起動させ学園に入学させられる。だが彼以外にも男でISを動かせる奴がいた！？しかもそいつは転校生！一夏の学園生活はいったいどうなる！？

※この小説は、作者の妄想や自己満足をぶち込んでおります。しかも初投稿なのでまだまだ未熟です。それでもイイと言う方はどうぞ。祝450,000アクセス&53,000PV！180お気に入り

り登録感謝です!!

みなさまのおかげです!ありがとうございます。

※感想を書いてもらったら必ず返信しております。

転校生が来た！（前書き）

この小説は筆者の自己満足や、妄想が色々入っております。
また初投稿のため未熟であり、文章も拙いです。それでも温かい目
で見守ってくだされば幸いです。

転校生が来た！

「クッ！マズイ……。あと何秒残っている！？」

走る。ただひたすらに。途中、誰かに呼び止められた気がするが、そんなことはどうでもいい。

そんなことより急がなくては……。そう、急がねばならない。そうしなければ……。俺は……

授業に遅刻してしまうのだから……。

『IS』

世界最強の兵器『インフィニット・ストラトス（IS）』。

ももとは、宇宙空間での使用を前提に開発されたマルチフォーム・スーツ。

開発当初は見向きもされなかったが、ある事件によって状況が激変。現行のあらゆる兵器を凌駕する性能を持つそれは、軍事転用され、各国の国防の要がISへと移って行った。だが、これにはある特徴があった。それは何か。そう、この『IS』は女性にしか反応しないのだった。

当然のごとく女性の社会的地位は向上し、女性優遇の社会が形成された。かつての男尊女卑ならぬ、女尊男卑の世界になったのである。

だが、そんな世界に衝撃が走る。『世界初！男性による、ISの起動を確認』このニュースは瞬く間に世界に伝わり衝撃を与えた。その男性――織斑一夏は、そんな事情からとある学園に強制入学させられてしまう。そう『IS学園』に……。

◇

バシーン！

「ッ！ごめんなさいッ！！」

結論から言おう。遅刻である。結局、努力は報われることなく、教室の手前でチャイムを聞くこととなった。

「あれほど遅刻するなど言っただろうが！馬鹿者が。まったく・・・」

そういつてタメ息をつくのはこのクラスの担任「織斑千冬」。この名字から察せられるとおり、彼女は一夏の姉である。

「だ、だけど千冬n・ッ！」

バシーン！バシーン！！ゴンッ！？

「学校では織斑先生だ。いいな？」

「・・・はい。」

哀れ、出席簿の攻撃を受けた彼は、頭を押さえつつ席に着く。

「お前たちもいつまでしゃべっている！さっさと席に着け。では山田先生。」

そう言って一歩下がると、後ろから小柄な女性が出てくる。

「はい。今日は転校生を紹介しますね。」

やや天然気味な（そして実際天然である）雰囲気を持ったこの女性、彼女は山田真耶。

この学園の教員である。

「はい。入ってきてください。」

side 一夏

転校生？このクラスに？

「ええとですね、紹介するのは3名です！」

「・・・え？」

「「「ええええっ！？」」」

まさかの転校生の紹介により、クラスが一気に騒がしくなる。

まあ、その気持ちはわからんでもないな。転校生が来るって言ったら誰だって気になるだろ？

しかも3名。

(てか、なんでうちのクラス・・・？分散させたりしないのかよ・・・？)

そんな至極まっとうなことを考えていると、転校生たちが入ってきた。

(・・・あ？)

そう思ったのは決して俺だけではないはずだ。

だって、転入生のうちなんと2名が――――――

――――男子だったんだから。

転校生が来た！（後書き）

いかかでしょうか？これだけ書くのも意外と大変でした・・・。他の作者様は本当にすごいですね。文章力も高いし。私も頑張るとしますか！

自己紹介と一騒動（前書き）

感想をいただきました。ありがとうございます。
皆さんの意見を参考にしつつ色々考えていきます。
しかし初投稿の身なので、どこまでできるか・・・。

自己紹介と一騒動

side 一夏

うわぁ、ホントに三人だよ……。この前2組に鈴が来たばかりなのにな？

何だってこんなタイミングできたのやら。

目の前に並ぶ転校生たちを見ながら、ふとそんなことを考える一夏。
(だがしかし！男子がきてくれたのは嬉しいッ！！)

そう、今更ながらではあるが、ISは女性にしか扱えない。そのため、IS学園には必然的に女性しかいないことになる。そんな中に男子が一人放り込まれる。

傍目に見ている分には何ともうらやましい限りではあるのだが、本人からすれば肩身の狭いことこの上ない。針のむしろである。

(ようやく話し相手ができたぜ！) 心の中で全力全開でガッツポーズである。

周りの女子とはそんなに積極的に話さないし、幼馴染である箒はなんだか最近機嫌が悪い。

鈴も箒と張り合っているような気がして、話にくい。

(助かったぁ)

そう、一夏は心の底から安堵していたのである。

◇

「では、皆さんに自己紹介をしてもらいましょう！」
そう言って山田先生が手招きをする。

「では、お願いしますね？」

・・・ゴクリ。

転校生の自己紹介をまえに、いつも以上に女子の瞳が輝いている気がする。

もしかすると、千冬の授業以上かもしれない・・・というのは言い過ぎだろうか？

「シャルル・デュノアです。フランスより転校してきました。こちらに僕と同じ境遇の方がいるとお聞きました。この国では慣れないことも多いかと思いますがよろしく願います。」

そう言ってさわやかに微笑んで一礼する転校生こと、シャルル・デュノア。

話の感じからすると男であることは間違いないようだ。と、ここで・・・。

「「か・・・。」」

「・・・か？」

「「かわいいいいい————っ!!」」

さっきまでの静けさはどこへやら。蜂の巣をつついたように騒ぎ出す。

「男子！二人目の！」

「しかも美系！」

「守ってあげたくなるッ!!」

いやー元気だねー（棒読み）ソニックウェーブだろうか？いや、冗談抜きで。

女子たちの歓喜の声、魂の叫びはあっという間に伝播する。

「あゝお前たち、少し黙れ。まだ終わっていないぞ。」

さも面倒だと言わんばかりに髪をグシャグシャとかき回しながら千冬がぼやく。

「そ、そうですよ！静かにしてくださいね？」

はっとしたように声を上げる山田先生。ボーっとしてちゃだめだよ、先生。

「織斑、いまでも失礼なことを考えていなかったか？」
「ヤベッ！？顔にでてたか？気をつけるとしよう。」

さてこのあたりで皆の視線が隣の美少女に注がれる。
輝くような銀髪。腰のあたりまであるそれをおろしている。

きれいだが、リボンか何かでまとめている様子はない。そしてなにより目を引くのが、顔の眼帯である。医者からもうようなヤツじゃない、ガチなヤツだ。

「……………」

先ほどの女子の声にも眉ひとつ動かさず、じっと眼を瞑って腕を組んでいる。

一向に発言する気配がない。

「……挨拶をしろ、ラウラ。」

見かねたように千冬が挨拶を促す。すると、

「はいッ！教官。」

いきなり佇まいを直して敬礼。

これにはクラス一同哑然とした。

（教官ってことは、ドイツのヤツなのか……。）

千冬は学園の教員になる前、ドイツで教官をしていたことがあるのだと聞いたことがあった。

おそらくは当時の生徒、もとい訓練生だったのだろう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

「……。」

続く言葉を待っているのだが、そのまま黙ってしまう。

と、ツカツカとこちらに歩み寄ってきたではないか。なんだ、俺の顔に何か付いているのか？

まだ自己紹介をしていないもう一人の転校生も何事かとこっちを見ている。

バシンッ！！

「ッ！！」

殴られた。それもいきなり。——なんなんだいきなり！？

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか！」

それだけ言うのと来た時同様スタスタと帰っていく。そのまま勝手にあいている席を見つけて座ってしまった。

「……。」

突然のことにクラスは沈黙してしまう。残された転校生も気まずげである。さすがにこんなことの後に自己紹介などしたくはないだろう。

「あーゴホン。これでHRを終わる。確人、着替えてすぐに第二アリーナに集合しろ。いいな？」

沈黙を破ったのは千冬であった。その声に促されてクラスも動き出す。

——おい。

あと一人の奴はどうすんだよ？ 可愛いそうだろ？ あれか、新手の放置プレイか。そんな趣味があったとは・・・。

「おい織斑！」

ビクッ！！

「シャルルと有澤の面倒を見てやれ。男同士だろう？」

そういうと教室をでていく。ばれなくて良かった。にしても・・・。
新しい転校生2名を見る。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

———苦勞が絶えない学園生活であることを悟った一夏であった。

自己紹介と一騒動（後書き）

とりあえずここまで。オリキャラの自己紹介や詳しい話は次あたりからにします。

皆さんの感想も参考にしながら。アマコアのクロスについては、武器や用語、設定なんかを引用しようかと。学園生活をしてるレイヴンやリンクスってねえ。シュールだよ……。今回の話は片霧烈火の「get tha regret over」聞きながら書きました。なんの曲かは知らないけど、テンションあがるいい曲だな！

設定及び、オリキャラ紹介 ※7／26設定追加しました（前書き）

設定やオリキャラの紹介をしたいと思います。

いまのところ自分はこの感じで考えていますが、何かこうしてみたら？とか、

こういうのもアリじゃね？などありましたらご指摘いただけると幸いです。

設定及び、オリキャラ紹介 ※7／26設定追加しました

・オリキャラ紹介

『有澤恭平』

身長177cm 体重61kg 日本人。短めに刈った黒髪で、眼鏡をかけている（伊達）

・日本が誇る大手企業『有澤重工』のあととり息子・・・なのだが本人には全くその気が無く、

むしろ現在の社長である父親を嫌っている。母親は彼が幼いころに死亡しており、そのことが親子間の不仲につながっている。普段は明るく面倒見もいい。が、時には別人のように冷静になり冷徹ともとれる判断をしたりする。一夏と同じく、男でISが動かせるということで転入してきている。

ひそかな特技がピアノを弾くこと。ちなみにトマトが嫌い。彼曰く、トマトは「食卓のテロリスト」らしい。

父親である隆文からある密命を受けているらしいがそれは一体・・・？

また最近体調不良が続き、わずかに髪の毛の色が薄くなってきている。

彼の乗るISにかかわりがあるようだが・・・？

・使用IS

『不知火』

・彼の専用IS。その技術、パーツのすべてが『有澤重工』によるものであり、他のISとは違った開発過程をたどってきているようだ。カラーリングは黒を基調としており、武装は実弾兵器が主流であるが一部EN兵器も搭載されている。

世代としては第3世代への過渡期にあたる、2・5世代機である。社の重要機密であるため会社から圧力をかけ、学園側からの解析、一部データの採取を封じている。（一部データは公表されてる）

現在は大破し、修復が急がれているがあまり進んではないようだ。

物語後半では、すでに恭平の機体は雪風へと変更されている。

修復の9割方が終了し、現在は社の施設で保管されている状態である。

『雪風』

大破した『不知火』に代って恭平に渡される予定の新型機。とはいっても、ラインアークで実験用に開発され、放置してあったものに少し手を加えたもの。設計した人間の名はアブ・マーシユ。

外見は、当初の『不知火』と異なり、白を基調としたスマートな機体。前者が重装甲高火力であったのに対し、こちらは高機動全距離対応型である。突撃ライフルやレーザーキャノン。ブレードと言ったバランスの良い装備になっている。全体的な機体性能は『不知火』より上。

なにか設計者によってある仕掛けが施され、かくされた力があるらしいが・・・？

物語後半にて、秘められていた力を解放。圧倒的な力で敵を撃退するも、その力の正体には恭平自身よくつかめていないところがある。その力を得る際、今は亡きはずの母親の面影を見たというのが・・・？

・企業

『有澤重工』

・日本が誇る大手IS企業。おもに実弾兵器に定評があり、とくにグレネードやミサイルの生産を主としており、その性能と実績は誰

もが認めるほどである。

その前身は『有澤技研』という、小さな工場であった。第二次世界大戦時に戦車や戦闘機の制作を行っており、戦艦の主砲などの設計も担っていた。有澤の実弾兵器のノウハウはここが始まりであった。その後、大戦時に大きく成長し、終戦後、米軍の兵器の修繕・開発の発注を受けて名を『有澤重工』と変える。自衛隊に対する装備の開発や、支給などが主な取引である。

現在の社長は、『有澤隆文』恭平の父親である。

かつて、運営資金の不正利用を追及されたが、不正は見つからず、資金が何に使われていたかは解明されていないままである。

『ラインアーク』

・『有澤重工』傘下の企業。企業と言うよりも、有澤直属の研究機関としての側面が強い。

東京湾の一部を埋め立てて造られた海上都市のうえに本部がある。有澤とは異なり、新型の装備やEN系の装備の研究開発に意欲を見せている。有澤の運営資金の一部がここに流れたと追及されたが、結局なにも出てこなかった。国内のみならず海外からも人材を多く集めており「来るもの拒まず」の姿勢を持っている。地下に巨大な実験施設がある模様。

『キサラギ派』

ラインアーク内の派閥。過激な思想と手段を選ばないことから危険分子として扱われている。

その詳細は未だ不明。

物語後半で、ORCA旅団を名乗る集団の声明発信以降、水面下で活動を活発化させているようだが、その真意はいまだ不明のままだ。

『リンクス計画』

有澤重工が日本政府の極秘の依頼を受けて進めているプロジェクト。その詳細は不明な点が多いが、一部資料が何者かに奪取されたらしい。一説には奪ったのは学園の生徒会長ではないかとも言われている。一部判明したことによれば、特殊な資質を持つ操縦者の育成計画のようだが・・・？

後に、有澤重工社長である、有澤隆文本人の口から千冬に対してその真実が告げられた。

『AMS』

恭平の機体、『不知火』そして『雪風』に搭載されているシステム。機体と搭乗者を物理的に接続させ、驚異的な反応速度を得る。が、搭乗者の適合率に依存する上精神的に大きな負荷がかかる。適性の低いものがこれを扱うには、致命的な精神負荷を受け入れるしかない。恭平は精神負荷を受け入れて機体の性能を限界以上に引き出している。

『コジマ粒子』

ISが開発される少し前に発見された粒子。莫大な電気エネルギーを発生させるため、エネルギー資源として注目されたが環境に対して汚染が確認され（時間の経過とともに薄くなっていくが）さらには、長期間それを浴び続けると細胞異常が発生する。これを抑えるためのユニットが開発されたらしいが、真偽のほどは不明である。このユニットの作成者もアブ・マーシュと言われている。

『ネクスト計画』

リンクス計画に並行する形で進められている計画。

リンクスがパイロットならばこちらは機体方面の計画。

その全貌は未だ明らかになっていないが、ISとは異なるシステムで駆動しているらしい。

その性能もISに引けを取らないものであるようだが、ワンオフアビリティや第二形態移行、絶対防衛の性能など、ISにあってもネクストに存在しないものもあるようだ。だが、この情報をどれほど信じればいいのか・・・？

これについては、上記のリンクス計画同様、社長本人の口から真実が告げられる。

『レギュレーション』

機体のシステムに影響するもの。パソコンソフトのバージョンにたとえられるかもしれない。

いくつか開発されており、現在は恭平は1.40を使用している。初期型の1.10などは使用されていない。が、伝説と言われるほどのレギュレーションがあるらしい。

『BFF』

有澤重工と協力関係にある企業。重厚で武骨な製品の多い有澤に対し、精密で繊細な製品を多数生産している。スナイパーライフルなどがその代表例である。命中率、射程距離ともに世界トップクラスである。

『アーマードコア』

有澤重工が開発したパワードスーツ。イメージ的にはISと通常のパワードスーツの中間。

それ一つで完成された形を持つのではなく、異なるパーツ同士をくみ上げて完成させるタイプの物。

これにより生産時にかかるコストを抑え、パーツ同士の組み合わせ

により自由度の高い性能と整備性、汎用性を持つ。戦闘兵器としてはあまり使用されず、災害救助用や、一部自衛隊の特殊部隊に軍用の物が納品されている。外見は、ISとことなり肌を露出させず、全身が装甲で覆われる。これはシールドによる防御や絶対防御の恩恵が無いためである。

これを独自の思想と技術で改造、発展させ、兵器としての完成形を持たせたのがものこそが、

『アーマードコア・ネクスト』である。

設定及び、オリキャラ紹介 ※7／26設定追加しました（後書き）

こんな感じです。これから色々追加したりするかも知れません。
では、また次の話で。

本日はアーマードコア4の「Thinker」を聞きながら書きま
したw

あいむしんかーとうーとうーとうーとうー

模擬戦闘・・・の前にお着替えたね♪（前書き）

やっぱ小説ってかくの大変だね。感想でアイディアをいただきました。

本当にありがたいです。感謝しております。

戦闘の描写とか難しいことこの上ないなあ。こんな自分ですが、末永くお付き合いいただけたら幸いです。

模擬戦闘・・・の前にお着替えだね♪

side有澤

おいおい・・・。俺の自己紹介省略されたぞ？なんてこった。おまけに先生はそくさと教室を出て行きやがった。おのれ・・・。みる、織斑だっけか？コイツも困ってんじゃないかねえか、まったく・・・。

「・・・なあ、とりあえず着替えはないか？」

さすがに黙ったままなのもアレだしとりあえずそう切り出してみる。まあ、実際急いで着替えてアリーナとやらに行かなくてはならないようなのはあるが。

「あ、ああ、そうだな。えっと・・・？」

ああそっか、俺はまだ名前を言ってないんだったな。うっかりしていた。

「ああすまない。俺は有澤。有澤恭平だ。宜しくな。」

「お、おう。宜しく頼む。」

ん？なんでそんなにビクついてんだ？そんなに怖いか？身長高いし声が多少低かったりするけどさ。

「ねえ、僕たちどこで着替えたらいいのかな？急がないと遅れちゃうんじゃない？」

えーと、確かシャルルっていったけ？そいつが言う。

「ああ、男子は空いているアリーナ更衣室で着替えなんだ。これから実習の時はこの移動だから早めに慣れてくれ。」

なるほどね。移動しないといけないわけか。いささか面倒ではあるが仕方がない。

「ありがとう。じゃあ、さっそk「話はいいから急ぐぞ！ここにいとマズイ！」ッ!？」

「お、織斑君!？」

そういうと、脱兎の如く教室を飛び出していく。なんだなんだ？

当然、俺たち二人は場所を知らないからアイツにくつついていかないとならない。自然と俺たちもかけ足になる・・・てかもはやフツ―にダッシュじゃん、これ。どゆこと？

「説明は後だ。今は急いでくれ」

なにやら危機迫ったような声である。まいいや。あとで自己紹介もかねてゆつくり聞くとしようか。

そう決めておれは更衣室へと向かったのだ。

side 一夏

(マズイな・・・。本格的に急がないと。)

この二人は転校生だからこの時間帯の恐ろしさを知らない。加えて今日は二人も、しかも男子の転校生が来ているのだ。これを他クラス的女子が見逃すはずがないのだ。

すでに各クラスの教室から、情報収集のための尖兵が出撃している。捕まったら一巻の終わりだ。

そのまま質問攻めにあい、授業に遅刻。その後待ち受ける修羅により、恐怖の出席簿アタックがくる。

(勘弁してくれよ・・・。)

と、そんなことを考えていると隣のシャルルがこんなことを聞いてくる。

「な、何？なんでこんなに騒いでるの？」

状況が飲み込めていないシャルルが困惑顔で聞いてくる。

「そりゃ、男子が俺たち3人だけだからな。珍しいんだろうよ。」

会話をしながらもペースは落とさない。否、落とせない。すでに尖兵はすぐ後ろ。時折声が聞こえてくる。

「黒髪の二人もいいけど、金髪つてのもアリよね!？」

「しかも瞳がエメラルド!!」

「かわいいーっ!かっこいいーっ!」

ここで捕まるわけにはいかない。もうすぐそこに校舎の出口が見えている。あと少しだ。

「おおおおおーッ!!!!」意味不明な雄叫びを上げドアに突撃する俺。慣れない二人の眼にはさぞや奇妙に映ったことであろう。が、なりふり構ってはいられないのだ。

「と、到着・・・ハア。」

こうして無事(?)に更衣室までたどり着いたのだった。

◇

更衣室に無事たどり着いたはいいいものの、時間が無い。3人は着くなり急いで着替えを始めていた。

一夏も有澤も、着ていたシャツを一気に脱ぐ。と・・・。

「わあっ!？」

「なんだデュノア君?なんか付いてるかい？」

ちなみに有澤はシャルルをデュノアと呼んでいる。しかも君付け。

「おい。急げよー？ いきなり遅刻とか洒落にならんかな？」
何だろう？ 視線を感じるんだが・・・？

「・・・シャルル？」

「な、何かな！？」

俺が声をかけると、あわてたようにむこうを向いてジッパーを上げる。

「着替えるのはやいなあ。コツとかあんの？」

見れば有澤もすでに着替えを終えていいる。

「コツって言うほどの物は・・・。っていうか織斑君はまだ着ないの？」

「おう、これ着にくくてな。・・・引っかかってさ。」

なんだろう、シャルルがカーツと顔を赤くしている。ヘンなヤツだ。有澤は苦笑いしている。

まあいい。ちょうど着替えも終わった。急いでアリーナに出るとしよう。

「さて、いきますかね」

そういつて俺たちはアリーナに通じるドアを開けた。

模擬戦闘・・・の前にお着替えだね♪（後書き）

こんにちは。というよりこんばんわ？戦闘シーンまで行くと長くなりそうなので、

いったんここで区切りました。次から戦闘シーンですね。

こんかいは「クオリア」を聞きながら書きました。ウーバーワールド（英語メンドイ）あまり聞かないけどイイ曲だね。

模擬（前書き）

戦闘シーンに入ろうと思ったのにずるずるとこんなことに・・・。
温かな目で見守って下され・・・。

模擬



スパパパーンッ!!!

「「ごめんなさいッ!!」」

「・・・なさい?」

澄み切った青空の下に響き渡る軽やか(?)な出席簿アタック。あ、今日も日本は平和だ・・・。

「ほう? 一人だけ反省していないようだが?」

叩かれた一夏とシャルルはすぐに謝った(一夏に至ってはもはや条件反射である)が有澤だけキチンと謝っていない。その上語尾が疑問形である。完全に反省していない。

「いえ、まだ始業時間を知らない上に織斑君が女子と戯れていたのに遅くなりました。」

「なァッ!?!」

驚いたのは一夏である。女子と戯れてなどいないし、むしろ急いできたのだ。冤罪である!が・・・

「なに? 私はちゃんと面倒を見ると言ったはずだが? 織斑。」

「ち、違う。誤解だ、千冬n・・・ッ!」

ゴンッ!ゴンッ!グチャッ!?!・・・何やら非常にマズイ音がした気がするはいけない。

「学校では、織斑先生だといっただろうが！馬鹿者めが！」
「・・・はい。織斑先生。」

哀れ、反論することさえ許されず、その上馬鹿者扱いである。張本人である有澤は、してやったりといった顔をしている。

「まあ、いい。さっさと並べ。」
そう言われて列に並ぶ。

「あら、一夏さん。ずいぶん遅かったですわね？」
「・・・別に戯れていたわけじゃないんだぞ？それだけは言っておくからな？」

「なに、あんたまた何かやったワケ？」
「女の子と戯れていて遅れたんですってよ？」

だから違うのに・・・。そう思うも虚しく鈴の追撃が加わる。

「はあ？なんであんたはそんなにバカなの？」
おい。後ろを見る。いいのか、見ないと後悔するぞ。——見て後悔するだろうけどな？

「————安心しろ。バカは私の目の前に二人もいる。」
ギギギ、という音がしそうなほどゆっくりときこちなく振り返る。
と、そこには・・・。

「「ひいっ—！」」

バシーン—！！

澄み切った空の下、再び出席簿アタックが炸裂するのであった。

◇

「では、射撃及び格闘戦の実戦訓練を始める。そうだな、まずは誰かに手本を見せてもらおうしよう」

鈴とセシリアに会心の一撃を見舞うと、そう言って実習を始める秋冬。

「一夏のせいなんだから……。」

「なんでわたくしまで……。」

ハテ、ワタシハナニモシテイマセンヨ？

「うむ。鳳、オルコット、前に出る。お前たちにやってもらおう。」

「……一夏のせいなのに」

「どうしてわたくしが……」

「お前たちもうすこしやる気を出せ——アイツにいいところを見せられるぞ？」

なにやら耳元でささやく。その囁きは天使か、あるいは悪魔のそれか。

「ここはイギリス代表のわたくしの出番ですわね!？」

「まあ、やってもいいかな？調子もいいし!」

「……どうやら前者のようである。——少なくとも本人たちには。」

「で、相手は誰ですか？鈴さんともかまいませんが？」
そう息巻くセシリアに、

「あわてるなバカ共。対戦相手は・・・」
そういつてふとセシリアから視線をそらす。すると、

「はい。実習の相手はわたしですよ！」
山田先生であった。

「2対1ですよ!？」

「いくら先生でもそれはちょっと・・・」
ふたりとも口には出さないが、内心『勝つに決まってんじゃない!』
と思っっていたりする。が、

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける。」
そんな考えを見透かしたように言い放った。そういわれて黙っている彼女たちではない。

「そこまで言うのでしたら!」

「伊達に代表候補生はやってないのよ!」
言うが速いか、ISを展開し空へ上がる。

「で、では私もいきます。」
若干天然気味な、しかしいつもと違う冷静な顔つきで山田先生も空へ上がる。

side 一夏

(あの二人なら勝てる・・・よな?)
セシリアの強さは戦った一夏がよく知っている。優れた後衛とパワー型の前衛。イけるんじゃないか?

(頑張れよ・・・)

一夏はそう思って空を見上げた。

side有澤

さて、あの二人の實力はどんなものだろう？代表候補生なんだから決して低くはないはずだ。

（この機会に、機体の觀察もしてしまおうか・・・？）

いつもは天然気味の山田先生の實力も氣になるところだ。

学園の教職員ともなれば、かなりのレベルにあることは想像に難くない。

そんなふたりの頭上で光がはじける。

実戦演習の開幕だ。

模擬（後書き）

次で！次で戦闘に入って見せる！

・・・前置き長くてごめんなさい。

本日はステレオポニーの「泪のムコウ」で書きました。
ではまた次話で。

模擬戦闘？（前書き）

やっとな戦闘？だぜ・・・。
効果音とか難しいな・・・。
アドバイスホスイ・・・。
大事な要素なのに。

模擬戦闘？

◇

先に仕掛けたのは、代表候補生二人組であった。

「いきますわよっ！」

「はああああっ！！」

威勢のいい掛け声とともに攻撃を開始する。

バシユンッ！バシユンッ！

鋭い発射音とともに、セシリアの主兵装、『スターライトmk-？』からの狙撃が迫る。

「良い狙撃ですね。でもそれだけじゃ・・・私は墜ちませんよ！」

山田先生の装備するアサルトライフル『レッドバレット』が火を噴く。

「私だっているんだからっ！！」

セシリアの牽制とタイミングを合わせ下から鈴が肉薄する。その手には分割された『双天牙月』。

「もらったああッ！！」

下からの切り上げ。しかしその一撃を難無く回避して、鈴を自分とセシリアの間に置く。

「まだまだこれからよ！」

機体を翻し、再び接近しようとするそこへ・・・

——警告。後方より攻撃。回避を推奨します——

「フフ。後ろ、見た方がいいですよ？」

悪戯が成功したかのようなステキな笑顔でこちらを見る山田先生。
そして・・・

「なっ!？」

——直撃。シールドエネルギー低下。機体損傷軽微——

「な、なにすんのよ!？こっちは味方よ!？」

「り、鈴さんこそ。私の射線に入らないでくださる!？」

同士撃ちである。だが、ここで先生から注意をそらしたのは間違いなく鈴の失態だった。

山田先生は、上手く二人を誘導して、二人を直線上に来るように仕向けたのだ。

結果、セシリアの放ったライフルは、山田先生ではなく鈴に直撃することになるのである。

「今度はこちらから行きますよ!」

アサルトライフルを構え、接近する山田先生。操縦しているのは第二世代機なのに、それを微塵も感じさせない見事な機動。いつもの先生からは想像もつかない。

——警告。敵はアサルトライフルを装備。近距離での被弾は危険です——

「くっ!それならこっちだって!」

鈴はいったん距離をとると衝撃砲を起動させる。

(これなら・・・。)

この兵装は、砲身、及び砲弾が見えない。つまり、回避が非常に困難なのである。なのに・・・

「えっ!？」

「隙あり、です」

「鈴さん!下がって下さい!後はわたくしが!」

近距離からの被弾で体勢を崩した鈴を援護すべく、ライフルを構えるセシリア。

それと同時に、機体から四機の突起を射出する。これはBT兵器と呼ばれる特殊兵器で、離れた場所からの全方位空間攻撃を可能にしている。

ヒュン!ヒュン!ヒュン!

先生の機体めがけて鋭い光が走る。それを紙一重でよけると、今度は鈴ともつれあうような動きで攻めていく。

(これでは、鈴さんを巻き込んでしまいますわ…)

(どうしよう!?!このままじゃ向こうのペースだ…)

「良い連携ですけど、まだまだですよ!」

そう言いながらも攻撃の手は止まらない。鈴のシールドが見る間に削られていく。

先生の巧みな戦術にふたりの連携が崩されていった。

side 有澤

（ありゃ駄目だ。完全に先生のペースだ。）

俺は試合を見ながら考える。鈴はセシリアから引き離されているから、セシリアからの援護が間に合わない。セシリアは引き離された鈴に適切な援護を行えず、小型兵器を使っても、密着されてしまった効果を発揮できない。双天月牙もその巨大さが仇となり振り回せないでいる。衝撃砲を使えば、エネルギーを大きく削ってしまう。

（2対1なのにこんなにうまく有利な展開に持ち込むなんて・・・）いつもの天然然とした様子からは全く想像できない試合巧者ぶりである。

先生に対する認識を改めなくてはなるまい。

（中国の甲龍にイギリスのブルーティアーズか。新しい技術が色々使ってあるみてえだな。）

おそらくあと少しで決着がつくだろう。そう思い再び空を見上げた。

◇

「・・・有澤」

「なんですか？織斑先生？」

「お前はこの試合どう見ている？」

「山田先生がうまく試合の流れをつかんでいると思います。二人を引き離して援護を薄くさせ、得意の射撃戦に持ち込み各個撃破する。理にかなった動きだと思います」

不意に振られたが、それでも思ったことを正直に述べてみた。実際山田先生の技量は確かなのである。

「ほう、そこまで分かるか。なら次はお前が逝け」↑誤字にあらず。
「・・・ど？」

今何とおっしゃいました？何やらとんでもないことを言われた気が……。確実に「行け」に違うニュアンスが含まれていたと思うのだが……？

「逝けと言っている」

「……はい。わかりました」

気にするのは止そう。気にしていたらやっていけない……のだから。

どうやら決着も付いたようである。ホントにやるのか？俺？

「よし。次は有澤がやるぞ。しっかり見ておけ」

千冬の声に女子がにわかに騒ぎ出す。

「ねえねえ、有澤君で強いのかな？」

「どんなISなんだろ？」

「がんばってー！！」

……やめてくれ。プレッシャーかけないでくれよ。勘弁してくれ。

「はあ、じゃあ山田先生、お願いします」

「は、はい。無理はしないでくださいね？」

おお、心配してくれるのは先生だけだッ！！なんと優しい。

「さてと……。それじゃあ『不知火』起動！！」

おれの操縦も見てもらうとしようじゃないか！！

模擬戦闘？（後書き）

バトルシーンってこんなでいいのかな？よくわからんが。とりあえずこれが今の自分のレベルです、はい。アドバイスなぞいただけたらありがたいです。

今回は「ナイト・オブ・ナイツ」をきいてました。東方？の曲はあれしか知らねえ。では次のお話で。

模擬戦闘？（前書き）

有澤の戦い方ねえ、正面からの撃ち合い以外になんかあるかな？

IS戦で撃ち合いだけじゃつまらん気もするんだが・・・？

まあ、こんな作者ですが、末永くお付き合いください。

模擬戦闘？

side一夏

（アイツのISって、一体どんな機体なんだ？アイツも専用機持ちなのか？）

鈴とセシリアのあとに行うことになった有澤はまさにいまISを起動させていた。

光が彼の体を包み込んでいく。わずかに輝きが強まり煌めく。数瞬の後、そこにはISの装着を完了した彼の姿があった。

（あれが・・・アイツのIS・・・。）

「何アレ？超ガチガチじゃない？」

「あれが有澤君の？」

事実、彼の姿は一種異様であった。黒を基調としたカラーリングの機体。が、あまりにも重厚なのだ。

高速で飛び回るには不向きであると思われるほど、太く重厚な手足。そして何より・・・

（なんで全身に装甲を身につけてんだ・・・？）

そう彼は上半身や頭すらもガッチリ固めているのである。本来、シールドに守られ、絶対防御の恩恵があるISにおいて機体本体の装甲はさほど重要視されない。現にセシリアは上半身はほぼISスーツのみである。無論腕などは装甲が装着されてはいるのだが、申し訳程度の物である。

そんな「常識的なIS」からすると、なるほど。有澤の乗る機体は

確かに一種異様な雰囲気がある。

IS特有の流線形のボディは多少匂わせつつも、武骨で堅牢なイメージを抱かせる機体だ。

顔はバイザーで覆われその表情をうかがうことはできない。

（アイツ、どんなふうに戦うんだろう・・・？）

side有澤

（IS起動完了、各部問題なし、システムオールクリア。いつでも行ける！）

機体と一体になり世界がクリアになっていくを感じる。機体のすべてが理屈ではなく感覚でわかる。

——起動完了。武装を選択してください——

機体からの情報で、装備可能な武装の一覧が現れる。おれは指示に従い、グレネードキャノン×2、

大型ガトリング砲、バズーカを選択しコールする。さらに予備武装としてハイレーザーライフルを選択

機体の各部が輝き、それぞれの武装が装備される。上空には先生が待機している。

（さて、行くか。有澤恭平の初陣だ！）

◇

「有澤君？気分は悪くないですか？無理はしないでくださいね？」
やっぱり何時もの山田先生だ。これであんなに強いんだから人は見

かけによらない。

「大丈夫です、先生。問題ありませんよ」

「分かりました。では、準備はいいですね？」

「いつでも」

ふたりの緊張が高まる。張り詰める。研ぎ澄まし、澄み切らせ、そして……

「おおおおッ！！」

「はあああッ！！」

奇しくも仕掛けたタイミングは同時であった。

「いきますよ！」

「望むところです！」

互いにアサルトライフルとガトリングで牽制し合う。直撃は期待していない。あくまでこれは牽制だ。

一定の距離をたもち、しかし自分の距離に持ち込もうと狙い合っている。

ここでガトリングにバズーカを混ぜてダメージを狙う恭平に対して、両手のライフルで巧みに牽制と攻撃をかける先生。

「さすがですね……ッ！」

「有澤君も……良い操縦ですよ……そこッ！」

「させるかッ！！」

二人の軌道は水平方向のみならず、縦、横、斜めと複雑に絡み合い、

まるでワルツのように見えなくなかった。互いの射撃がリズムを刻み、二人の戦士が跳ね踊る。

（マジですかい・・・射撃戦における先生の強さは想像以上だ。）
（正面からの撃ち合いでここまでなんて・・・やりますね、有澤君！）

射撃の激しさは、さらにヒートアップしていく。二人の間に飛び交う弾丸は、隙あらば両者に食らいつかんとする猟犬のようだ。互いに避けきれず少しづつダメージを受けていく。

「くっ！さすがによけきれねえ！！」

「まだまだこれからですよ！」

ヒュンッ！

「これは、ハンドグレネード！？」

「これでどうです！？」

一瞬、先生からの射撃が薄くなる。わずかに不審に思うと、その手に握られていたのは拳大のハンドグレネードだった。空中でこれを使うとは・・・

「まだ行きますよ！」

さらに連続して投擲される手榴弾。山田先生の隠し武器であるし、当たれば威力もそこそこ高い。

ヒュンッ！ヒュンッ！

「これなら・・・ッ！？」

手ごたえは確かにあった。間違いなく全弾あたっている。ダメージ

を確信した先生。だがしかし、その予想は裏切られ――

「さすがに効きましたね・・・今は・・・。」

――言葉とは裏腹に無傷の恭平であった。

「今度はこちらの番ですッ!!」

両手のバズーカとガトリングを構え、さらに背部に装備した2門のグレネードキャノンを展開する。

(このグレネードは他のとは一味違うぜ?)

有澤製大型榴弾砲『OGOTO』その威力、精度ともに他のそのの追隨をゆるさない。

「――正面から行かせてもらいます。それしか能がない身でしてねッ!!」

「なッ!?!」

グレネード3発を受けて無傷。その外見にふさわしく堅牢な機体であることはやはり疑いようがない。

先ほどの攻撃をものともせず、構えた砲身が雄叫びをあげる

「くっ、このままじゃ・・・押し負ける・・・」

「打ち合いなら負けませんよ!!」

(しかたがありません・・・。大人げないかもしれませんが・・・)瞬間、彼女の姿が視界から消える。

「ここですよ!」

「ッ!!」

ザシュッ！

不意をついての攻撃。大きくシールドが削られる。

「これは・・・！？」

「ハア・・・ハア・・・これで、どうですッ！」

これは、彼女が現役時代に切り札とした戦術だ。

次に使用する武装をコールするかをイメージで機体に伝達し、コールにかかる時間を限りなくゼロに近くするという物。呼び出しにかかるタイムロスを抑え、素早い連撃で確実に相手を落とす。

その速さは、後に知られることとなるシャルルの『高速切替』をも凌駕する。イメージの正確さ、その順番。それに適した戦略。それを維持し続ける集中力。それがあって初めて成り立つ技。元代表候補生の実力は伊達ではない。

（（強い・・・））

お互いに限界。残弾も残り少なく、エネルギーの残りも余裕はない。次で最後。これで勝負がきまる。

「すごいですね・・・先生。不知火をここまで削るなんて。」

「有澤君も優秀ですよ。私もここまでなったのは久しぶりですから」

（これで最後。EN残量がこれだと・・・いけるか・・・？）

（残る武装を使いきる覚悟でいかないと、負ける！）

「いきますよ・・・先生。」

何を思ったかその手のガトリングとバズーカを廃棄。その手に呼び

出したのは2丁のハイレーザーライフル『KRSW』

そして背部の『OGTO』。現状装備できる、最高火力での一斉砲撃。これにかけるしかない。

「こちらものです。」

すでにイメージはできている。あとは体がそれを追走するだけ。

（何よりも早く、誰よりも正確に。必勝の戦術を組み立てる。それが私の戦い。）

——— 空気が変わる。

張り詰めていく。一瞬が永遠にも取れるほどの時間。聞こえるのは自身の鼓動。

張り詰めて、研ぎ澄まし、集約され、静まり返る。そして———

——— 動いた。

「おおおおおおおおお！」

「これが私の——— 全力ですッ！」

凄まじい轟音。互いの持てる全ての力を出し切る。

吹きあがる砂埃と土煙が二人を隠す。

残る兵装、弾丸、体力全てをつぎ込んだまさに死力を尽くした闘い。

「おおおッ！」

「はああッ！」

この壮絶な撃ち合いの末に立っているのは果たして――――

――

模擬戦闘？（後書き）

はあ、文才ホスイ……。せっかく戦闘なのに。なにかアドバイスや感想をいただけると助かります。

※最近アクセス解析というページを見たのですがあれなんですか？ユニークとかそういうの。これってそんなにユニークですか？ネタがけっこうマイナーだと思うのですが。初めて使うので意味を知らないんです。誰か教えて……。PV？プロモーション・ビデオですか？累計13,580でどういうこと？ちっとも分かんないからどうしていいのやら……。

本日は「i m i t a t i o n」タイナカサチさんで執筆いたしました。

アーチャーかつこいいわ……。↑分かる人ならわかる。
ではまた。

決着、そして。（前書き）

皆さんから色々なご指摘をいただきました。

たしかに効果音はしつこすぎましたね。反省しております。

未熟者ですが、未永くお付き合いくださいませ。

決着、そして。

◇

ビッー！

試合終了のブザーがアリーナに鳴り響く。

——勝者、山田摩耶ッ！——

「くっそ、最後のはいけると思ったんだけどな・・・」

結果を言うなれば有澤の負けだ。最後の最後で競り勝ったのは山田先生である。

グシャグシャと髪をかきむしりながら、悔しそうな表情をしている。

「有澤君も立派ですよ！私も本気で危なかったですし・・・」

そう言いながらズレた眼鏡を直す先生。この天然っぽいあたりが先生のらしさではなからうか？

「二人ともご苦労だった。ではこれより君たちにもやってもらう。訓練機の受け取りに來い。」

そう言って千冬が締めくくり、訓練機が運び出される。

「各グループ8名づつに別れる。リーダーは専用機持ちだ。有澤、お前も——」

「織斑君がいいと思いますッ！！」

「ちょ！おまっ——！？」

これ以上ないほどに良いタイミングで発せられた言葉。言った本人の顔には、

“やりたくねえ・・・orz”

——オイ。

「では、織斑。頼んだぞ」

「え・・・」

千冬の言葉を聞いて、女子がにわかに騒ぎ出す。

「あたし、織斑君とがいいな〜！」

「I sの操縦教えて！」

「一緒に頑張ろうね！」

ずいっと寄ってくる女子に、多少引きつつも、しかし班長であるために無下にあしらえない一夏。

無論、班長じゃないからってそんなことはしないし、出来ない一夏ではあるのだが。

（だれか助けて・・・）

助けを求めてあたりを見回す一夏。と、その視線の先には・・・

（あ、有澤！）

気づいてくれよと願いつつ必死に念を送る。と、彼がこちらを振り向き・・・

「――ニヤリ」

「~~~~ツ!!」

意地悪な笑みを浮かべてこちらを見ているではないか。完全に確信犯である。

なぜ同じ班なのに助けてくれないのだ!そうか、そんなに俺が嫌いなのか……。そうかそうか……

「……鬱だ。死のう……」

「わー待て待て。悪かったって。手伝うから、な?早まらないでくれ」

「……おう」

こうしてどうにかこうにか二人で実習をすることになったのだった。

◇

「あ、ああ。ここはこんな風にしてだな……。」

女子の態度に若干引き気味ながらも、しかしちゃんと自らの仕事を全うする有澤。その表情はけっこう必死である。すぐそばの一夏も同様だ。

（にしても、有澤って実はっけっこう・・・）

ふとそんなことを考える一夏。皮肉屋っぽくてぶっきらぼう（単に照れているだけ）みたいだけど、なんだかんだいって、意外と面倒見がいいみたいである。

事細かに、それでいて分かりやすいのだからすごい。他の班の女子が、うらやましそうに見ているのには気づかないふりをしているのだろうか？

——きつとそうに違いない。

（俺も、しっかりしないと。）

気を引き締める一夏であった。



「では、実習を終わる。各自着替えて教室に戻るように。では、解散」

ふう……。疲れた。——色々と。

目のやり場には困るし、女子を抱き抱えたり、なんとも言えない疲労感が全身を支配している。

「しっかし重いな、これ」

額の汗をぬぐってそう漏らす。ちょうど今、専用のカートで訓練機を片付けているところであった。

この専用のカートは電動であつたりするわけではないので、強いて言えば動力Ⅱ人間である。

力仕事は男のすることと思っている（女尊男卑のせいである）ので、別段、いやなわけでは無いが、訓練の後にこれは正直キツイ。

「よう、手伝おうか？」

頭上からそんな声が聞こえる。ふと頭を上げるとそこに有澤がいた。

「お？有澤か。すまない、たすかるよ」

「いいっていいって。よっと」

そう言ってカートを押してくれる。ずいぶんと楽になった。やっぱり持つべきものは友達だな！

「俺は織斑一夏だ。宜しくな」

「おう。有澤恭平だ。恭平って呼んでくれ。名字で呼ばれるのは好きじゃないんだ」

こうして並ぶと、一夏より、5センチほど身長が高く、引き締まった体をしていた。

「さっきはまともに自己紹介もできなかったからなあ・・・やれやれ」

・・・まああんな空気の後では確かに自己紹介なんてできようはずも無いわな。

「そうだったな。あとで色々聞かせてくれよ」

「ああ。だけど、その前にシャワー浴びたい・・・」

（よかった。普通に話せる奴だった・・・。）

内心、ホントに意地悪な奴だったらどうしようかと真剣に考えてい

たのだ。

「ふう、これで終了っと。お疲れ」

「ああ、サンキューな」

（あとで、色々聞かせてもらおうっと）

こうして、長い一日と、波乱に満ちた（？）演習が終わったのであった。

決着、そして。（後書き）

ふう、疲れた。なんで何時も深夜投稿かって？そこしか空いている時間が無いのさ

次の次あたりでシャルルの正体をばらします。

本日は「アメーzing・グレース」でお送りしました。いいですねえ・・・。

癒されますよ。ホントに。歌詞の意味は分かりませんが、とにかくいいです。

皆さんも一度聞いてみればいかかでしょう？
ではまた。

世話をかけるな・・・（前書き）

屋上で弁当っていいよなあ。ちなみに筆者の高校は立ち入り禁止です
ので、どこぞのドラマ宜しく仲良く屋上でってことができない
ですね・・・。

あとちょっとネタを入れてみました。

そんなわけで第九話です。

世話をかけるな・・・

◇

「はー疲れたわ」

ため息交じりにそう漏らしたのは恭平だった。模擬戦をした上に片付けも手伝ったのだから当然だろう。

「そうだなあ、初日からハードだったな？」

すでに着替えは終わり、汗も流した。今ここにいるのは一夏と恭平二人である。

シャルルはと言うと、

「さ、先に行ってて、ね？ いいからっ！」

と言われ仕方なく先に来たのだ。なんで一緒に着替えたがらないんだろうか？

——俺のこと嫌いなのか？

心なしか、恭平がシャルルを見たときスウッと目を細めていた気がする。睨んでいたわけではないようだけどさ。

「まったくだな。さてそろそろ『有澤、今いいか？』はい？ 構いませんが？」

入ってきたのは千冬であった。

「部屋割りや今後のことで話がある。職員室まで来い」
「分かりました」

ああ、部屋割りか。どうなるんだろうな？ 空き部屋とかあんのかな？

さすがに女子と同室・・・にはならないよな？

「すまん一夏、ちょっと行ってくる。先帰っててくれ」

「おう、先に行ってるよ」

そう言って更衣室を出ていく。これで完全に一人だ。ここに長居することもないので帰ろうとした時、

「あ、良かった。織斑君」

「なんですか？山田先生」

ちょうど山田先生と出くわした。何か用があるのだろうか？

「あ、有澤君はいないのでですか？良いお知らせなのに・・・」

「ああ、さっき千冬姉が引っ張って行きました。で、良い知らせとは？」

「フッフ、なんとですね、大浴場が今月下旬から使用可能になりました。有澤君とデユノア君にも伝えてくださいね？」

・・・ホントに？何という幸運！なんという僥倖！！

風呂好きの俺にとっては何にも勝るプレゼントだ。これは嬉しいッ！もう先生の目の前だということも忘れて思わずガッツポーズである。

「よっしゃあ！！」

「そ、そんなに嬉しいですか？じゃあ私はこれで戻りますね」

「ハイ！ありがとうございます！」

おれはこのビッグニュースをいち早く伝えるため更衣室を飛び出した。

side 恭平

「さあて、一夏は戻ってるかなって」

千冬から、職員室での説明を聞き終え、その足で教室に戻る恭平。ちよつと長くなってしまったが、一夏もきつともう戻っている頃だろう。

「しかし教室まで遠いな。授業に間に合うのか？これ」

割と切実な悩みになりそうな気がしながら、教室の手前まできた。

「おい、一夏く？」

なんのためらいも無くガラガラくとドアを開け・・・

「・・・あ？」

俺の思考はそこで止まった。

side 一夏

「ッ!？」

なんだ、今のは？何かが体を駆け抜けた。なにか誰かが助けを求めているような・・・。

なんというか、こう、背筋が粟立つというか・・・

「ハッ！」

そこまで考えてハタと足を止める。今間違はなく先に行った有澤が教室に向かっている。これはいい。ここまでならば問題はない。

が、この時間帯に教室に行くのはマズイ！非常にまずいことこの上ない。自殺行為だ。

（休み時間にはまだ余裕がある。まだ女子が中で色々やってるはずだ。着替えたりとか・・・）

一夏の頭がフルスピードで回転し始める。

（だけどアイツはこれを知らない！万が一ドアを開けでもしたら・・・）

その先に待つのは死、である。

（恭平！無事でいろよ！？）

我知らずのうちにかけ足になっていた。

side 恭平

（これは・・・面倒なことになった・・・。）

「ねえ、有澤君？ちゃんと目を合わせてお話しようよ・・・？」

背後から、首筋にそっとやさしく腕をまわしてくる女生徒。その仕草は優しく、慈しむようですらあった。が、肝心の目はちっとも笑っていない。

「そうだよ・・・こっち向いて・・・？」

今まさに必死になってドアにかけた手を、別の女生徒が体を密着させて阻止する。その柔らかなふくらみとともに俺の腕はしっかりホルドされてしまった。

「い、いや、その、済まなかった。この通りだ。だから・・・」最後の希望を、と思うもしかし現実には、冷酷にも彼のかすかな希望を打ち砕いた。

「ダメなんだよ・・・？ちゃんと責任とってもらわないとね・・・。」

耳元で甘く優しく囁いてくる。体をさらに密着され、女子特有の甘い匂いが彼の鼻孔をくすぐる。

「・・・有澤君？」

「な、なんですか！？」↑完全に声が裏返っている。

「————ちょっと、お話しようか・・・？」

「アッー！！」

世話をかけるな・・・（後書き）

はい。見事にやらかしました。でも実際ありそうじゃないですかね？
まだ続きますよ。

世話をかけるな・・・？ (前書き)

前回の続きです。

世話をかけるな・・・？

◇

「有澤ッ！！」

一夏がついたときにはすでに、すべてが終わった後だった。

（この静寂、遅かったというのか・・・？）

「う・・・い、一夏・・・？」

「恭平！？喋るな、今保健室に！」

何という惨状であろう。彼の制服はヨレヨレ。髪は乱れ、目には隈ができている。

この短時間で隈ができるとは、一体何が？

数分まえの彼とは似ても似つかないほどにボロボロになっていた。

「この姿を見ろ・・・。女子の着替えを覗いた末路だ・・・」

「しっかりしろ！恭平！」

「覗いた上に許しを乞おうなど・・・元より無理だったのだ・・・」

「大丈夫だ！とにかく保健室へ！」

「世話をかけるな・・・」

「恭平ッー！」

そういつて、彼はゆっくりと崩れ落ちた。

その後、意識を取り戻した恭平の必死の謝罪が功を奏し、なんとか許された。

が、彼はその代償に「スケベ大魔王」の称号を背負ってしまったのだったとさ……。

「……なんでさ」



今俺たちがいるのは屋上である。通常であれば危険なんだといって立ち入り禁止になっているのが常であるが、ここIS学園の屋上は違う。それどころかテーブルと椅子が並べられ、季節の花々が咲き誇っている。ちなみに俺たち、というのは一夏といつもの面々、十シヤルルである。

「それにしても、あのような不埒な方でしたんですね!？」

「まったくよねえ、もうちょっとマトモなヤツかと思ったけど」

「あのような変態趣味があるとはな!」

今はもう食事も終わり、昼食後の雑談に花を咲かせていたのだが、話題はもっぱら恭平のことだった。

「まあま、事故だったんだし許してやれよ、いいじゃないか、ちょっとくらい」

恭平をフォローすべく、軽く言ったつもりが……

「一夏さん!?! 女性の体を何だと思っていまして!?!」

「なに？アンタもアイツとおんなじなワケ？」

「しばらく見ないうちに変態趣味に走るとは。見損なったぞ・・・」

「———どうやら逆効果だったようである。」

（ドンマイ恭平・・・俺はお前の味方だぜ）

一人、そう心の中で呟く一夏であった。

世話をかけるな・・・？（後書き）

今回はちょっと短め。ネタはご存知弱王からでした。感想やアドバイスお待ちしています。

本日は・h a c k／／G・U・の「やさしい両手」でした。あれを使ったA CのM A Dがあるのをご存知ですか？なかなか好きなんですよね、アレ。ではまた。

発覚（前書き）

えゝ突然ですが、この先誰を有澤にひっつかせようかとなやんでまして・・・。

一夏は全然困りませんが、有澤どうしよう？オリキャラ作るのもアレだし。

誰が良いですかね？みなさん何かありますか？

発覚

◇

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・」

ドアを開け、部屋に入ってまず出たのは大きなタメ息であった。
今まで我慢していたものがすべて出てしまったような深いタメ息は、
シャルル自身が驚くほどだった。

（まったく・・・・・・・・。何をイライラしているんだろうね・・・・）

アリーナでの自分の態度が急に恥ずかしくなってくる。一夏も面食
らっただろう。

恭平は何か、見透かすような視線を向けてきていたが・・・・？

（まさか・・・・・・・・。そんなことはないよね・・・・？）

クシャクシャと髪を掻きまわしてもう一度タメ息をつく。

「シャワーでもして気分を変えよう・・・・」

そう呟くと、クローゼットから着替えを出してシャワールームへと
入って行った。

◇

「やれやれ、エロい（↑誤字にあらず）目にあった・・・・」

「そんなに落ち込むなよ、大魔神」

「・・・・死にたいのかね？」

そんな軽口を言いながら歩いてくるのは一夏と恭平である。
今日の授業や予定はすべて終了し、あとは少し休憩して夕食、その後就寝である。

「そう言えば恭平、部屋はどうすんだ？」

たしか千冬とそのことについて話していたのではなかっただろうか？

「ああ、空き部屋ができるまで、教職員の方の空き部屋を拝借している。山田先生が色々交渉してくれてるみたいだ」

「なるほど。大変だな」

「そうでもないさ。お前は確かシャルルと同室なんだっけか？」

傍らの一夏にそう聞くと、ちよつと嬉しそうに、

「そうなんだよな、やっぱり男同士だと気を遣わなくていいからな、ありがたいぜ」

まあ、女子と同室じゃあ気を使うよな。というよりは、心が折れる。間違いない。

「ただ、最近避けられてんのかな？一緒に着替えたがらないし・・・」

「そんなことはないと思うぜ？ただな、一夏」

「ん？」

そういうと、足を止め一夏に向き直る。その顔には先ほどのふざけはなく真剣であった。

「どんな時も、ちゃんと話を聞いてやること。どんな小さなことでもだ」

「お、おう？」

「それからな、一夏。———どんなことでも受け止めてやれ」

そう言ってニヤツと笑う。だがその笑みは、どこかいつもと違っていたのは気のせいなのか――。

「じゃ、おれは職員棟の方に行くからな」

「おう、また明日な」



ガチャリ――

「あれ？ シャルルがいない？」

ドアを開けるとそこにシャルルの姿はなかった。が、すぐにシャワーの水音に気がつく。

（シャワー中なのか……。そういや、ボディーソープ切れてたんだっけ？）

てっきり自分が先に使うとばかり思っていたので替えを置いていなかったのだ。

（とりあえず、声をかけてドアのそばに置いてくるか）

――ガチャリ

あら？ ドアはさっき開けてきたんだが……。？ ああ、シャルルがコレを探しに来たのか。

「ああ、悪い。替えを出し忘れて――？」

「い、い、いい、いち、か……。？」

「……。え？」

なんと風呂から出てきたのは見たこともない女子の姿であった。なぜ女子と分かったか。愚問である。

あまりにも簡単な話だ。だって———胸があるんだから。

シャワーに濡れた髪は、わずかなウェーブのかかったブロンド。手入れの行き届いたそれは、柔らかくしなやかで、そして、うつくしい輝きを持っていた。

すらりとした体は脚が長く、腰のくびれも相まって魅力的なラインを生み出している。

金髪、そして碧眼であることから、日本人ではなく外国人であることは容易に察せられた。

絹のような美しい肌にはシャワーの雫が乗っており、その美しさにおもわず釘づけになってしまう。

「み、見ないでッ!!」

勢い良く閉められたドアの音にようやく我に返る。唐突に周りの音が戻ってくる。

突然の、そしてあまりの事態に思考がまとまらない。冷静になれば、どこかで見たような顔立ちであることにも気づけただろうに。

「え、えっと・・・ば、ボディソープ、置いておくから、な・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

向こうも同じように衝撃を受けているのだろう。絶句している気配が伝わってくる。

何が何なんだ!？ シャワー室にはシャルルがいるはずだ!

他人が勝手にここのシャワー室を使うなんてことは考えられない。
だとするならば。

（あれはシャルルなのか・・・？いや、だとしたらなんで胸——
胸、綺麗だったな・・・。って!!）
問題はそんなことではない。

——ガチャ

心なしか控え目に響いたその音は、しかしそんな音にすら体は敏感
に反応し、思わずこわばってしまう。

「い、今上がったよ・・・？」

「お、おう・・・」

背中越しに聞こえる声は—————そう、声は確かにシ
ャルルの物であった。
俺は未だ荒ぶっている心臓の鼓動を無理やり抑えつつ、こわご
わ後ろを振り向く。

「———」。

女子がそこに立っていた。

発覚（後書き）

さて、こんなかんじですかね。

ここでアンケートです。恭平とくつつかせるのをだれにするか。皆さんの中で何かありましたらキャラの名前を書いてください。ないようでしたらこっちで決めちゃいます。

ご協力、宜しく願います。

本日はタイナカサチさんの「辿り着く場所」でお送りしました。感想、アドバイス、お待ちしております。ではまた次回でお会いしましょう。

生まれてきた意味？（前書き）

えゝ引き続き、恭平にだれを絡ませるかアンケートを実施中です。
今のところラウラが優勢かな？みなさんもどんどんかいちゃってください
ご協力お願いします。

生まれてきた意味？



部屋には二人の男が互いに無言のまま向き合っていた。いや、ここではもう男女と表記する方が的確なのかもしれない。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

二人の男女、シャルルと一夏はかれこれ小一時間はこうしているだろう。

かたや、狙ったわけではないとはいえ相手の裸体を見てしまい、かたやルームメイトを騙していたという罪悪感。羞恥心や後悔がないまぜになった感情が胸の中で渦巻き、それゆえ視線を合わせられないでいた。が、いつまでもこうしているわけにもいかない。

「あ、あのさ。お茶でも飲むか・・・？」

先に沈黙を破ったのは一夏であった。なにか飲み物があつた方が話しやすいと思ったのかもしれない。

その顔には焦りとも緊張ともつかぬ表情が見て取れた。

「う、うん。もらおうかな・・・」

おもむろに放たれた言葉にビクツと肩を震わせ、それでも消え入りそうな声ではあったが、小さくそう呟いた。だが、依然その視線は伏せられたままだ。

「お、おう。今淹れてくるよ・・・」
そういつて一夏は電気ケトルでお湯を沸かし、お茶っ葉を用意するが、

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

お湯が沸くまでの間がまた沈黙の再来だった。いつもならばあつという間に沸くはずなのに、今はその時間すら長く感じた。まるでこの部屋だけ時間が止まってしまったかのように。

「もういいだろ。ほら」

息のつまるような緊張の後、ようやく出来たお茶を湯呑に入れて手渡す。

「あ、ありがと———きゃっ！」

が、渡すときに指先が触れあってしまい、シャルルが驚いて手を引っ込める。そのせいで、落としたかった湯呑を持ち直したはずみにより、一夏の手に熱いお茶がかかってしまう。

「熱ッ！水、水！」

バタバタと台所の水道に駆け込み、水道の蛇口を思いっきり捻る。ジャーっと、勢いよく流れだす水に指先を突っ込み、どうにか事なきを得た。

「ご、ごめんね！？一夏、大丈夫！？」

あわてたシャルルがこちらに走り寄ってきた。軽くパニック状態なのか、赤くなった手を見るなりその手を取って痛々しげな表情で見つめる。

「ごめんね。ああ、こんなに赤くなってる・・・」

「大したことないって。冷やしたんだから火傷にはならないだろ」

「ううん、ダメだよ。すぐに氷もらってくるね」

赤くなった手を見たシャルルはすぐにでも部屋を出て行こうとするが、

「待て待て。今その格好で行ったらマズイだろ？氷はなくても大丈夫だしさ」

今のシャルルの恰好はと言えば、いつも部屋で来ているのと同じスポーツジャージなのだが、一夏にばれてしまったためであろうか？胸を隠していた特別製のコルセットを着けていなかった。

その上で、スポーツジャージなんていう体型のよくわかってしまう服装をしているものだから、女の子であることがハッキリと分かってしまうのである。

「でも――」

「いやいや、大丈夫だって。それに、な。さっきからその、色々当たってるんだが・・・？」

「ッ!？」

言われてからやっと自分の体勢に気付いたシャルルは、あわてて一夏から離れる。

「・・・えっちい」

「なあッ!？」

なんという不条理!これではまるで悪者扱いではないか!断固抗議する!

「心配してるのに・・・」

「あ、あはははは・・・。

シャルルは控え目ながらも、しかし確実に上目づかいで女の子特有の抗議の視線を送ってきていた。

「と、とりあえずほら、お茶、冷めちゃうからさ」

「う、うん。ありがとう」

今度はちゃんと湯呑を受け取ってくれた。ちょうどよいくらいにぬるくなったお茶を一口。

一夏もそれにならって喉を潤すと、先ほどの疑問をぶつけた。

「なんでまた男のフリを？ なにか理由でもあったのか？」

「うん・・・。それは、その・・・」

ようやく会話が成り立ったとはいえその声は小さく、決して進んで語ろうとしているものではなかった

「ああ、すまない。無神経すぎたよな？ ごめん。シャルルが話したくないなら――」

「ううん。話すよ。一夏にも聞いて欲しいから・・・」

そう言って一呼吸置くと、シャルルは静かに語り始めた。

生まれてきた意味？（後書き）

文才が無い……。いつも1話でイイ感じに話をまとめたのにいつもずるずると

前編後篇みたいになってしまう。こんな作者を許して下さい。

長くていやだとか、読みずらいとかあれば遠慮せずに行ってください。

出来る範囲で直していきたいです。

また続きます。

生まれてきた意味？（前書き）

えー今非常にマズイです。親にこれを書くことは賛成してもらって
いたはずなのに

最近急に態度が変わりました。しかもサイトに登録してあるという
と血相を変えて起こる始末。有害サイトかと疑っているようです・
・。ネットに理解の無い親を持つと苦労するな・・・。ちなみに同
様の理由でケータイを持たせてもらっておりません。高校生なんで
すがね・・・。

生まれてきた意味？



「あのね、性別を偽っていたのは、その、実家の方から言われたかなん。」

「うん？実家って言うと、確かフランスの——」
姿勢を正してそう語りだしたシャルル。それに応じて一夏も姿勢を正す。

「そう。フランスのＩＳ企業、『デュノア社』僕の父がその社長」
「そうか、お父さんが社長なのか・・・」
「うん、その人からの直接の命令なんだよ、これはね」

——おかしい。明らかにおかしい。
何がおかしいかと言えばシャルルの様子である。意を決して明かしてくれた秘密。その瞳にはいつもとは違う強い光があった。しかしだ。実家の、それも父親の話になったとたん、その顔が曇り始める。

「命令って・・・いくら社長だからって、親だろ？そんな話が——」
——あっという間は過ぎない。そう続けようとした一夏の耳に、信じがたい言葉が飛び込んでくる。

「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ・・・」

絶句した。一夏と言えど、普通に世間を知る高校生だ。「愛人の子」と言われて何も分からないほど
子供でもないし、鈍感でもなかった。

「引き取られたのがちょうど2年前。引き取られたときに健康診断とか、色々検査をしたんだ」

シャルルは、おそらくは言いたくはないであろうことを淡々と語っていく。まるで他人事のように。

「・・・・・・・・」

「そしたらその過程で僕に高いIS適性があることがわかったんだ。それを知った父は非公式にはあったけれど、僕をデュノア社のテストパイロットにしたんだ。公表しなかったのは、年齢的な問題もあっただろうね」

ただひたすらに、淡々と語っていく事実。どうして——どうしてそんな他人事のように・・・。

どうしてそんなにも無表情なんだ。なにかもあきらめちゃったような顔して・・・。

それが、一夏にはただひたすらに許せなかった。その拳が白くなるほど強く握っていることにも気付かずに。

「父に直接会ったのは実は2回くらいしかないんだ。普段は別邸で生活していたからね。言葉を交わしたことでだってそんなに多くはないんだよ。一度だけ、本邸に行ったことがあるけど本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！！』ってね」

ハハハ、と、力なく愛想笑いをつなげるシャルルに、一夏は笑いで返すことはしなかった。

「でもね、それからすぐにデュノア社は経営危機に陥ったの」

「え！？だって、デュノア社は量産機の世界シェアが世界第3位の

はずじゃ・・・？」

予想していなかった言葉に、今まで沈黙を保っていた一夏が口をはさむ。

疑問に思うのも無理からぬ話である。世界シェア第3位の優良企業の実態が、経営危機であるなど一体だれが想像しようか？

「結局、リヴァイヴは第2世代型なんだよ。ISの開発のにはものすごくお金がかかるの。ほとんどの企業は国からの支援なくしてはやっていけないんだ。例外的に、日本の『有澤重工』は違うみたいだけど。それでね、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね、第3世代型の開発は急務なんだよ。国防のためでもあるけれど、資本力で負けている国が、開発状況で最初のアドバンテージをとれないと悲惨なことになるんだよ」

ここまで聞いて、一夏はセシリアの言葉を思い出した。確か彼女も自国の試験型である第3世代機のデータ収集が目的でこの学園に来ていたのではなかったか。

おそらく同じ欧州からということを考えれば、ラウラの転入についてもそのあたりの事情が絡んでいることは間違いなさそうだ。

「第3世代型の開発に着手したはいいんだけど、圧倒的に遅れてのスタートなうえに、時間もデータもすべてが不足していてね、形にならなかったんだ。そうして政府からの支援がカット。次のトライアルで選ばれなかったら、そもそものIS開発権すら剥奪されてしまうんだ」

「何となく話は分かったけど、それがどうして男装に？」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それとね――」

シャルルは言葉を切ると視線をそらし、どこか苛立ちを含んだ声でこう続けた。

「可能であれば、日本における特異点との接触、及び搭乗機体データの奪取」

「ッ！？それって・・・」

「そう、僕は白式のデータを盗めって言われているんだよ、あの人にね」

話を聞く限り、父親は一方的にシャルルを利用しているのだろう。たまたま高いIS適性があった。

ちよūdよく利用できる駒があった。その程度にしかとらえていないのだろう。

そのことはきつと、シャルル自身が一番わかっているはずだ。だからこそ、なのだろう。

父親のことを他人のように話のは。自分の中でアレは他人なのだと区別するために。

「とまあ、そんなところかな。でも、一夏にばれちゃったし、僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、潰れるか他企業の傘下に入るか……。僕にとってみればどうでもいいことだけど」

「ああ、なんだか話したらすっきりしたかな。聞いてくれてありがとう。それと、騙しててゴメン」

そう言って、深々と頭を下げるシャルル。だがのその瞳にはもういつもの光はなく、ただ諦めがあるだけだった。

「—————いいのか、それで」

「・・・え？」

「それでいいのか！いいはずがないじゃないか！親だからって、愛人の子だからってどうして自由を奪う権利がある！？そんなのあるはずないじゃないか！」

気づけば一夏は語気も荒くシャルルの肩を揺さぶり、顔を上げさせていた。

「い、一夏・・・？」

「親がいなけりゃ子供は生まれない。そんなことは分かってる！だけどだからって生まれてきた子供を好きにしている理由にならない！絶対に、お前だけの生まれてきた意味があるはずだ！」

「生まれてきた・・・意味・・・？」

言いながら気づいた。ああ、これは自分のことなんだって。親に捨てられ、散々苦勞をかけてきた。

そんな自分を支えてくれた千冬姉のことを思わずにはいられなかった。

「ど、どうしたの一夏？」

「あ、ああすまない・・・。俺たちは両親に捨てられたから・・・」

「あ・・・」

おそらく、事前に知っていたであろう「両親不在」の意味を知ったシャルルは、

「その、ゴメン」

「いいんだ。今更会いたいなんて思わない。俺の家族は千冬姉だけだ。それよりこれからどうするんだ？」

「どうするって、本国に呼び戻されて、良くて牢屋とかじゃないかな？」

そう語る表情はあまりに痛々しいものだった。静かな諦観が支配しており、かすかな希望さえ残ってはいなかった。このままでは、その心が壊れてしまう。

「——ここにいればいい」

「・・・え？」

「だからここにいろって。特記事項第二一。本学園における生徒はその在学中に、あらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

そうだ、これは使える。普段は何の役にも立たないと思っていたが、こんなところで活躍するとは。

一度冷静になると、自分でも驚くほど頭がさえてくる。

「これを使えば、少なくとも3年間は無事にこの学園で生活できる。これからのことはその間に考えればいいじゃないか」

「一夏」

「ん？」

「よく頑張ったね。特記事項って、五十五個もあるのに」
「勤勉だからな、俺は」

そういうとシャルルはフフッと笑う。良かった。ようやく笑ってくれた。が、

(う……。こうしてみるとシャルルってけっこう……)

顔立ちの良さ、中性的な出で立ち。なによりその優しい雰囲気はシャルルの魅力を最大限に活かしていた。今更ながらにその無防備さにドキドキしてしまう。

「まあ、決めるのはシャルルだ。時間はあるんだしゆっくり考えればいいさ」

「うん。ありがと、一夏」

そういつて笑うシャルルの笑顔は、今まで見たものとは比べ物にならないほど綺麗だった。

生まれてきた意味？（後書き）

はあ、長かった。原作を流用しすぎるのもアレなので、自分なりの表現を多々入れましたが、どうでしょう？ 雰囲気崩れてないですかね？

そうそう、最近活動報告なるものも使い始めました。何書いていいのかさっぱりですけどね。

本日は、英雄伝説 空の軌跡より「銀の意志 金の翼」でお送りしました。あれは良作だったな、俺のやったことのあるRPGの中でも。

みなさんもなにか、この曲良いよってのがあったら教えてください。いつも何か聞きながら書いているので。
ではまた。

学年別トーナメント？（前書き）

思ったけどラウラの停止結界だっけ？あれって結構強いよな？
今はまだ完全に使いこなせてないみたいだけど、将来的にはかなり
期待できるんじゃないか？戦闘描写も頑張らないとな・・・。
ではどうぞ。

学年別トーナメント？



「「あ」」

二人揃って間抜けな声を出してしまう。場所は第三アリーナ。今日の日程がすべて終了した放課後、そこにいたのは鈴とセシリアであった。互いの姿を認めるとそのまま一瞬固まってしまう。

「あ、あら。鈴さんではありませんか。どうしたのですか？」

「セ、セシリアこそ。アンタこそどうしたのよ」

お互い視線を彷徨わせたまま、なにか言い訳でも探すかのように言葉返す。

「いえ、放課後にちょっと訓練をと思ひまして・・・」

「そう・・・奇遇ね。アタシもなの」

二人の間に見えない火花が散る。狙うは優勝か。それとも別の何かか――――

「よい機会ですわ。先日の実習も含めて、どちらが上であるかはつきりさせようではありませんか？」

「・・・いいわ。受けて立とうじゃないの！」

両者ともメインウェポンを呼び出し対峙する。と、そこへ――――

「「ッ！！」」

放たれた一発の砲弾。超高速のそれは両者の間を一瞬で駆け抜けていく。

そろって攻撃の来た方向を見やると、そこには漆黒のISが不敵な笑みを浮かべて佇んでいた。

機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』。ドイツ製第三世代型。登録操縦者名——

「ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・」
セシリアの表情がこわばる。そこには、同じ欧州連合の競争相手であること以上の物が含まれていた。

「・・・ほう？今のを避けるか。温室育ちのメス豚にしてはそこそこできるようだ」
いきなりの、しかも挑発としか取れない言動に、二人は口元を吊り上げ、睨みつける。

「なに？ヤル気なワケ？わざわざボコられに来るなんていい度胸じゃない」
「あらあら鈴さん。この方には常識が通じないようですからあまり虐めるのはかわいそうでしてよ」

ラウラのすべてを見下し、侮辱するような物言いに強い不快感を覚える二人。
それでもどうか、その怒りのはけ口を力ではなく、言葉に求めようとした。が——

「二人がかりで量産機一機にてこずるような輩が専用機持ちとはな。貴様らの国の底が知れる」
——全くの無駄であったようだ。

「あゝそう分かったわよ！スクラップがいいワケね？セシリア、どっちが先にやるかジャンケンよ！」

「ええ！いいですわ！すぐにでも」

堪忍袋の緒が切れた二人がまさにジャンケンを始めようとしたその時、

「はっ！二人で来たらどうだ？貴様らのようなメス豚に負ける私ではない」

いっそ清々しいほどはつきりと、侮蔑の表情を浮かべて言いきった。

「・・・は？『どうぞ好きなだけ殴って下さい』って聞こえたんだけど・・・？」

「同じ欧州連合生として恥ずかしい限りですわ！徹底的に叩いてしましましょう！」

明らかな挑発であった。が、怒り心頭のふたりにとってはやどうでもいいことであった。

「さっさと来い！」

「「上等！」」

◇

「一夏、今日も放課後の特訓する？」

「勿論だ。トーナメントで初戦敗退なんてことにはなりたくないからな」

そう言いながら廊下を歩くのは一夏とシャルル。先日の衝撃的な出来事から数日が経った。

その後もシャルルは変わることなく友人としての付き合いをしてくれた。色々気を使うこともあるだろうにそれをちっとも出さない。それがシャルルのいいところでもあり、時に悪いところなのだろう。

「ええっと、確か今日空いてんのは・・・？」

「第三アリーナだね」

仲良く並んで歩いていたそこへ・・・

「「わぁ！」」

「・・・そんなに驚くことも無いだろう、失礼な」

角から出てきたのは箒であった。突然出てきたので驚いてしまった。

「ああ、すまない」

「ごめんなさい。びっくりしちゃって」

ぺこりと律儀に頭を下げるシャルル。それに氣勢をそがれたのか、ゴホンと咳払いをして

「と、ともかくアリーナに急ぐぞ。時間が惜しい」

まったくだ。確か、IS操縦の練度は運用時間に比例する、って言うってよな？

ISコアの深層意識が時間とともに操縦者の特性を理解し・・・ああもう、理屈っぽいことは分からね。

ともかく、時間が大事なんだってことは分かってほしい。が、アリーナの様子がどうもおかしい。

いつもより人が多いばかりか、何やら慌ただしい雰囲気がある。

「誰かが模擬戦をやってるのかな？でもそれにしては様子が――」

ドゴオンッ！

「「ッ！？」」

突然の爆音。にわかに騒がしさを増す群衆。反射的にアリーナに視線を向けると、そこには――

「鈴！セシリア！」

立ち込める煙を切り裂くように二つの影が飛び出してくる。

さらに目を凝らせば、その奥に漆黒のISが見えた。

「あれは！ドイツの第三世代型！」

「たしかあれって、ラウラってヤツの・・・」

「うん。でも模擬戦にしてはやりすぎだよ」

よくみれば鈴とセシリアのISはかなりの損傷を受けていた。機体から火花が散り、一部ISアーマーは完全に破壊されている。もはや勝敗は誰の目にも明らかだ。だが、ラウラの攻撃は止まらない。

「あああああっ！！」

「鈴さんッ！・・・がつ！」

袖のようなパーツから延びるチェーンウィップで鈴を振り回し、セシリアに衝突させる。

単純だが強力な攻撃だ。そこから始まったそれは、もはや一方的な暴力でしかなかった。

「フッ・・・。専用機持ちと言えど所詮はこの程度か・・・」

叩きつけた二人にラウラの拳が炸裂する。ISの強化を受けた拳だ。

その威力は人間のそれとでは比較にすらならないほど強力だ。

「「あああああッ！！！」」

凄まじい勢いで減少するシールド。このままではいずれゼロになるだろう。だが、それでも攻撃が止まることはなかった。

このまま行けば、機体維持警告領域を超え、操縦者生命危機領域に突入するだろう。
たとえ絶対防御を持つISでも、それでも死なないわけではないのだ。

「フツ・・・ハハ・・・ハハハハッ！」

ラウラのその表情が、歪んだ歓喜に、愉悦が浮かんたその時、

「一夏！まって！一人じゃ・・・」

「おおおおお！！！」

一夏の中で何かのゲージが振り切れた。

一瞬で白式を展開し、零落白夜を発動させる。アリーナからの流れ弾を防いでいるエネルギーシールドを切り裂いて、一夏は二人のもとに向かう。

「その手を離せ！！」

漆黒のIS、ラウラ・ボーデヴィツヒを睨みつけた。

「ほう。次はお前か。旧式のISごときが。私の前に立ちふさがるな！」

「うるさい！お前のそれが、代表候補生のやることか！」

「フン。俗物が偉そうな口をきく・・・いいだろう」

不敵な笑みを浮かべた視線とともにその手の武器を構えるラウラ。

「ならばその違いを見せてやる。決定的な違いをなッ!!」

学年別トーナメント？（後書き）

つかれたぜ……。部活の朝練習が時間早くなって朝起きるのがつらい。

これからは大体一日おき、もしくは3日に1度くらいのペースでの更新となります

ご了承ください。

引き続きアンケート募集中です。

本日は「ターゲット赤い衝撃」でお送りしました。なつかしきデジモン……。

ではまた。

学年別トーナメント？（前書き）

最近書き始めたこともあって、ACLRをもう一度手に取ってみました。データは残していたので早速続きから。・・・アレ？青パ
ルが倒せない・・・？

じよ、冗談じゃ・・・？うわー腕が落ちてる・・・。
ではどうぞ。

学年別トーナメント？

side 一夏

「おおおおッ!!」

アリーナのバリアを切り裂き、煙を引き裂くようにして『瞬時加速』。未だ不敵な笑みを崩さないラウラにその刃を向ける。

「それが代表候補生のやることかよ!」

只でさえ燃費の悪い白式で、『零落白夜』と『瞬時加速』の同時使用など自殺行為であったが、今の俺にはそんなことを気にする余裕はなかった。

セシリアと鈴は俺の背後だ。今ここで気を抜けば、三人まとめてやられるであろうことは想像に難くない。同じ代表候補生である、鈴とセシリア二人がかりでこうまで圧倒されたのだ。

普通に考えれば俺に勝機などあるはずが無かった。だが、それがどうした？

今ここで勝ち目が無いから尻尾巻いて逃げろと？そんなことはできない。否、してはいけない。

男として、何より人として、そんなことが許されるはずが無い。

「ぐっ!なんだ・・・?体が・・・動かない・・・?」

だが、その激情を嘲笑うかのように、ラウラはその手をかざす。その瞬間、俺の体が静止する。

振り上げた腕も、突き出した刃も、まるで見えない何かに遮られたかのように動かない。

零落白夜のエネルギー刃すら次第に小さく消えてゆく。

（そんな、このままじゃ三人とも……。考えろ、何かあるはずだ。考えろ考えろ考えろ……。）
だが、残酷にも現実には彼の思いを汲んでくれはしなかった。

身動きができない。自分の周りの出来事がひどくゆっくりに感じられた。暴れる心臓の鼓動も、どうにかして動かそうと足掻く心も、自分の物ではないかにすら思われた。

「大口をたたいた割には大したことはないな。貴様もそのメスのように地に這いつくばるがいい」

（ああ、マズイな……。）

ラウラの背負っている背中 of 大型の砲身がゆっくりと展開される。自分に砲口を向けられているというのに、なぜか冷静でいる自分がいた。

「消えろ！」

向けられた砲身。愉悦に吊り上がる口元。絶体絶命のその時――――

「離れて!!! 一夏！」

救世主が舞い降りた。

sideシャルル

「離れて!!! 一夏！」

ラウラからの砲撃が、今まさに一夏に放たれようとしたその時、な

なんとか間に合うことができた。
そのまま両手のライフフルで牽制をかけ、両者を引き離す。

「・・・どういうつもりかな？いくらなんでもやりすぎなのは分か
ってるはずだよ？」

普段のシャルルからは想像できない冷やかな視線。ありありと浮か
ぶ怒りの表情。

シャルルがここまで怒りをあらわにするというのも相当なことであ
る。

「フン。フランスのアンティークごときが立ちふさがるか」

「未だ量産のできないルーキーよりは動けると思うけどね」

言いながら僕は個人秘匿回線を開いて、一夏に話しかける。

（一夏、聞こえる？）

（あ、ああ。助かったよ、シャルル）

（『瞬時加速』はまだ使えそう？）

（・・・ぎりぎり行ける）

よかった。これなら下の二人も助けられる。視線だけは油断なく隙
を探りながら、短く指示を出す。

（一夏、『瞬時加速』で下の二人を連れて離脱して）

（分かった。シャルルは？）

（あの娘を引きつけて時間を稼ぐよ）

「悪いけど、止めさせてもらおうよ」

ハッキリと目を見て言い切る。その瞳に迷いはない。

「ならば力づくで来い！」
「そっちがその気なら！」

空中で両者が激突した。



互いに絡み合うような軌道。そのはげしい戦闘の中でもシャルル得意の『高速切替』がラウラの反撃を許さない。弾切れになった銃と素早く切替え、攻撃の手が止まることはない。

その隙に、素早く二人を連れて一夏はその場を離脱した。

「う・・一夏・・？」

「みつともないところを・・お見せしましたわね・・。」

「喋るな・・。（シャルル、二人は無事だ。意識もある）」

（分かった。一夏は二人を連れてはやく安全なところへ・・ッ！）

「おもしろい。ならば世代差というものを見せつけてやろう」

途切れることなく降り注ぐ銃弾を、防ぎ、あるいは避けていたラウラが、フツッと体勢を低くする。

おそらく『瞬時加速』で一気に間合いを詰める気だ。さすがのシャルルも一気に間合いを詰められれば苦戦は必至である。だが一夏は二人をかばっているためその場から動けない。だがシャルル一人では危険であることも理解できてしまっていた。

「行くぞッ！」

「くっ！」

まさにラウラが弾丸の如く飛び出そうとしたその瞬間――――

ガギンッ!!

「なにッ!？」

金属同士によるはげしい衝突音。ラウラは急に飛び出てきたその影に加速を中断させられる。

「あれは・・・!」

煙が晴れてクリアになった視界。そこに立っていたのは――――

「――――よう。随分調子良さそうじゃねえか？」
有澤恭平がそこにいた。

学年別トーナメント？（後書き）

素朴な疑問が一つ。ISのシールドの出力とか耐久性って、機体ごとに色々強さ違いますよね？それとも同じなのかな？そのような描写が無いからイマイチ分かりづらい。この際、恭平の不知火のシールド出力をガツガチにしてみようか・・・？

本日はカプセル（↑英語ワカラン）で「starry sky」でした。

ではまた次回で。

学年別トーナメント？（前書き）

えーみなさんのおかげでユニークが一万を突破いたしました。
こんな作者ですが、皆さんからの温かいご支援をいただき感謝しております。

今後とも頑張ってまいりますのでよろしくお願いいたします。

学年別トーナメント？



「貴様ッ！」

ラウラの顔が驚愕と怒りに染まる。ラウラの必殺の突撃を止めたのは恭平であった。

シャルルの前に、臆することなく悠然と立つその姿。その顔はまるで別人のように険しく、その視線は竦み上がってしまうであろうほどに鋭い。

「――部分展開、速い・・・」

そう漏らしたのは誰であったか。弾丸の如き速さで飛び込んできたラウラの機体は、がっしりと恭平の右腕に掴まれていた。すでにその手の部分だけISが装着されている。黒く重厚なその腕は、抗うラウラの動きを完全に封じていた。

「さすがにやり過ぎだっていう自覚はあると思うんだがな？」

「フン、次から次へと・・・。目障りだ」

両者、互いに鋭い視線を向けあったまま睨み合う。お互いに微動だにせず、視線をそらすこともない。

先ほどまでその場を支配していた激しい喧騒と爆音はなく、今はただ静かに、しかしそれでいて先ほどよりも激しい戦いがそこにあつた。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

一体どれだけの時間そうしていただろう？決して長くはなかったはずの時間がやけに長く感じたのは一夏だけではなかったはずだ。一触即発の空気。張り詰めたその場の空気を鋭く響いた音が断ち切った。

パンッパンッ！

「・・・やれやれ。これだからガキの相手は疲れる」

そう言って姿を現したのは他でもない、織斑千冬その人だった。先ほどの音は彼女が手をたたいたものであろう。黒の制服に身を包み、いつの間にかその場に立っていた。

「模擬戦をするのは一向に構わん。――が、此処の施設を破壊するような真似だけはしてくれるなよ。そうになると、教師として黙認しかねるのでな。まだ続きをやりたいというなら――」

千冬はそこでいったん言葉を切ると、そこにいる全員に鋭い視線を向ける。

「決着は学年別トーナメントでつけてもらおう」

その言葉に最初に反応したのはラウラであった。

「・・・教官がおっしゃるのであれば」

素直にうなずき、ISの装着状態を解除する。ラウラの体で光がはじけ、装着されていたISアーマーが光の粒子となって消える。

「お前たちもそれでいいな？」

有無を言わせぬ強い口調で聞いてきた千冬に対して、

「あ、ああ」

思わず素で答えてしまう一夏。

「馬鹿者。教師には『はい』だ。デュノア、有澤それでいいな？」

「僕もそれで構いません」

「・・・わかりました」

千冬に促され、返事をするおれに習い、皆もそれに追従する。

「では、トーナメントまでの期間、一切の私闘を禁止する」

パンツ！

手をたたいた鋭い音は、銃声のようにアリーナに響いた。

◇

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

場所は保健室。すでに先ほどの第三アリーナでの一件から1時間が経過していた。その場にいたシャルルと一夏が付き添いで、流れるに恭平も一緒にここに来ていた。

セシリアと鈴は、けがの治療のため保健室に担ぎ込まれ、体のあちこちに包帯を巻かれベッドに横になっていた。その姿は何とも痛々しい。だがしかし、さっきからどうにも二人の機嫌がよろしくない。むっすーとしたまま、黙りこくっているのだ。

「別に助けてくれなくたって良かったのに・・・」

「あのまま続けていれば私たちが勝っていましたわ」

やっと口を開いたと思ったらこれである。まあ、一夏とて感謝してほしくてやったわけではないし、その点について言えば、シャルルや恭平も同じであろう。

「おいおい……。まあ、怪我が大したこと無くてよかったよ。I Sのおかげだな」

タメ息とともにそう漏らす一夏。実際、I Sの絶対防御が無ければ二人とも今頃どうなっていたことか。死んでいたって決して不思議ではなかったのである。

「こんなの！ 怪我のうちに——痛たたたっ！」

「大体、こうして横になっていること自体が——痛ッ！」

ほーら。満足に起き上がれないじゃないか。無理をするなっのな？

「……一夏の言うとおりだ。今は大人しくしておいた方がいい」
「有澤……さん……？」

保健室の窓に背を預けるようにして立っている恭平が、そう口をはさむ。

壁に寄りかかったまま腕を組み、じっと眼を閉じて険しい表情で何事か考えていた彼が、おもむろにそう言う。その声はいつものトーンではなく、一段低いものだった。

何時になく真剣な恭平の姿に、一夏はもちろん、セシリアや鈴、それに加えてシャルルも一様に恭平を見やる。

「絶対防御があったからこそこの程度で済んだんだ。もしなければ、

あるいはあれ以上やられていたらどうなったか。それぐらいわかるだろ？」

「そう・・・ですわね」

「そうね・・・ゴメン。ちょっと軽く言い過ぎた」

恭平の静かな、しかしそれでいながら確かな迫力のある言葉に一瞬たじろく。だが、恭平の言葉は正論である。それがわからない二人ではない。と、そこへ――――

バンッ！

「「「「ッ!」」」」

保健室のドアが勢いよく開けられ――もとい吹っ飛んだ。いや、大げさな話じゃなくてホントに。

「こら。保健室では静かにしなさい」

いち早く反応した恭平がそんな正論を呟いてみるがだれも聞いちゃあいない。

「み、みんな？どうしたの??」

状況を飲み込めていないシャルルも幾分困惑気味である。

「「「これ!」」」

ズイッと差し出された紙。どうやらトーナメントについてのお知らせのようなものらしい。

「えゝ何々？」

「『今月開催される学年別トーナメントは、より実践ていな模擬戦を行うため二人組みでの参加を必須とする。なお、ペアが組まれな場合――――』」

「そこまでいいから!!」

読んでいる途中の恭平を無理やり中断させ、

「私と組んで織斑君!」

「宜しくねデュノア君!」

「有澤君!お願い!」

なるほど。3人しかいない男が目当てでここまで来たわけなのね・
・。保健室なんだよ?ここ。

が、ここで一夏があることに気付いた。

(あ、シャルルが・・・)

そう、自分や恭平は何ら問題はない。が、シャルルは女子だ。それを知っているのは今自分しかない。今後の特訓などでバレル可能性だって無くはない。現にシャルルは助けを求めるような視線を送ってきている。

(どうする・・・?怪しまれないような上手い言い訳なんて・・・)

一夏の脳みそがフル回転するも、焦りに追われた頭ではいい案など浮かぶはずもない。が・・・

「悪いな。一夏はシャルルと組むからあきらめてくれ。俺はISが不調で出られそうにないしな」

「・・・え?」

一瞬ぽかんとした女子に向かって堂々と言い放ったのはなんと恭平であった。

(恭平・・・?)

「ま、まあ男同士ってのも絵になるし・・・」

「他の娘と組まれるよりは・・・」

残念そうな表情を隠すこともせず、それでも渋々ながらも納得してくれたようで、ゾロゾロと戻っていく。

「ふう・・・」

「あのっ！有澤君！？」

「ちよっ、一夏！あたしと組みなさいよ！幼馴染でしょうが！」

「で、でしたら私とも！」

・・・こらこら。けが人は大人しくしなさい。

「ダメですよ！」

「？」

何時の間に保健室に入ったのか。によっこりと現れたのは山田先生であった。

「お二人のISの状態を確認しましたが、ダメージレベルがCを超えています。トーナメントの参加は許可できません」

「くっ・・・仕方ないわね」

「不本意ですが！本当に不本意ですが！」

あら？随分あっさり引きさがった。珍しいこともあるもんだ。

「分かってくれたならいいんです。後々重大な欠陥につながるかもしれないから、体もISも十分に休ませてあげてください」

そういつてにつこりとほほ笑む先生。セイトオモイノイイセンセイダナー。

「まあ、そういうわけだ。しっかりやれよ？一夏」

「あ、おい恭平？」

「あの、有澤君!？」

シャルルと一夏が何か聞こうとしたのをしり目に、苦笑いしながらこういた。

「ISの面倒もみないといけないからな。忙しいんだよ」
さらに、皮肉気にやりとわらって、

「そんじゃま、後宜しく」

あとには、ぽかんとした一同が残されるのみであった。

学年別トーナメントの本番まで、あと少し……。

学年別トーナメント？（後書き）

こんばんわ。今日はちよつと眠いので後半がちよつと雑になってしまったかもしれません。しかし、いつもはな氏が長引いてしますな・・。いつになったら戦闘に入るのやら・・。いや、次あたりで必ず——行けるはず・・。

本日はイース・フェルガナの誓いより「バレストイン城 100分間耐久」でお送りしました。がんばって百分聞きとおしたぜえ・・。

学年別トーナメント？



「はあ、すごいもんだな・・・」

六月も最終週。今日のIS学園はいつにもまして慌ただしく、そして活気があった。

それもそのはず。今日から学年別トーナメントの始まりなのである。今日はその一回戦目が行われるが一回戦だけであっても、その注目はぶりはすごかった。観客席には各国政府関係者をはじめ、学園の幹部クラスの人間。各国大使館からの出席者、またそれに随伴するSP。そのほかIS企業の関係者まで、多くの人間が詰めかけていた。今日は早朝から、学園側の生徒による入場者の誘導や受付が行われていた。

「三年生にはスカウト、二年生には一年間の成果の確認、一年生にも有力な新人がいるのかどうかのチェックなんかが入ってると思うよ」

「なるほどねえ、ご苦労さまだな」

あまり気にしていなかったのだろう、ぼんやりと一夏はそう呟く。実際、一夏は全然興味もなければ気にしてもいなかった。

「一夏は、ボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気かりみたいだね？」

どうやら一夏の考えはお見通しのようである。傍らに立つシャルルが、苦笑交じりに聞いてくる。

「もちろん」

鈴とセシリアには参加許可が下りず辞退。恭平はISの不具合を理由に参加を辞退していた。

一般の生徒ならいざ知らず、セシリアと鈴は代表候補生である。各国代表が観戦に来て、なおかつ自国の代表も来ているこの状況で、自分の実力を示せないとあっては、やはり立場に響いてくるのだろう。

「でもなんで恭平は辞退したんだろうな？」

「ISが不調って言ってたよ？万全じゃないなら仕方が無いよ」

うーん？各国の代表や、企業のお偉いさんが来てるんなら、あの『有澤重工』だっているはずだろ？

そこで欠場したらやっぱり、メンツが立たないんじゃないかなあ・・・？

「そうだね・・・でもきつと何か理由があるんだよ。今は試合に集中しよう、一夏」

「やっぱり悔しいだろうな・・・」

無意識のうちに左の拳を強く握りしめていた。

それに気付いたシャルルがそつとやさしく手を重ねてほぐしてくれる。

「感情的になっちゃだめだよ？彼女は現時点での一年生最強だと思うから」

ペアを組んでからというものの、シャルルとはかなり親密になった。もともとシャルル自身はかなり気の利く人間でもあり、日々の特訓で過ごした時間も相まって、お互いに何を考えているのかぐらいはおおよそわかるようになっていた。

「しかし、一組目でよかったぜ」

「なんで？」

「いや、こういうのは勢いが肝心だろ？最初の勢いで負けてたら勝てる相手にも勝てないぜ。」

なんとも一夏らしい考えではあるが、あながち間違った意見ではあるまい。たしかに勢いに左右される部分もあるし、先手必勝とも言えなくもない。

「フフ、一夏らしいね。僕だったら手の打ち晒しちゃうから、ちょっと嫌だったけど。」

この、一件正反対に見える俺たちだからこそ、いいコンビが組んでいるのではあるまいか？

シャルルは確かに優しいし、こっちに色々合わせてくれている。自分もしっかりしなくては、と気を引き締める一夏。

「あ、組み合わせが決まったみたいだね」

そうこうしているうちに組み合わせが決まったらしい。モニターの画面が切り替わり、組み合わせが映し出される。

「「・・・え？」」

おもわず漏らした呟き。驚くのも無理はない。なにせ最初の対戦相手は――――

「ラウラと箒……だと？」

side 一夏

「一戦目から当たるとは……。手間が省けたな」

そう漏らしたのは、目の前で滞空するラウラだ。

試合開始まで後わずか。お互いにISを起動させ、アリーナ内に待機してる。目の前にはラウラ、そして箒の姿があった。

「そりゃどうも……。こっちも同じ気持ちだよ」

試合開始まで5・4・3・2・1――――開始。

「おおおおッ！」

開始と同時におれはラウラへと『瞬時加速』で突っ込む。それに対抗するようにラウラはその手をかざす。

（やっぱりきた！）

ラウラのISが切り札とする、通称『停止結界』。

その正体は、鈴の衝撃砲と同じく、空間自体に圧力をかけて、相手の動きを束縛する力場を発生させるものだ。初見でこれをやられたらまず間違いない何が何だかわからないまま落とされるであろう。

その証拠に、今俺の体もそのかざした手の前に、ピクリとも動かなくなっていた。

「開始直後の攻撃か、単純だな」

「単純でけっこう。俺に出来るのはこのくらいしかないからなッ！」
「そうか。ならば早々に消えろ!!」

いうなり、彼女の背中の砲身がこちらに向けて展開される。

——警告。敵機体の大型レール砲の起動を確認。初弾装填。ロ
ックされています——

（おっと。これはマズいな）

だがな？俺はなにも一人で戦ってるわけじゃないんだぜ？

◇

「一夏!!」

上空から急降下してくる機体。それはシャルルの物だった。

その手に握っているのはショットガン。近距離での射撃戦で真価を
発揮するそれを、ラウラの向けた砲身に叩きこむ。

ショットガンの六連射を受けた砲身が、轟音とともに爆散する。

（やっぱり。こいつの弱点は・・・）

試合開始直前まで、こいつの弱点がまるで分らなかった。

だが一夏にはある確信があった。

『第三世代型の兵器はどれも制御が難しかったり、大きな利点があ

りながらも、その制御には繊細さが求められるのですわ』

おなじ第三世代型のBT兵器を扱うセシリアからの助言。これから生まれたある疑問が今確信に変わる。

（こいつは、目標に意識を集中させていないと使えないんだ・・・）

セシリアのBT兵器も然り。その制御には高度な技術と、集中力が必要不可欠だ。逆に言えば、そのどちらかを乱されれば、その切り札を封じることができる。

現に俺の体の拘束は解け、自由を取り戻している。
この機を逃す手はない。

「てやああっ!!」

「っ！ええい、こざかしい」

再び斬りかかるも難なくかわされる。だがそれは別に気にしない。
ここからが本番だ。

「シャルル!!」

「うん。一夏!」

「例の作戦通り行くぜ!」

「うん。まかせて!」

さて、これからが本番だ。いままでの特訓の成果を見せつけてやる
としようじゃないか？

「ふん。所詮は悪あがきにすぎん」

「そんなの、やってみなくちゃわからないぜ?」

ここで俺が気張らないとこの作戦は台無しだ。何があっても退くことはできない。

耐え抜いて見せる！

「行くぞッ!!」

再びの瞬時加速。激戦の幕が切って落とされた。

歪む想いと破碎する者（前書き）

えゝ原作をなぞってるだけでは？というご指摘を受けました。
色々替えすぎてしまうのもまずいのではとも思ったのですが、さすがに退屈すぎますよね・・・。以後気をつけます。そういった方はやはりいい作品を執筆なさっているのでしょうか？皆さまもなにか良い作品がありましたら教えていただけないでしょうか？色々勉強していきます。

歪む想いと破碎する者



戦いは熾烈を極めた。否、そう感じていたのは一夏一人だけだったのかもしれない。

「くそっ！これじゃあキリが無い！」

「数の差では私が有利だな」

「たかが二倍になったくらいで！」

試合開始からすでに十数分が経過している。一夏はシャルルとコンビを組んだことを心の底から感謝した。もし他の人間であれば、ラウラ相手にここまで保たなかっただろう。

（まだだ。まだ終わってない。けど———）

「遅いッ！」

完全には避けきれない。避け損ねた攻撃がジワジワとシールドを削る。

ワイヤー・ブレードが足をかすめ、プラズマ手刀が雪片と拮抗する。

（意地でも食らいつくッ！）

一瞬でも気を抜けば瞬殺されるであろう近接戦を、シャルルを信じて食らいついていく。

だが、拮抗していた雪片と手刀、その均衡が一気に崩れる。ラウラが手刀を解除したのだ。

「しまっ！」

一夏の体が勢いに任せて大きく前に崩れる。そして、その隙を見逃すほどラウラは甘くない。

「そろそろ終わりにしようか・・・」

淡々と呟くラウラ。ゆっくりとその手をかざす。瞬間、一夏の体が凍りついたように止まる。

「私の勝ちだな、織斑一夏」

勝ち誇ったような、いや実際一夏を圧倒しているのだから勝ったと言っているその顔に、不敵な笑みを浮かべながらそう言いきったラウラ。だが、

「それはどうかな？ 忘れたのか？ これはチーム戦なんだぜ？」

「ッ！ 貴様！」

そう、一夏は一人で戦っているわけではない。頼れる相棒が、最高のパートナーがそこにいる。

「おまたせ一夏！」

「シャルル、箒は？」

「お休み中」

はるか下でエネルギー切れ、損傷甚大の箒が悔しそうにうつむいている。

ここからが本番、2対1のこちらの思惑通りになった。ラウラの顔に初めて焦りが浮かぶ。

「いくよ一夏！」

「おう、特訓の成果を見せてやろうぜ！」

side???

「あれが噂の織斑一夏か——」。面白い素材と聞いている」

学園の観客席。その中でも各国代表や、一部企業関係者のみが立ち入れる貴賓席にその男はいた。

180は確実にあるであろう身長。もしかしたらもっとあるかもしれない。その肉付も良く、有り体にいえば巨漢である。

だがその肉体は無闇に太ったそれではなく、むしろ鍛え上げられたものであることは、彼の着ている黒のスーツの上からでも容易に推察できた。浅黒い肌、深いしわの刻まれた精悍な顔。

そこからのぞく視線は鋭く、威圧感すら放っていた。

「ああ、そうだよ。織斑一夏。あの織斑千冬の実の弟だとさ」

男の独り言かに思われたそれに言葉が返される。その声は意外なことに若い。おおよそこの場に似つかわしくもないかにも聞こえた。

「ほう、お前か恭平。何の用だ？」

恭平。確かにこの男はそう言った。男の傍らに現れた青年、IS学園の制服に身を包んだその姿は、
有澤恭平その人であった。こんなところになぜ——？彼はISの不調で参加を辞退していたのではなかったか。

「何を今更……。俺が此処にいる事だって親父の指示だろう？」

そこに座る男。彼が父といったその男名は有澤隆文。日本が誇る『

有澤重工』の現社長であった。

恭平と隆文は、目を合わせることなく、いや、向き合うことすらせず背中を向けあったまま会話を続ける。

恭平の視線の先には黒塗りの扉が、隆文の視線は眼前のモニターに向けられていた。

モニターには、今まさにフランス代表候補生のシャルルが『盾殺し』を解放したところが映し出されていた。

（たぶんあれで決まるな・・・）

ふとモニターに視線を向けた恭平は思った。あれは第二世代で最強クラスの破壊力がある。

当てればそれで決着がつくだろう。

「参加できないことが不満か？お前の機体についてはまだ周囲に知られたくはないのでな。それはお前も同じだろう？」

「けっ！このクソ親父が。わざわざ不調だなんて嘘までついて・・・」

息子の言葉にも動じることなく淡々と答えを返す。その視線は未だモニターに向けられたままだ。

「ふむ。知られてもいいというのであれば構わんが・・・？」

「・・・・・・」

「特にあの織斑とは相性が悪いだろうな。お前の不知火がバリア無効化攻撃を受ければどうなるか」

「ッ！！それは「————緊急事態発生。トーナメント全試合をたち中止。状況レベルDと認定。来賓および、生徒は速やかに避難せよ————」なんだと！？」

突如流れるアナウンス。それは非常事態を告げるものだった。周囲の来賓もにわかにざわめき立つ。

「・・・何事だ？」

この事態に及んでもまるで動じないその胆力は流石であろう。

「そうだ！一夏は！あいつらはどうなった！？」

焦りを浮かべてモニターを振り返る。と、そこには信じがたい光景が映し出されていた。

「なんだ・・・これ・・・？」

そこに映し出されていたのは黒いフルスキンのIS『だった』何か。その機体がまるですべてを睥睨するかのよう上空から地上を見下ろしている。

（ISじゃない・・・？）

と、その漆黒の機体に向けて疾走する影。見間違えるわけがない。あれは白式だ。

「あのバカッ！今の状態で勝てるワケがねえだろうが！」
待機状態の不知火をつかみ駆けだそうとする。が、

「――どこへ行くつもりだ？」

「決まってるんだろ！アリーナの中だ」

恭平の肩をつかんでいたのは、ほかならぬ隆文の手であった。

「知られるリスクを冒してもか？」
「・・・・・・・・・・。」

静かに発せられた問い。その問いが持つ意味を知るものはこの場にはいない。ただ二人の間に短い沈黙が訪れる。そのわずかな沈黙の後、恭平は顔を上げてはっきりとこう言った。

「————俺は、行くよ」

「————好きにしろ」

——非常事態宣言発令。アリーナ内に侵入する機体を確認。状況レベルCに上昇。鎮圧のため教師部隊を派遣します。総員、速やかに退避してください————

再び流れるアナウンス。一拍遅れてからの激しい衝撃と爆音。まさかシールドを貫通してきた？

あれだけの強度の物を！？

side 恭平

「くそっ！一体に何が！？」

ISの装着を完了させ、今使えるありったけの装備を確認する。ガトリング、ミサイル、グレネード等。

「未確認の相手が2体だと？いくらなんでも無茶苦茶だろ。」

アリーナに通じる隔壁を力任せに突き破る。

今回は社から送られた新型パッケージを装備しているためパワーと砲撃戦能力が桁違いに上昇している。

広域殲滅型砲戦仕様装備、正式名称『雷電』。化け物じみた火力と

防御力を持つ不知火のそれを、さらに底上げするものだ。つまり、今の俺のISは『不知火・雷電』となっているわけだ。

「一夏！今すぐ離脱しろ！！」

アリーナに突入した俺を待っていたのは、ラウラであったはずの漆黒のIS。

そして――――

「こいつは・・・一体・・・？」

そこにいたのは異形の機体。全身が鉄灰色を基調とし、一部にオレンジ色があしらわれていた。

人に近いそれは、二本足であるが、その腕は大型のブレードになっている。通常のマニピレーターではなく、蒼い半透明の大型のブレードと一体化している。腕や肩に、何らかのエネルギーを通していると思われる部分があり、そこが時折脈打つように明滅する。

バイザー式の頭部からは素顔はうかがえず、それが果たしてISなのかすら判断がつかない。

（一夏、聞こえるか？今すぐそこを離れろ！）

（恭平か？無理だ、こっちはもうエネルギーが無い。筈のISも使えそうにないんだ）

なんということだ。この状況にあって退避もままならないとは。まさかこのタイミングを狙った？

（――俺が足止めをする。一夏はみんなを連れて、なんとかしてそこから逃げろ）

（逃げろって、お前はどうすんだ！その不調のISじゃ無理だ！）

だよな。実際は不調なんかじゃないけど、そう思うよな・・・すまない一夏。

（大丈夫。お前らが逃げたら俺もすぐ行く。先生たちだってすぐに来るさ）

（・・・分かった。絶対、絶対に無事で戻って来いよ！）

心配性だなあ、一夏は。まあ、気を抜ける相手ではなさそうだがね。

——データ照合。該当データなし。敵は大型ブレードを装備。近距離での戦闘は危険と推測します——

機体からの情報を確認して、すべての火器のセーフティーを解除する。

——火器管制システム正常。システム、戦闘モード起動します——

「さて、悪いが通せないな。ここで止めさせてもらうぜ！」
おれはそう言って未知の機体に砲口を向けた。

歪む想いと破碎する者（後書き）

今回はこんな感じです。ラウラの暴走にオリジナル要素を混ぜてみましたがどうでしょうか？ちなみに本文中では機体の名前は出していませんが、まあ各人で想像なさってください。まあ、腕がブレードで灰色とオレンジの配色って言ったら大体分かるのではないかと。本日は「夜鷹の夢」でお送りしました。バンド名は忘れた・・・ではまた。

始まる自分・深まる疑惑（前書き）

うーん。戦闘の描写が物足りないかな？

今後はいろんな人物を出していきたいですな。

古王とか照美人形とか。

ではどうぞ。

始まる自分・深まる疑惑

side 恭平

(動いてこねえな・・・)

眼前に立つ漆黒のISち、未知の機体。そのどちらもがまるで様子を見るかのように動かない。

(先にラウラをアイツから引き離さないとマズいな・・・)

そう、今は半ば暴走状態であるとはいえ、漆黒のISにはラウラが搭乗している。何かの拍子に未知の機体からの攻撃が来ないとも限らない。

相手の実力は未知数。相手の出方を見たいところだが、いつまでもうここずにはいられない。

「牽制して、ラウラを引き離す！」

その両手に武器を呼び出す。背部には『OGOTO』、その手には2連装ガトリング『ダブルガトリング砲』が姿を現す。

「行けッ！」

両手のガトリングによる一斉射。片手に二門、計4門の砲口が火を噴く。

通常1門のそれを連装型にし、さらに両腕に装備。そこから吐き出される弾丸はまさに嵐。

それはもはや牽制を超え、容赦なく敵に降り注ぐ。

廃莢口から排出される莢莢が、瞬く間に地面を埋めていく。

その圧倒的な連射を恐れてか、未知の機体が距離をとる。

「逃すか！」

さらに追撃として背中 of 『OGOTO』を手当たり次第に乱射する。直後、大きな爆風が敵に襲いかかる。

ガトリングの嵐に加え、ここまでされては流石に危険を感じたのか、敵はそのまま回避行動に入った。

「ラウラッ！」

未だ動かないラウラを救出すべく、俺はいそいで機体をラウラに寄せ手を伸ばす。が、

「ラウラ！？一体何を！？」

差しのべた手に一閃。突如動き出したラウラは、なんと俺に向けて斬りかかってきた。

その太刀筋に迷いはなく、殺す気で放たれたことは明らかである。

「そんな！ラウラ、俺だ！有澤だ！」

だが、その呼びかけもむなしく、攻撃が再開される。しかも良く見れば握っているのは『雪片』ではないか！

さらに悪いことに、引き離れた機体も戻ってきてしまった。両腕のブレードによる力任せな一閃。

いつもなら雑作もなくかわせるであろうそれも、この状況では常に

緊張を強いられる。

だが、その緊張を裂いて通信が入る。

（これは・・・？親父から？）

『――何が起きている？』

『知るか！こっちはそれどころじゃないんでね。映像でも見てろよッ！』

素早く父親の端末に映像を送る。戦闘中にやるのは自殺行為だがここは仕方が無い。

向こうの親父もしばらく沈黙している。が、突如として大声で叫んだ。

『いかん！そいつには手を出すな！』

『な！？おい、親父！？』

問い詰めようにもそれっきり通信が途切れてしまう。あの機体の仕業か。

（仕方が無い。ここは無理やりにでもラウラを止める！）

見たところどちらも近接戦主体の装備。ここで距離をとって砲撃戦に持ち込めば・・・

「なに！？」

突如飛来する光弾。振り向けばそれは、未知の機体のブレードから放たれていた。

斬撃の動作に合わせて放たれるそれが、威力、狙いとともに正確かつ強力であることは容易に見て取れた。

「あれ自体が射撃兵装なのか！厄介な！」

このままでは埒が明かない。そう考えた俺は手札を一つ切る。これで先に未知の機体を叩く。

何故かは分からないが、あの機体はどうも動きが機械くさい。人間味が感じられないのだ。

「こいつはちつとばかり効くぜえ？」

ニヤリと笑ったその瞬間、『不知火・雷電』の装甲がガパツと開く。そこから覗くのは無数のミサイル。

追加パッケージ内のマイクロミサイルはこの機体の攻撃の要だ。機体本体の火力を尋常ではないほどに押し上げている。さらに俺は、肩や足、空いている箇所を追加連動ミサイルを呼び出す。

「悪いな、痛いかもしれないけど悪く思うなよ！」

開いた装甲から一斉にミサイルが飛び立ち、連動ミサイルがさらに追加で敵を追い立てる。

その数は軽く50は下らないだろう。一発一発は小さく威力も低いですが、数とその高い追尾性能で敵を確実に葬る。流星群の如きそれは敵を追い求めてアリーナ内を飛び回る。

無論、その間も背中『OGOTO』両腕のガトリングによる攻撃は止まらない。

さらに、拡張領域から、12連装ミサイルポッドを2基呼び出す。最大で12ロック、合計で24発のミサイルが猛然と、敵に向けて疾走する。

空中で身をひねり回避を試みるも猟犬の如く追いつがるミサイルからは逃れることはかなわなかった。

「おおおおおッ!!」

ミサイルに喰いつかれた灰色の機体は、ガトリングとグレネードの嵐を受けて沈黙する。

全身を蜂の巣にされたその機体にさらに『OGOTO』を撃ちこんで完全に破壊する。

「ラウラッ!」

俺は未だ暴れ続けるラウラに機体を向け、その体を抱きしめた。

seide 隆文

(なんということだ……。しかし恭平であればヤツを止めることも……。)

彼の手元の端末には今の戦闘の様子がはっきりと映されていた。

(あの機体は今はまだそれほど脅威ではない……。が、いずれ……。)

そう心の中で思考する彼の面持ちはいつになく険しい。唇を固く結び、視線を固めて動かさないその癖は、昔からの物だ。

(それにしてもなぜあの機体が……。あれはすでに秘密裏に処理されたはずだ)

そこまで考えて、彼はおもむろに内ポケットから携帯をだし社に連絡を取る。

「私だ。霞はいるな? 出せ」

数瞬の沈黙の後、彼の秘書であろう、霞と呼ばれた人物が応答に出る。

「はい、霞です。どうなさいましたか？社長」

「緊急の要件だ。ラインアークの研究項目に、無人兵器に関する項目はあるか？」

「不明です。しかし、キサラギ派の者が不穏な動きを見せているとの報告もあります」

「そうか。以後、奴らに何かあればすぐに連絡しろ」

「了解しました」

キサラギ派……。また奴らなのか……。？

携帯をしまい、彼は険しい表情のまま言葉を発することはなかった。

sideラウラ

「う……。あッ！」

「気がついたか。無理に起き上がるな。傷に障る」

ここはどこだろう？私は、試合中に意識を失って……。？

そこまで考えて、ここが保健室であること。そしてわたしのほかにもう一人人がいる事に気付いた。

「教……。官……。？」

「学校では先生と呼べ……。全身に無理な負担をかけたようだ。今は安静にしている。」

窓から部屋の中に差し込む日の光はすっかり茜色だった。どうやら

すでに時刻は夕方であるらしい。

私は一体どれだけの間こうしていたのだろうか？

「何が・・・起きたのですか？」

ベッドの上から私はそう問いかける。ふと顔に手をやると、その顔にいつもしている眼帯はなく、左右で色の違うオッドアイが、教官の目に映っていた。

「・・・VTシステムは知っているな？」

わずかにためらうような沈黙の後、一瞬私に視線を向け、ここだけの話であることを伝えてから教官は語りはじめた。

「はい・・・」

「巧妙に隠されてはいたがな、それがお前のISに搭載されていた。お前の精神状態や、機体のダメージから自動的に発動するようになっていたらしい。近く、委員会から強制捜査が入るだろう」

「そう・・・ですか・・・」

あるとき何が起きたのだろうか？ 私にはその記憶が一切ない。怪我をしているということは、暴れたのだろうか。

あるとき感じた激しい憎悪と、嫉妬、羨望、欲望。それに吞まれてしまったのがこのザマだ。

「私の方で逐一状況を確認できたわけではなくてな」

「・・・え？」

「何があったかを知りたければ、そいつに聞け。ここまで運んでき

のもコイツだ」

そういつて、教官はさっさと部屋を出て行ってしまった。
入れ替わるように、ベッドのカーテンの陰から出てきたのは恭平だ
った。

「お前は・・・たしか、有澤・・・？」

「ああ、有澤、有澤恭平だ」

覚えている。以前専用機持ちを叩きのめしたときに乱入してきたやつだ。でも、今の彼のはその時見せていた鋭い視線も、威圧するような声も出していない。そこにある感情は、申し訳なさや、罪悪感のそれに近い。

「・・・。。。」

「・・・。。。」

教官が出ていき、二人つきりになってしまふ。お互い何を話してい
いかわからず、気まずい沈黙が場を支配する。

「その、すまなかった」

先に沈黙を破ったのは、彼であつた。

「・・・え？」

「仕方なかったとはいえ、怪我させちゃったからな」

心の底から申し訳なさそうに頭を下げてきた。

「わたしは・・・何を？」

それから彼はゆっくりと語ってくれた。

未確認の機体が突如乱入してきたこと。

自分が意識を失い暴走していたこと。

それを止めるために仕方なく私に発砲したこと。

そして、私が助けを差しのべた彼を斬ったこと。

「そうか。わたしは・・・弱いな・・・」

他人にあれだけのことを言っておきながら結果はこれだ。助けに来た相手に向けて斬りかかるなどもってのほかだ。

私は今までにないほど打ちのめされていた。だが、彼はこう言った。

「おれは、そうはおもわない」

「・・・え？」

「一人で何でもできるやつなんていない。一人で生きていくことなんてできない。たとえ弱くたってそれは罪じゃない。強さってのはただ力が強いかってことじゃ決まらない。それはただの力だ。でも、お前はその怖さを知った。強さが何なのかは、うっすら気づいているんだろう？時間はあるんだ。ここでの3年間の間に探せばいい。俺だって強いわけじゃないしな」

不思議なことを言う。あれだけの相手を一人で請負ながら、自分は強くなんてないという。

本当に不思議な奴だ。本当に。

「いいのか、私がここにいるも・・・？」

「じゃあ、なんでいちゃいけないのさ？お前はお前の意志で自分の道を決めればいい。ただそれだけだ」

自分の・・・意志・・・。

それだけ言うと、かれはいつの間にか保健室を出て行っていた。

まったく、言いたいだけ言って出て行くなんて、なんて卑怯な奴なんだろう。

「フッフ、フフ、あはははは」

何がおかしいのだろうか？自分でもわからない。でも自然と出てきた。自分でもわからない。

本当に不思議だ。この気持ちも、アイツも、本当に。負けたというのに、こんな気持ちは初めてだ。

決定的な敗北。だというのに、私、ラウラ・ボーデヴィツヒの気持ちには晴れやかだった。

臨海学校（前書き）

最近、面白いMADを見つけてしまったw
『GA芸術家アーマードコアデザインクラス』。面白いよ！
みんなも見てみて！あれはホントに良作だわ。

臨海学校

side 恭平

チュンチュン………。

外からは小鳥のさえずりが聞こえる。

窓から差し込む朝日が、さわやかな朝が来たことを告げている。

(あう……あと、少しだけ……)

やっぱり暖かい布団の中で最後の時間をまったり過ごすのは最高のぜいたくだよな？

うん、やっぱりいい。このまどろみは最高の時間だ。

「やっぱり、このまどろみは格別だなあ……」

起きるまでの最後の時間。そのメにそう漏らす俺。と、その眩きに対して、

「そうか？ 私はもう起きているぞ？」

「……あ？」

バカな！この部屋には俺しかいないはずだ。男は俺一人のはずだ！
ていうかいたらそれは大いにマズイ。ゲイヴ……ゲフンゲフン。
いや、なんでもない。どこにいる？

——ムニユ。

Oh……柔らかい……。じゃなくて！間違いない。布団の中だ！

「そこかあー！」

勢いよくがばあっと布団を跳ねのける俺。ああ、なんでこの時誰が中にいるのか声をかけなかったのだろうか？

「。。。（旦那；）!?!?」

「なんだ？随分な顔芸ができるんだな？」

俺の思考はそこで途切れた。

◇

「ハア」

「お、おう？おはよう恭平・・・？」

場所は変わって学園の食堂。今日も変わらずおばちゃん達はいい仕事をしてくれているようだ。

先日の騒動から数日。色々あって、色々あった。そして今日も朝から色々あった。

シャルルの再転入事件に始まり、事態の鎮静化や緘口令、ホントに色々あった。

いまこうして無事に朝食を食べられることのなんと平和なことか。

「エロい目にあったぜ・・・。」

「またやったのか？大魔王。」

一夏は元気に、反対に恭平はもともと朝食を食べる。せっかくのいい天気だというのに、恭平の表情はまるで廃人のようである。どうやら彼はナニカサレタヨウダ。

「違う……。今回は俺のせいじゃない。ラウラが……。全裸……。侵入……。orz」

「はい？全裸？何が？」

「いや、なんでもない……。ウン、ナンデモナイ」
怪訝そうな顔をする一夏をよそにご飯をかきこむ。

（言えない！ラウラが全裸で、一緒に寝てて、その上でさりげなく告白されたなんて言えない！）

やつれ切った表情でご飯を終え、そのままごちそうさま。

「そう言えば、恭平は水着買ったか？」

「うん？一応な」

そう、何を隠そうこのすぐ後に控えるはビッグイベント、『臨海学校』。

夏！照りつける太陽！青い空！青い海！そして水着！（↑待て

「まあ、何にせよ楽しみだな」

「そうだな。俺としてはみんなの水着姿が非常に気になってだな……。？」

「さすが大魔王だな」

こうして楽しい朝食の時間は過ぎて行った。

◇
時は満ちた。晴れ渡る青空。さわやかな風。全てはこの時のためにあった。

「海だあ！！きれいー！」

本日、IS学園一年生一同はめでたく臨海学校へと出発した。目の前にはすでに目的地の海が見えている。

IS学園の臨海学校は通常のそれとは違う。各企業から送られてくるパーツのテストやらで忙しい。

それぞれのクラスごとにバスに乗り込み出発するのだ。

このクラス、つまり一夏のクラスは、担任の千冬と、副担任の山田先生が同乗している。

鈴は2組だから違うバスだ。たしか、副担任のローディー先生が一緒なんだとか。

数少ない男性職員の一人であり、50過ぎながらも積極的に教鞭をとる。ISの操縦はできないが、ISについての深い知識や、独自の理論をもち、生徒からだけでなく、一般教員からも一目置かれている。

「しかし楽しみだな、色々！」

だらしなく締りのない顔でこんなことをたまっているのは、我らが大魔王こと、有澤恭平。何を考えているのか非常によくわかる顔だ。

「お、おう。そうだな・・・ハハ」
力なく答える一夏。毎度のことながらいっつも例の3人に弄られている。

「おっと、ついたみたいだな」

そうこうしているうちにバスが停車する。どうやら到着のようだ。宿の女将さんに挨拶をすませる。一夏と千冬が同室のようだ。他の女子が一樣にがっかりする。

「ねえ、有澤君はどうするの？」

「俺か？俺はあれだ！」

そういつて指差した先には一台のトレーラー。ちょうど人が生活できそうな感じである。その側面に大きく人と書いてあるのは・・・なんだろう？

「まあ、せっかく海に来たんだから泳がないとな！！行こうぜ一夏！！」

そう言って彼らは海に駆け出して行った。

臨海学校（後書き）

次の次あたりで福音戦になるかな？たぶんそこで恭平が壊れます。
色々話も動かしていきます。ではまた。

蠢く闇・紅椿（前書き）

ちよつとネタを入れました。あとオリジナルの武装も作っちゃいました。

なんちゃって温泉ウエポン。でもこれに使った『百観音温泉』って実在します。

なにかほかに温泉ウエポンないかなーと思って作っちゃいました。調べれば出てきますよ。ド田舎の小さな温泉ですが。なんで知ってるかって？そりゃ地元だからさ！

蠢く闇・紅椿



「わあ！水着大胆〜！」

「いいなあ、スタイル良くて〜。」

「ちょ、ちよっとお揉まないでよお／＼／」

場所は更衣室。水着に着替えるために女子（2名の男子）がそこでワイワイガヤガヤ着替えている。が、

何分女子高的な雰囲気があるものだから、なんというか、こう、時折聞こえてくるこえがその・・・

「やあん、さわらないでッ／＼／」

「ムフフ。よいではないか〜！」

うん、宜しくない。精神衛生的に非常によろしくない。更衣室が隣り合っているから、響き合うその声がバツチリ聞こえてくる。そんな声に頭を悩ませる男が二人。

「（≡≡≡）b！！ムフフフフww。」

「……………」

————どっちがどっちであるかは察していただきたいところである。どうにかこうにか着替えを終えて外に出る二人。出た途端、

「あ！織斑君だ！あとでビーチバレーしよう。」

「有澤君もきてね〜！！」

水着姿の女の子たちからお誘いを受けるのだ。一夏はなんとも苦手そうであるが、恭平は喜色満面である。うん、嬉しそうで何よりだね。

side 恭平

「一夏君もいいけど、恭平君もいいなあ！」

「王子様みたいー！」

「おう。時間があつたらあとでなー。」

と、ここにきて、

「一夏さん？その、宜しければサンオイルを・・・。」

お？セシリアじゃないか。うーん、良いねえ。女子たちには水着が似合いだ。じゃあ邪魔者は退散するとするか。そつとそこを離れる俺。みんな思い思いにくつろいでるな。うん、みんな綺麗だ。うれしいなあ。あれ？あそこにいるのはシャルルじゃないか？

「よう、シャルル。つて、そのバスタオルの塊は何だ？」

今俺の目の前には何とも珍妙なモノがいる。何枚ものバスタオルを頭からかぶって。夏なのに熱くないのか？

「ほーら、せっかく着替えたんだから恭平にも見てもらおうよ？」

「い、いや、心の準備というものがあつてだな／＼／＼」

これは、ラウラか？そう言えばラウラとシャルルは同室になったんだっただな。以前は仲が悪かったみたいだけど今はそうでもないらしい。まあ、シャルルも気の利く人間だしな。うん。いいことだ。

「ラウラが出てこないなら、恭平と遊びに行っちゃおうかなあ？」

俺に目配せしてくるシャルル。シャルルの水着もかわいいな。地球に生まれてよかった（泣
じゃなくて！

「そうだな。じゃあ行くか！」

「ま、まで。私も行く！」

「えゝ？その格好じゃ行けないよお？」

シャルルが小悪魔なスマイルでラウラに迫る。

「ええい！分かった。脱げばいいのだろう！？」

そう言うのと、バサツとタオルを脱ぎ去る。が、やはり恥ずかしいのか俺に背を向けたままだ。

（おお！！こ、これはッ！？）

見た限り、セレクトした水着はビキニタイプ。しかも黒。ふんだんにレースがあしらわれ、ともすれば大人の下着にすら見えてしまいそうだ。いい意味で。加えていつもはそっけなく下ろしっぱなしの銀髪が高い位置でアップテールにまとめられている。

「ラウラの髪は僕がセットしたんだよ！」

「へ、へえ、うまいんだな、シャルルはこういうの。」

「はい！じゃあこっち向いてね！」

それっと言わんばかりにハッピースマイルのシャルルがくるつとラウラを回転させる。うわあという声とともにふわりと銀髪が踊る。そのまま一回転して俺の目の前に――――ッ！？

「こ、これはッ！？」

「わ、笑いたければ笑うといい・・・。」

まとめられた髪。黒の水着に彩られた美しい肢体。いつもであれば冷やかな視線を浮かべているであろうそこは、いまは羞恥と戸惑いで中をさまよっている。シルクのような美しい肌に黒の水着がまぶしい。それはもうセクシーどころではなくもっと違う何かがあったかもしれない。それに加え悩ましげにもじもじするその様がもう――――。もうこれ以上は何も考えられない・・・。

「我が生涯に一片の悔いなしッ!!」

「わあ!?! 恭平大丈夫!?!」

「だ、大丈夫なのか? 恭平。」

ラウラの水着姿を見た途端、鼻から勢いよく血を吹きだして倒れる俺。

ああ、そんな俺をラウラがやさしく抱え起こしてくれる。ああ、その手の感触が、直に伝わる体温が——

「ゴハァッ!!」

今度は吐血してしまった。ああ、もうおれ死ぬのかな・・・? いや、まだだ! まだ終わらんよ!

「だ、大丈夫だ。その、可愛いぞラウラ!」

「そう、そうか。私は可愛いのだな・・・／＼／＼」

顔を真っ赤にしているラウラ。イカン、俺も人のことは言えない。ちよつと頭を冷やしてくるとしよう。すぐそこはもう海なんだ。泳げばすつきりするに違いない。

「ふう、いい気持ちだ・・・。」

しかし可愛かったな・・・。布団の中で全裸で告白された時もそうだが、ラウラはその手のことに迷いが無いし大胆である。さらに容姿もいいから破壊力も抜群である。そのまま流れに身を任せゆつくりと潜っていく。きれいに澄んだ海は、底まで見渡せた。

(しかし、あときはホントにびっくりしたな。)

火照った頬を叩いて深呼吸。しかし——

(ゴボォ!?!)

そう、ここは水中。入ってきたのは大量の海水であった。いきなり

のことに体がついていかない。上に出なければと思うも体が言うことを聞かない。

(くっ！よりによって水中で……。ダメだ、泳げん！これが俺の最期だとも言うのかよ……。)

だがそんな俺の抵抗もむなしく、意識は黒く閉ざされていった……。

◇

「解せぬ……。」

「ハハ、なんというか大変な目にあつたな。」

どうやらあの後恭平はラウラに助けられたようだ。その後不名誉にも彼には『水没王子』なる称号が付けられたのだった……。幸い命に別条はなく今もこうして普通に元気である。いまは自由時間ではなく、本来の時間。つまり新装備のテストである。関係者以外立ち入れないので、装備だけどかつと運ばれてくる。各人がそれを使ってテストを行うというわけだ。恭平もその例にもれず一夏に手伝ってもらいながらテストをしているのだが――？

「……なあ恭平？」

「なんだ？」

「なんで武器が温S「聞くなッ！俺だってなんでかは知らないんだ！」そ、そうなのか。」

そう、一夏が疑問に思うのももつともである。装備が来た。それはいい。テストもする。だけど、

「なんで、全部グレネード？いや、全部じゃないみたいだけど……。」

けて千冬と束を見ていた。

「ほら、その者。手が止まっている。こいつは無視して続けろ。」

「むう、ちいちゃんが冷たい……。束さんは激しくじえらしい……。」

「ハア……。一応自己紹介くらいしろ。全員困っている。」

「そだね。えへへ。私が天才の束だよ。ハロー。終わり。」

まるで時間が止まっていたかのように静まり返っていたその場が、彼女が篠ノ之束本人であるとわかったらしく、にわかに騒がしくなる。が、彼女はそれに構わず、

「やあ！」

「……。どうも。」

「久しぶりだね。おつきくなったね。おっぱい。」

「なッ!？」

「えへへ。あ! じっくりも久しぶり!」

「え? あ、はい。お久しぶりです。」

「うんうん。あれ、もしかして君かな? 有澤の秘蔵っ子は。」

「はじめまして。有澤恭平です。」

ふと、一夏の傍らの恭平に興味を向ける束。それを一夏と箒は信じられないといった様子で見ている。まず基本的に他人とかかわらないし、興味を持たない。話しかけられても絶対に無視する。会話が成り立つとしたら、それは実妹である箒と親友の千冬、そして妹の幼なじみである一夏だけだ。そんな束が自分から他者に話しかけるなんて……。

「ほえ、なかなかイカツイ機体だね。触ってもいい?」

「どうぞ。」

「うーん、このいかちいフォームも束さん、嫌いじゃないよ? データ採ってもいいよね?」

「お断りします。これは社の重要機密です。」

「あらら。東さんは非常にがっかりなのだよ・・・。」

だが、その言葉とは反対にすっぱり興味をなくしたように立ち去ると、そこへ箒がためらいがちに

「それで、頼んでいたものは・・・？」

「うんうん。できてるよ。さあ大空をご覧あれ！」

つられて大空を見上げる。と、そこへ――――

キーン・・・ズーン！！

「のわっ!？」

砂浜に落下してきたのは大きなコンテナ？

「フフ。皆さまご覧あれ！これが私お手製の箒ちゃん専用機、『紅椿』。全スペックが現行ISを上回る最新鋭機だよ！」

「・・・・・・・・。」

彼女は確かにこう言った。私お手製の箒ちゃん専用機、と。

周囲のざわめきをよそに、準備を始める束。

「さっそく、調整始めよっか？箒ちゃんのデータはあるからすぐできるよ！」

「・・・それでは頼みます。」

ディスプレイに現れる表示に目を通しながらも調整の手が止まることはない。まるで踊るように手が動いていく。

「やってる間に武装の説明もしちゃうね。主武装はこの二振りの刀だよ。こっちが『雨月』こちらは『空裂』ね。データを入れておいたから後で試してみて。」

そんな中、恭平は鋭い目つきで東を見続けていた。

（あれが天才、篠ノ之束か……。気をつけた方がいいかな？）

そうこうしているうちに調整が終わる。と、そこへ――――

「た、た、大変です！！織斑先生！！」

「どうした？山田先生。」

常にあわてている印象がある山田先生だがそのあわてぶりが今回は尋常じゃない。

「こ、これを見てください！！」

おもむろに千冬にむけて差し出した携帯端末。それを読み進めるにつれて千冬の表情も険しくなっていく。小声で何事か囁き合うと山田先生は今来た道を全速力で駆けもどって行った。

「全員注目ッ！」

「「「！？」」」

「これよりIS学園教員は特殊任務行動に移行する。本日の装備テストは中止。各自速やかに旅館に戻りそのまま待機しろ。いいな！」

突然の事態に動揺を隠せない生徒たち。

「何をしている！急げと言ったはずだ。専用機持ちはこちらに集合しろ。篠ノ之、お前もだ。」

楽しいはずの臨海学校。そこで何かが動き始めていた。

side???

「先日の件だがね？」

「はい。」

「なかなかの成果だったそうじゃないか。」

「まあ、結局は破壊されてしまいましたかね。有澤恭平の手によって。」

暗い。決して広くはないであろうそこでは二人の男が会話をしていた。ここがどこなのか。ここが何であるのか。それは誰も知らない。否、知られてはいけない。ごくわずかな者だけが知り得る秘密の部屋にして狂気の塊。

「最初期の機体などみんなそうさ。それは想定範囲内だ。」

「そうでしたね。ですがそれによってヤツは強くなる。そう、永久に――――。」

「くっくく。それよりもあそこの稼働状況はどうだね？」

「上々です。問題ありません。」

「戦闘を繰り返すことによって永久に進化し続ける兵器。我々もと

んでもないものを作り出したものだな？」

「すでに2機が現在出撃可能です。インターネサインに蓄積されたデータも順調に解析、機体にフィードバックされています。」

ここが何なのかを知る者はいない。この暗い室内では互いの顔も認識できない。

その暗闇に、光が差す。

部屋のドアが開き、わずかな光が差し込む。

「如月研究所長、お時間です。」

「うむ。すまないねえ、この続きはまた今度だ。」

「はい。お気をつけて。」

男は部屋を出る。その姿は薄暗い廊下の奥にひっそりと消えていった。

蠢く闇・紅椿（後書き）

今回はちょっと長かったかな？いつもが短いのかな？

次あたりで福音戦になります。そこら辺から色々動かしていこうと思います。

感想、ご意見など、お待ちしております。

本日はクラナドの『だんご大家族』でお送りしました。原作知らないけどいい曲だな。

ではまた次回でお会いしましょう。

覚醒する狂戦士（前書き）

突然で申し訳ありませんがあとがきでアンケートをやります。
読んで下さった方、回答をいただきたいので宜しくお願いします。

覚醒する狂戦士

side 恭平

(

これは大変なことになったな・・・)

その後、教員室に集められた専用機持ちに話されたことは、全員の創造のはるか上をいくものであった。

おおよそ掻い摘んで話せばどうか？二時間前、ハワイで試験稼働中だったアメリカ・イスラエルの共同開発の第三世代機が突如制御を離れて暴走、この近辺を通過するらしい。

その対処には現在即座に出撃可能かつ、十分な装備と人材がいる俺たち及び教員一同に任されているらしい。こうしている今も織斑先生と専用機持ちによる作戦会議が開かれている。詳細なスペックに始まり、撃破の手順、留意点、各自の役割分担。

このすべてを各員が全うできなければこの作戦は成り立たない。正式な国家代表候補生である彼女らはこうした事態にも訓練を受けているのだろう。だから俺は口をはさまない。

素人が横から口を出すべきではないだろう。

「先生、ISの装備の調整のため一度トレーラーに戻ってもかまいませんか？」

「いいだろう。ただし、作戦開始時刻の1時間前にはここに集合しろ」

「了解です」

確認し合って、外へ通じているドアを開け、外へ出る。

変わらずに吹いてくる潮風、同じリズムを刻む波音。何一ついつもと変わらない、不穏な空気の欠片さえないその風景。だというのに、その風は何か嫌なモノを含んでいる気がする。

（こんな時のカンほど当たるものはないんだよな・・・）

そんな心のつぶやきを無視して、俺は親父に、正確に言えばその部下であるフィオナ・イエルネフェルトさんに連絡を取る。彼女は本社ではなく、ラインアークの方にいるはずだ。連絡をかけ、しばらく待つと本人が出た。

「はい。恭平です——ええ、例の物を。——はい。こちらの教員の方とも協議してみないことには・・・。——分かりました。いったん切ります」

あとは、ISの確認と装備の選択をして作戦に控えよう。今回の俺の役割は中距離火力支援だ。
この『不知火』の特性を遺憾なく発揮できるはずだ。

side 千冬

「そうだ。連絡は迅速に誤りが無いようにしろ。IS装備の点検は？　どうなっている？」

軍用IS、しかも第三世代機か・・・。今ここにいる人員と装備で迎撃するほかはないのだがどうにも腑に落ちない。

IS、しかも軍用ともなればそれなり以上の警戒態勢があってしかるべきだ。それなのに何故？　わからないことは多いがそれは今は置

いておこう。今は目の前の作戦に集中しなくては。

「ん？通信だと？これは・・・？」

「こちらラインアーク所属オペレーター、フィオナ・イエルネフェルトです。突然の連絡、お許しください。今回の事態についてすしお時間をいただけないでしょうか？」

「――貴様、何者だ？」

この件は今ここにいる人間しか知らないはずだ。どうしてこいつはそれを知っている？

「説明が遅れました。事態の概要は有澤恭平より連絡と協力要請を受けました。今回の作戦に際してこちらからもバックアップをさせていたきたいのです」

「理由はなんだ？何のメリットがあってそれを言っている？」

「彼のISの新型装備は現在こちらに保管されています。直線距離であればそう遠くはありません。その受領と、こちらが持っている情報を共有したいのです。一部ではありますがこちらもアレに技術支援をしていました。無関係とは言い切れないのです」

成る程、たしかに筋は通っている。こちらにもデメリットは少ない。それに使えるものは正直何でも使いたい。時間も装備も現状足りていないのだ。何が起るかは分からない。

「協力要請に感謝する。こちらもそれを受け入れよう。詳細な打ち合わせがしたい。構わないか？」

「構いません。協力に感謝します。すでに社の専用機で彼を迎えに行かせています。装備の受領と並行して作戦のブリーフィングを行います」

期せずして、こちらに幸運がやってきた。バックアップが受けられるのは非常に重要だ。

前線で戦う兵士と同様に、後方で支援を行う要因も実戦では非常に重要だからだ。

使えるものは使う。それで生きて帰れるならば。

◇

「恭平！一体どうしたんだ！？」

旅館からあわてて出てきたのは一夏だった。彼の目の前には大型のジェット機があり、今まさに恭平が乗り込むところだった。続いてシャルロットやセシリア、鈴、箒にラウラ達が出てくる。

「装備の受領だ。今のはちょっと不安だからな。移動しながらでもブリーフィングはできるから心配するな」

不安げな視線を向けるみんなに向かって笑いかける恭平。おもむろに傍らに控えていたパイロットに促されて乗り込んでいく。垂直離陸した機体はあっという間に小さくなり、やがて視界から消えていった。

「全員集合しろ。これよりラインアーク社との合同ブリーフィングを行う。決行まで時間が無い。各員、最終確認を怠るな」

「「「「はい！」「」「」「」

教員たちが通信機の設営、他の生徒への状況説明、上層部との連絡に加え、情報の収集に追われる慌ただしく、緊迫した空気。だがその空気に気圧され、流されてはいけない。気を奮い立たせこの事態に一丸となって対処しなければならぬのだから。

side???

暗い。じつとりとからみつくような湿気を持った部屋。否、研究室
とでも言えればいいだろうか？

そこには二人の男。互いに白衣に身を包み、口元に薄い笑みを貼り
付けながら会話していた。

しかし、その笑みは間違っても他人には好印象を与えることはない
だろう。自分の欲望、昏い陰謀を持つ者だけが醸し出すその雰囲気。
人として確実に欠陥をもった存在。

「ほう？『銀の福音』か。――ふむ。ちょうどよい。我々も便
乗させてもらおうでしょう」

「所長、アレを投入されるのですか？」

「うむ。ちょうど高速戦闘型が完成していただろう？」

「はい。ですが今はまだ一機です。敵戦力に対しては不十分ではな
いかと」

「――この際、アレを使うでしょう」

「――本気ですか？」

「構わん」

男は言葉を切ると、手元のコンソールを操作し、どこかへ通信をつなげる。そして応答に出た相手にこう告げた。

「レビヤタンを起動させろ。パルヴァライザー・フロート型も起動させておけ」

sideファイオナ

「作戦を確認します。この先2キロの海域を通過する軍用ISを迎撃し、アメリカ・イスラエル共同開発の『銀の福音』を破壊します。『銀の福音』は両国の最新技術を駆使して建造された最新の第三世代型軍用機です。まともに戦うにはリスクが大きすぎます。『銀の福音』には多数のエネルギー兵装が搭載されていますが、実弾および、近接戦闘の装備は少ないと推察されます。広域殲滅型の特殊射撃型です。高速で接近してからの一撃離脱がベストでしょう。『零落白夜』で一機に叩いてください。

以上、作戦の確認を終了します。無事の帰還を・・・」

「「「「了解！」「」「」」」」

すでに恭平も装備の受領を終え、それぞれ装備の換装を終了し配置も完了している。

旅館の一室に急遽設置された作戦本部には大型のモニターが運び込まれ、戦闘の様子が衛星によって随時確認可能になった。

もちろんラインアーク側も同様である。最終確認を終え各自が武装

のセーフティを解除していく。

「目標、作戦エリア内。戦闘を開始してください」

side 箒

「行くぞ！一夏！」

実姉である、東お手製の最新にして最高のIS。第4世代型の『紅椿』

瞬時加速もかくやという速度で一気に銀の福音に接近する。私の役目は背中の一夏を銀の福音に向けて接近させることだ。危険である役目ではある。だが、誰かがやらねばならない。そして私ならできる。

「やれる。私なら！私とこの『紅椿』なら！」

使い始めて間もない、いや、まったく言っていないほど時間がたっていないというのに自分の手足の如くこの機体を操れる。機体が私の動きに応えてくれる。

（これがあれば。これがあれば私は一夏を守る。その隣に立っていただける！）

その高揚感、期待感、喜びが胸の中で大きく膨らんでいく。実戦であるにもかかわらず喜びに心が熱く跳ね踊るのを抑えられない。

「行け！一夏！」

自身も二振りの刀を抜き放ち、銀の福音に切りかかっていく。

（この力で、私は一夏を守って見せる！）

side一夏

「おおおおッ！！」

敵は高速で飛んでいる。だったら一撃で決めるしかない！

箒の背中から飛び出した俺は瞬時加速で一気に距離を詰めて零落白夜で斬りかかる。

（取った！）

この距離でなら確実に当たる。エネルギー無効化のこの刃ならたとえ軍用であっても効果は絶大なはずだ。

「なっ！？」

だが、アイツは刃が当たるのその瞬間、体を一回転させ、ミリ単位で避けやがった！

そのままの勢いで距離を離されたら、攻撃の機会がつかめない。

そう、一人では確かにできない。だが、俺には頼れる仲間がいる！

「ラウラ、恭平、頼む！」

sideラウラ&恭平

「「まかせろ！！」」

俺たち二人の役割は火力支援だ。ラウラも今回は砲撃戦用のパッケ―ジを装備してきている。

「用意はいいな？ 恭平」

「任せろ。伊達にこの機体に乗っているわけじゃない」

ラウラが大型のカノン砲を、恭平が全身のマイクロミサイルをそれぞれ構える。

ミサイルで追い込み、動きを鈍らせたところへカノンの一撃でダメージを狙う。二段構えの連携攻撃だ。

今も素早い動きでこつちを翻弄してきているが、いつまでもやられっぱなしと言うのは性に合わない。

「当たれッ！！」

「吹っ飛ベッ！！」

一斉に発射された砲弾たちは、さながら猟犬の如く銀の福音に襲いかかる。ミサイルに翻弄される機体にラウラの砲撃が命中する。

だが、その程度では小揺るぎもしない。さすがに軍用の肩書は伊達ではなかったか。ラウラはその衝撃と反動制御で、機動性との両立が難しく、今回は武装も少ない。

標的をこちらに移した鉄器に向けて、マシンガンで恭平が牽制をかける。その顔には全く焦りが無い。

それどころか、まるで予定調和であるかのような余裕すら漂って見える。

「フフ。私たちを甘く見るなよ？ 恭平、そろそろだ」

「おう、んじゃ選手交代ってことで！」

「セシリア、シャルロットッ！！」

sideセシリア&シャルロット

「すごいね、一夏達。僕たちも負けてられないかな？」

「そうですね。私たちがここにおりましてよ！」

いうなり、ビットを一斉に射出し全方位からの射撃で動きを封じ込める。その瞬間、シャルロットが得意の高速切替による途切れることのない射撃で滅多打ちにする。

反撃に転じようとする福音に、セシリアの狙撃がそれを許さない。絶え間なく続く攻撃にシールドを削られていく福音。息の合った連携は、さすが代表候補生といったところか。

懸命の防御すらその猛攻を完全に防ぐには至らない。

「このまま押し切れるかな？」

「わたくしが援護しますわ。一斉攻撃を!!」

「「「「了解!!」」」」」

sideフィオナ&千冬

「目標、シールドエネルギー減少。こちらの距離です。そのまま離れないで！」

「戦況はどうなっている？」

「現状こちらが優勢です。このまま終息に持ち込めるかと」

モニターには今まさに動きを止めた福音に、零落白夜を発動させた一夏が突撃していく様が映っていた。ここまで攻撃を加えてのアレだ。受ければひとたまりもないだろう。絶対防御が発動すればその

まま相手を無力化して勝利できる。だが――――

「待ってください！作戦エリア内に複数の熱源反応！これは一体！？」

さらに、停止していたはずの福音が青い雷をまとったかのような姿になり、自らを抱くような形をとる。

「まずい！あれは『第二形態移行』！！総員退避しろ！！」

だがその叫びもむなしく、突如として桁違いのパワーを発揮し始めた福音によって、ラウラとシャルロットそして、セシリア、箒、鈴や一夏が次々と撃墜されていく。

「なんだと！？軍用とはいえあまりに異常すぎる！」

「熱源急速接近！このままでは彼女たちが危険です！！」

「すぐに教師部隊を向かわせろ！候補生たちの回収を最優先に考えろ！」

そして、接近していた熱源が、海中よりその姿を現す。

海面を割って表れたその機体。だれがその姿を忘れるうだろう。以前にもアリーナに侵入し大きな被害をもたらした敵。オレンジと灰色のカラーリング。

「あの機体は！」

今回に限って言えば、脚部に若干の違いが見られるがそんなことはどうでもいい。

戦闘能力を失い、海面付近に対空している専用機持ちたちへ向けて、

滑るように接近していく。
その間に恭平が割って入る。ガトリングの牽制で必死に敵を遠ざける。

<先生！敵が多すぎます！至急援護を！>

<分かっている。もう少しだけ持ちこたえろ>

千冬は自分が、手が真っ白くなるほど握りしめていることに気づいていなかった。

side 恭平

（なんだってこんなタイミングで！数が多すぎる！）

必死の努力で何とか今は均衡を保ってはいるがそれも時間の問題だ。チャンネルをオープンにして全員に大声で伝える。

<全員！なりふり構わずにそこから離れろ！すぐに教師部隊が来る！>

<そんな！お前を置いてなんて！>

<今のお前たちじゃ足手まといだ！！>

だが、そんな俺のあがきを世界は汲んでくれはしなかった。

殺気。思わず振り仰いだ空。そこには――――

「嘘……だろ……？」

見上げた空には大型の爆撃機のようなものが浮いていた。ISも既存の戦闘機とも違うフォルム。

だが、半ば本能的にそれが高い戦闘力を持っていることを俺は悟った。

「全員逃げろッ!!! 絶対死ぬなッ!!!」
それはもう魂の叫びだったかもしれない。俺は喉が張り裂けるような大声で叫んでいた。

福音が、特殊兵装による広域射撃を開始し、大型の爆撃機がビームとミサイルの波状攻撃をかけてくる。そこにあの未知の機体がその両腕のブレードから光弾を放つ。

（間に合えッ!!! 間に合ってくれッ!!!）

世界のすべてがスローに映る。放たれる攻撃も、飛び散るしぶきも、驚愕と絶望に歪む表情も、その全てが残酷なほどはっきりと見えてしまった。その手の武装を投げ捨ててなりふり構わず瞬時加速でみんなのもとへ急ぐ。今この瞬間ほどこの厚い装甲を恨んだことはない。これさえなければ俺は——

もっと速く、速く! 速く!!! 速く!!! もっと! もっと——

「一夏アアッ!!! ラウラッ!!! みんなアアッ!!!」

間に合わなかった——。無残にも海面に叩きつけられた皆を庇うように攻撃をその身で受ける。

「こちら教師部隊だ。専用機持ちを発見。損傷甚大! 回収の後速やかに撤退します」

今更になって到着した援軍。おそい。おそい。遅いんだよッ!!!

「君も撤退するんだ。後は我々に任せて——」
「五月蠅い……。」
「……え?」

ああ、教師が何か言っているな……。聞こえない。聞こえない。

聞きたくない。

間に合わなかった。助けられなかった。スクウコトガデキナカツタ。
ナゼダ？アイツラガイルカラカ？アノジャマナテツクズガアルカラ
カ？

「何をしている！？急がないと君も——」
撤退？何を言っているんだ？わからない。ワカラナイ。

敵がそこにいるんだ。潰してやるよ……。許さない。赦さない。
ゆるさない。ユルサナイ。

怒りでもう何もワカラナイ。

チカラガホシイ。ホシイ。ホシイ。チカラチカラチカラチカラチカ
ラ……。。

「消えろ消えろ消えろ……。！！！」

体が熱い。燃えてしまいそうだ。神経が、血管が焼け落ちてしまい
そうだ。頭がイタイ。血が沸騰しているみたい。脳みそをガスバー
ナーであぶってるみたいに。

——ああ、これだ。この感覚だ。力が満ちていく。それがわかる。
それ以外がわからない。

——ああ、これだ。機体とひとつになる感覚。物理的に機体と融
合する。人間であることを捨てる。

——ああ、これだ。なんだろう？もう、すべてがどうでもいい気
がするんだ……。。

◇

「ガァッ!!」

「君!？」

突如として異変を見せる恭平の機体。明らかに様子がおかしい。

「ガッ・・・ア、アァアァアァ!!」

人間が果たしてここまでの声量を出せるものだろうか？否、もはやこれは人ではない。
人であった『何か』だ。

「グウ・・・アァアァ!!ガァアァアァ!!!!」

「くっ!!撤退する」

見かねた教師部隊はなんと彼を残して撤退してしまった。それは責められるべき行為。
だが、この場に限っては正しかったといえよう。なぜならその場にいれば彼に殺されてしまうのだから。

side 千冬

「おい!？応答しろ!」

一体何が起きている!？

突如異変が起きた有澤の機体。一刻も早く撤退させなければならぬ
いというのに。

「マズイ!避ける!有澤ッ!!」

ただ一人その場に残った恭平に、敵の注意が引き付けられてしまう。

覚醒する狂戦士（後書き）

えーちょっと話数が長くなりすぎたかなと思う今日この頃。

亡国企業については7巻あたりで詳しく描かれそうですね。そこで。

1、この小説を福音戦でいったん切って（ネタ集をちょっとやっ
てから切る）原作がもう少し進んでからまた書き始める。

2、このまま長くなってもいいから続けて書く。

どっちにした方がいいですかね？上手く短くまとめるのが苦手な
ので、話数ばかり増えそうで心配なんです。そうなるなら、一度区切
りのいいところで切った方がいいかな、なんて。

皆さんの意見をお聞かせください。

P r o j e c t o f L i n k s (前書き)

引き続き、アンケートの回答を募集しています。皆さんの意見を参考にしたいので
じゃんじゃん書いてください。一応、感想の制限を解除しました。

Project of Links

side 一夏

「ん・・・ここ・・・は・・・？」

「気がついたか」

旅館の一室。窓から差し込む光がまぶしい。変わらないリズムで聞こえてくる波音が、ここがいつもの寮ではないことを思い出させた。

「そうだ！皆は！？」

「あわてるな。傷に障る」

起き上がろうとしたのを千冬姉に押しとどめられた。どのくらいこうしていたのだろうか？

「一夏！」

「よかった。気がついたんだね！」

「一夏さん・・・」

「ようやく気がついたか」

俺の意識が回復したことを知って皆が部屋に駆け込んできた。あれ？ 恭平がいない。どうしたんだ？

「あのさ？ 恭平はどこにいるんだ？ アイツは目が覚めてないのか？」

「「「・・・。。。。。」」」

なんだよ、急に黙っちゃまって。教えてくれたっていいじゃないか。

「あ、あのね一夏。恭平はまだ——「隠すなデュノア」先生・・・」
「なんだよ急に。隠すなって何をだ？」

みんな視線を伏せて黙ったままだ。なんでそんな風になってるのかさっぱりわからない。これじゃまるで葬式じゃないか。

「—————夏」

「なんですか？」

「有澤は・・・M I Aだ」

M I A？なんだそれ？何かの暗号か。知らないなあ。

そうだ。暗号ならラウラに聞けばわかるじゃないか。仮にも千冬姉の訓練を受けたんだし。

俺はこの時自分の鈍感さを呪った。どうしてこんなにも無神経にこんなことが聞けてしまったのか。

どうしてそれを千冬姉ではなく、ラウラに聞いてしまったのか。それがどれだけラウラを傷つけるか。

「なあ？M I Aって————ツ！！」

バシンッ！！！！

「私は・・・私は————ツ！！」

それだけ言うとラウラは部屋を飛び出していった。

「まってラウラ！」

後を追うように、シャルルもセシリアも、箒も鈴もでていってしまふ。

ドアの外からすすり泣きが聞こえる。何だよ？そんなに悪いことしたか？俺。

「無神経なのもいい加減にしておけよ。一夏」

「その、MIAってなんなんだ？」

千冬姉は一呼吸置いてからこう言った。

「―――戦闘中行方不明」

「・・・え？」

「戦闘に参加した兵士の生死そのものが確認できなくなるケースや、死亡すること全般を指す」

なんだって！？それじゃあアイツは―――。

「お前たちを助けた直後だった。アイツのISに異変が起きた。その後圧倒的な火力で周囲の敵を殲滅。

逃走する福音を追撃していった。その数分後、アイツから送られてくる信号が途絶えた。この意味がわかるか？」

「そんな・・・。ウソだ！だって！」

「現実だ。受け入れろ」

こちらを見ずに淡々と事実を述べる千冬姉。だが勤めて冷静さを装うも、こんなにも悔しそうな姿を見たことは未だかつてなかった。

◇

「全員そろっているな？」

「」「」「・・・」「」「」

教員室であったその部屋に専用機持ちが集められていた。つい数時間前まではそこにいたはずの姿が、声が、もう聞こえない。見えない。

全員、視線を伏せたまま肩を震わせていた。箒はすでに泣き崩れている。

「私がッ！私に力があればッ！うう、うあ……うあああああ！！！！」

「箒のせいじゃないよ……。僕だってもう少ししっかりしていれば……」

「わたくしのせいですわ……。何もできなかった……」

「アタシも迷惑かけてばかりで……」

「……」

唯一ラウラだけは何も言わなかった。だが、その拳は真っ白になるほど握りしめられ、唇から血が滴っていることに気がついてはいない。

「アンタねえ……なんとか言いなさいよ！！！」

「やめろ！鈴！」

何も言わないラウラに対して鈴がつかみかかる。必死に止める一夏の声にも耳を貸さない。

「なんでなにも言わないのよ！なんとか言ったらどうなのよ！何とも思っていないワケ！？」

「……」

「なんとか言えて……言ってるでしょうが！！」

「言えば帰ってくるのか！！アイツが！」

「「「ッ!!」」」

はじめてあげた顔。普段決して出さないであろう大声でラウラが怒鳴った。その目には大粒の涙がいまにもあふれそうだった。

軍人としての心が、どうにかこらえさせているのであろうそれも、決して隠し切れてはいなかった。

「私だって……私だって悔しかったさ……くっ……ううああああああ!!!!」

楽しいはずの臨海学校。思い出の1ページになるはずの臨海学校がこんなことになるなんて誰が想像しただろう？

「……君たちには酷だがまだ『銀の福音』の回収が残されている。回収と搭乗者の救出を米政府から正式に依頼された。これは命令だ」

こんなにも打ちのめされた彼女たち酷な命令が下る。だがこれが戦場だ。訓練やバトルではない本物の戦場。その厳しさを知るには、彼女たちはあまりに幼かった。



「……作戦を確認します。」

この先30キロの海域にて、有澤恭平が撃破したと思われる『銀の福音』の回収を行います。搭乗者を救出し速やかに帰還してください

い。———可能であれば、彼の機体の一部でも構いません。
回収をお願いします。無事の帰還を……」

「「「「……」」」」

彼女たちの目に光はなかった。生きるしかばねの如く手順に従って
ISを飛び立たせる。
数時間前と同じように———。

◇

「こちらラウラ・ボーデヴィツヒ。目標を確認した。救出の後帰還
する」

ほどなくして見つかった銀の福音。その機体はバラバラにされ、破
片があたりに浮いていた。

搭乗者はかろうじて生きているようだがすぐに手当てが必要だ。

「……戻ろう。ここにはもう何もない」

あきらめたように箒が眩く。セシリアや鈴もそれに従って帰還しよ
うとした。その時———

「避ける!! 箒!!」

「なッ!？」

それに気づけたのは全くの偶然であった。白式が警告をくれなかつ
たら、今頃全員あの砲撃の餌食になっていただろう。

＜緊急報告！その先3キロに有澤恭平と思われる反応を確認！そちらに向かっています＞

フィオナからの緊急通信。その言葉に、思わず全員が攻撃の来た方向を見やる。

たしかに小さな点がだんだんとこちらに接近してくる。

「ウソ・・・だろ・・・？」

——ああ、どれほど帰ってきてほしいと思っただろう。

——ああ、どれほどこの現実を信じたくなかっただろう。

——ああ、どれほどその声を聞きたかっただろう。

「恭平・・・なのか・・・？」

そう。たしかにそこにいた。帰ってきてほしいと、もう一度会いたいと心から思ったその人、有澤恭平がそこにいた。

「■■■■■■!!!!!!」

——変わり果てた姿で。

side???

「ふむ。パルヴァライザーは海中に没し、レビヤタンは完全に撃破。銀の福音のパイロットは生死不明か。やり過ぎだな」

「よく言う・・・だれがアレをけしかけたのだ？」

暗闇に包まれた部屋。じっとりとした湿気を帯びた部屋には二人の男がいた。

おたがい言葉の端々に苦笑を浮かべながら、手元のモニターの映像を眺める。

「すまん。完璧主義者なんだ」

「まあいい。貴重なデータも取れたしな」

手元のモニターには、恭平のIS『不知火』の異変がはっきりと記録されていた。

突如として機体に大きな亀裂が入り、そのまま装甲がはじけ飛ぶ。そこから現れた異形の機体。

巨大な5連装ガトリング砲を右手に構え、左手には巨大な砲身がグリップされていた。

大きな肩のアーマーも特徴的だ。それが圧倒的な火力で敵をねじ伏

せる様が映し出される。

「フフ。有澤も面白いものを持っているな・・・」

この男たちが何者なのか。なにも求めているのか。それは誰にもわからない・・・。

◇

「俺だ！わかるか？目を覚ましてくれ！」

「■■■■■■■■■■！！！！！！」

恭平の反応は間違いなくいつから出ている。だが何故だ？なぜこちらを攻撃してくる？

「私だ！わかるだろう恭平！」

箒やラウラが呼びかけても一切応じない。返されるのは雄叫びのみ。

「一夏さん！援護しますわ。零落白夜を！」

「おう、任せろ！」

なにはともあれ目を覚まさせてやらないと。

「はあああああ！！！！！！」

全員の援護を受けて、一夏が瞬時加速で一気にその機体のバリアーを――――

「どう・・・して・・・？」

―――斬れなかった。必殺の刃は、淡く緑色に光るフィールドに遮られていた。

いくら切ろうとしても、干渉あって光を散らすのみ。

「一夏危ない!!」

間一髪。今シャルルが拾ってくれなかったら、一夏の体は炸裂した光に吞まれていただろう。

間断なく襲い来る攻撃。そこには本物の殺気が宿っている。気を抜けば間違いなく殺される。

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

その巨軀に見合わず、上下左右に素早い身のこなしを見せ、なかなか姿をとらえさせない。

「くっ! 停止結界すら引きちぎるとは・・・。」

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

5連装ガトリングの掃射はあつというまにこっちのシールドを削っていく。

「どうしてお前がこんなことを! 福音にだって人が乗っていたのに!」

一夏の叫びすら彼の耳に届くことはない。

「答えろッ!! 恭平ッーーーー!!!!!!」

「待って一夏! 様子が変わだよ!」

一気に突っ込んでくるかと思われたそれは、突如として急上昇し始

める。その圧倒的な加速に全員がついていけなかった。

!!

「なんなの……これ……？」

「二体……？これは何が……」

そこから現れたのは無数の砲身。ただひたすらに大きな砲身が虚空から現出する。

数多の武装が、全てこちらに砲口を向けて突き出している。

「ウソだよな・・・？」

ガトリングを構え、大型のキャノンに光が収束する。

全ての武装に初弾が装填される。

「俺たちを・・・撃つのか・・・？」

全ての照準が重なったその時――――

「■■■■■■■■■■！！！！！！」

――――世界が震えた。

side???

「以上が、織斑一夏の情報です」

「ん。ありがとう」

どこかのオフィスだろうか？上品な紅茶の香りが、この声の主に非常に似あっている。

逆光で見えないが、声からすると女のような。

「お嬢様？」

「もう、その呼び方はだめよ」

「失礼しました。そしてこれが――――」
机に一枚の紙が差しだされる。

「良く手に入れたわね。国家機密クラスじゃないの？これ」

「必要とあらばどんな情報も手に入れて見せます」

「ふふ。頼もしいわね」

瞬間、その表情と声から、笑いが消える。部屋の空気すらその動きを止めたかのような。

「これが彼、『有澤恭平』の・・・」

「はい。これが真実です」

女が読み進めるその紙には確かにこう書かれていた。

『project of Links』と――――。

戦いの終わり（前書き）

えーこの後の連載で、少しネタ集を何話か乗せようと思います。
かいてるうちにこれだけはやりたいってのがいくつかあったので。
なんか皆さんからもやってほしいネタありませんか？

出来る範囲でお答えします。（これから入試の準備で忙しくなりそうです）

戦いの終わり

side 一夏

戦いは一方的だった。戸惑い、迷いの残る俺たちをその機体は容赦なく打ちのめす。

「ぐっ・・・かはっ!!」

息ができない。必殺の刃は届くことはなく、そのまま首を絞められるような格好になってしまった。
なんとか両手で引き離し、完全に締ってはいないもののこのままではいずれやられるだろう。

「しまっ!!」

気づいた時には遅かった。急激に持ち上げられるからだ。そのまま海面に向けて叩きつけられる。

背中からの凄まじい衝撃。肺から空気が絞り出され、頭の中が真っ白になる。

「がはっ!!」

もうダメなのかな・・・？

薄れていく意識の中、誰かが呼ぶ声が聞こえた。箒か？セシリアか鈴かもしれない。ラウラやシャルルの声だった気もする。

（負けられない。ここで・・・退くわけにはいかないんだ!!）

強く握りしめた拳。薄れていく意識を無理やりつなぎとめる。海中に沈んでいく体を気合いで起こす。

その時だった。まるで頭の中に響くように声が聞こえた。歌うような、美しい声。

——力を欲しますか？

ああ、大切な仲間と関わる人すべても守る力が。

——彼の背負っているものは重いですよ？

それでも行くさ。仲間なんだから。

——なら行きなさい。仲間があなたを待っているのでしょうか？

それっきり真っ白になっていく視界。最後まで柔らかな微笑みを浮かべていた白い騎士の女性。

彼女は一体————？

side 篇

そんな・・・イヤだ。これ以上皆が傷つくのなんて見たくない。そのための力だ。そんなことは分かっている。今ここには皆を守るための最高の力がある。だが、

（私にできるのか・・・？自分を見失わずに戦うことが？）

力に流される自分。そんな自分が私は何より嫌いだった。どんな力を手に入れても、試してみたい。他者に向けてみたい。そんな衝動が沸き起こる。こんな自分が戦っていいのか・・・？

「一夏！？」

突然益したの海面が割れる。そこから飛び出てきたのは――――

「待たせたな箒！」

新たな姿となった一夏だった。自分にはないその強さ。決して曲げることのない自分を持つその男に、自分は憧れたのだ。だから――

（私は共に戦いたい！この背中を守りたい！）

その声にこたえるかのようにみなぎってくる力。

モニターには『絢爛舞踏』の文字。戦える。今度こそ、強さを見失わずに勝って見せる。

◇

「行くぞ！一夏！」

「おう！」

白式第二形態、その名も雪羅。そして紅椿が発動させた絢爛舞踏。二つの切り札がここに揃った。

だが、零落白夜をもってしても突破できないあのフィールド。これ

を破らない限り二人に勝機はない。

「僕たちを忘れてるのかな？」

「わたくしがここにおりましてよ！」

「シャルル！セシリア！」

そう。一人でできないなら二人で。二人でも無理なら三人で。自分たちは一人ではない。

一人はみんなのために。皆は一人のために。

「私が停止結界で動きを止める。その隙に一斉攻撃をかけろ！」

「さすがに畳みかければアイツだって消耗するわよ！」

零落白夜を当てた時、干渉しあって光を散らした。ならば、一撃での突破は不可能でも、消耗させればあのフィールドを剥がすことができるのではないか？

「■■■■！！！！」

「恭平——」。許せよッ！！」

もう迷わない。ここにいる全員の瞳から迷いが消え、そこには覚悟と決意が宿っていた。

「いまだ！やれ！！」

突進してきた恭平が、ラウラの停止結界にかかる。引きちぎられまいと必死につなぎとめるラウラ。この機を逃す手はない。

「いっくわよッ！」

鈴の衝撃砲が最大出力で展開され、その手に握る双天牙月を連結し、全力で投擲する。

動きを封じられた恭平に、情け容赦なく攻撃をたたきこむ。

「ごめんね恭平・・・」

一言つぶやいて、その手にショットガンを呼び出す。

「まだまだ行くよ!」

高速切替による息もつかせぬ高速射撃。至近距離からのショットガン射撃をかけたと思えば、両手にはマシンガンが握られ、鉄の雨を降らせる。

「わたしも負けてはいられませんわね?」

正確無比なその狙撃は、まさに今シャルルに振りおろそうとした拳をはじきあげた。

それだけではない。全方位からの連続射撃が一斉に襲い掛かる。

淡く光るフィールドの輝きが次第に薄れていく。

「これで・・・決まりだよっ!!」

瞬時加速で急接近したシャルルが放つとどめの一撃。『灰色の鱗殻』通称『盾殺し』

第二世代最強とすら言われるほどの武装。それを全力で恭平に叩きこんでいく。

「急げ・・・もう持たない・・・。」

苦しげに顔をゆがませるラウラ。停止結界も限界が近い。

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

「はあああ!!」

だがついにその淡い輝きが消える。

「今だ一夏!」

「おおおおッ!!」

絢爛舞踏により増幅されたエネルギー。それを以て放たれる必殺の切り札。『零落白夜』

あのフィールドが無い今ならば――――。

「今度は逃がさねえッ!!」

渾身の一撃。自分のすべてをかけた一撃は、恭平のISを切り裂いた。

「ご・・・めん・・・な・・・一夏・・・」

「恭平!?!」

力を失い、光の粒子となって解除されたIS。気を失って落下する恭平を、ラウラがしっかりとキャッチした。

「よかった・・・。無事でよかった・・・」

全員ボロボロ。これ以上動く気力などありはしない。だけどその表情は晴れやかだった。

◇

「全員良くやってくれた。これから諸君を診察する。具合の悪いものは申し出るように。」

任務を無事終了し、恭平を病室に運んでから今度は各自の診察を受ける運びとなった。

作戦の終了後、彼の容体はすぐまフィオナにも伝えられた。

千冬は生徒と教員に手短に指示をすませると、

「・・・束。少し話がある」

「はいはい♪ちいちゃんからお誘いだなんて嬉しいなあ」
そういつて険しい表情で部屋を出て行った。

あたりに響くのは波の音。すっかり暗くなり、頭上には美しい月が出ていた。

静かな夜。空を彩る満天の星が一夜限りの芸術を生み出している。

「束。アイツのISをどう思う？」

「ん？なんのことかな？」

二人はお互いの方を見ない。背中を預け合うようにして会話していた。見えなくてもわかる。

そんな確かな信頼と、過ごしてきた時間の長さが確かに見て取れた。

「ISとは思えない防御、火力、機動性。そして原因不明の暴走。操縦者とのコミュニケーションを無意識下で行っているISではまずあり得ない」

「うんうん。そうだよねぇ？」

束は何も言わない。腰かけている岬のさくの上で足をぶらぶらさせているだけ。

「答えろ。束、お前はあのISをどう思っている？」

「な～んにも」

静かに、だがはつきりと紡がれた問いに対する答えはあまりにもそっけないものだった。天才・篠ノ之束ははつきりと興味が無いと言いつつ切った。

「でもでも？ ISとしてではないなら興味アリかも？」

「どういう意味だ？」

はじめて束は振り向いた。いつもと変わらない、掴みどころのない微笑みを浮かべて。

「ちいちゃん？」

「なんだ？」

千冬はその言葉を信じられなかった。だけど心のどこかではその可能性を疑っている自分がいた。

「あの子の機体、もしISじゃなかったとしたら？」

変わらない不思議な微笑み。その笑みが、初めて不気味に見えた。

戦いの終わり（後書き）

うーん・・・さいきん小説の質が落ちてきたような気も・・・。
最近気づいたんだが、ISとACのクロスってけっこうあったんだ
ね・・・。

一体何番煎じだっただろう・・・？

あと、今更なんですが、恭平の機体がISじゃない疑惑。
ウフフ。この後どうしようかなあ

ネタ集・社長の一日。(前書き)

本編にはまったく関係ないです。勢いでやってしまった。
反省はしていない！(↑待て

ネタ集・社長の一日。



「おはようございます、社長。」

「うむ。先日 の 案件 についてはどうなった？」

あるビルの一室。どうやらここは会社のオフィスらしい。落ち着いた雰囲気 の インテリア で 統一 された その 部屋 には 大柄 な 男 と、それ につき 従う 数名 の 女性 が いた。どうやら 秘書 らしい。

「有澤社長、本日より社長秘書となる者があります。」

「フラ・ジールと申します。」

その男、有澤隆文は社長室にて本日の予定を確認していた。

「うむ。早速だが本日は重要な案件がいくつか入っている。私が直接 出向く ことも ある だろう。宜しく頼む。」

社長ともなれば、会議や決済、部下への指示に加え他企業との談話など、やることが山積みである。

「社長、新製品の開発主任との会議、それからBFFとの経営統合の件についての会合を開きたいと言ってきています。また、工業地帯視察なども入っております。」

最近、海外の企業であるBFF社との経営統合の話が出てきている。おそらくはこのまま統合するだろう。工業地帯視察とは、自社の工場が密集している地帯のことで、社員の間では、巨大な施設がまるで壁のように並ぶ様から「グレートウォール」と渾名されている。ちなみに余談ではあるが、その工業区には、資材の搬送及び、機械の点検、修理を可能とする大型の列車型輸送機「グレートウォール」が走っている。ここの視察にも行かなければならない。

「うむ。では会議に出席している間はそちらに任せるぞ。」
「承知いたしました。」

〈会議室〉

そこは一般的な企業と同じように正方形に机が並べられ、中央にはプレゼン用のディスプレイが据え置かれている。各地の工場長、開発主任、技術研究部などが研究と開発の成果を発表し、正式に使用されれば新製品として世に出ていくわけだ。そのため彼らの視線も熱い。

「社長！新型のグレネードの開発に成功しました。装弾数、射程距離が向上しています。」

「我々も、従来の物よりも圧倒的なパワーを持つ駆動系を開発しています！」

「新開発の装甲板技術で、飛躍的に対弾性能の向上に成功しました。」

「……………」

それぞれの意見に耳を傾けながら、モニターに映し出される詳細な資料にも目を通す。と、

「……………？これは何だ？」

そこには、丸くて黒い球体が映っていた。何かの武装といった風にも見えないし、内部パーツとも見えない。一体何であろう？

「これは、我々が開発したビット型兵器。イギリスのBT兵器に對抗して開発しました。」

「ほう？」

「これを複数展開、浮遊させて自律攻撃が可能となるのです。」

「なんと面妖な・・・。」

「これはエネルギー系の武装です。我々はエネルギーこそ最強と自負しています。」

「この変態技術者どもが！！」

その後も会議は紛糾し、やれこの新型がどうだの、こっちの方がいいだのと白熱していく。

せっかく採用されそうになっても、

「社長！これならばどうでしょう！」

「ほう？悪くないな。名称は？」

「未設定ですが、開発コードをそのまま————」
「却下だ。」
「はい？」

「温泉の名前にしろ。」

「・・・ゑ？」

一様に黙りこむ社員ら。その表情には（またはじまったよ・・・。）と書いてある。

「どうした？温泉にしろ。これは命令だ。以上で会議を終了する。」

（オフィス）

「社長、お疲れ様です。」

「うむ。すまんがコーヒーを淹れてくれ。」

新米の秘書、フラ・ジールにそう言い置くと、椅子に座って深く息をつく。

（全く。奴らは実弾の有用性を理解しておらん！あのような球体を浮遊させて何が楽しいのだ！あんなものを浮かべて喜ぶか、変態どもが！）

自社の製品に対して決して妥協しない隆文としては、あのような面妖な代物はあってはならないものなのである。実弾こそ正義。ロマンであり真理であると考えている。

（なぜそれがわからんのだ。一度徹底的に社員教育をしなおさなければ・・・。）

それにしても、と思う。コーヒー一杯に時間がかかり過ぎではないだろうか？

声をかけようかと思ったその時、

「コーヒーマーカークから、コーヒーマーカークが逆流する・・・ッ！うわあああああ！？」

「・・・」
眉間を抑えて大きなため息をつく。なんだってこんな男が回ってきたのだろうか？

「——————ブランド、所謂ピンチですね・・・。」

「さっさと後始末をせんかっ！！」

怒鳴り散らすと机の引き出しから半分は優しさでできているお菓を取り出す。もうこれが無いと生きていけないのだよ・・・。

いまだ逆流を続けるコーヒーマーカークと格闘する彼を一瞥し、社長はもう一度ため息をついた。

ネタ集・社長の一日。(後書き)

さあて、来週のネタ集は？

恭平です。一夏の家でアイツの友達と遊ぶことになったんだが・・・色々ありそうでな？さて次回は『男同士の一日』です。

来週もまた読んでくださいね？じゃんけんぽん！フフフ♪

ネタ集2・男同士の一日(前書き)

またもや本編とは関係がありません。
ネタとしてみてください。

ネタ集2・男同士の一日

◇

「明日の予定？」

「おう、久々に中学の時の友達と遊ぶんだけどさ、恭平も来ないかってこと。」

場所は食堂。一夏と恭平が少し遅めの夕飯を取っていた。

ちなみに、メニューは、ご飯・豆腐とワカメのみそ汁・肉じゃが・ホッケの開きである。

今夜も食堂のおばちゃんたちはいい仕事をしている。学園内では、此処の食堂の職員は皆、料理の鉄人に出られるくらいすごいのだとまことしやかにささやかれているのだが…？

「まあ暇だけどさ、俺なんかが行っているのか？」

「イイに決まってるじゃないか。」

「ふうん。あ、俺家知らんから案内してくれ。」

「おう、任せとけ。」

こうして、男同士の楽しい一日が始まるのだった。

く 駅のホームにてく

「遅かったじゃないか・・・。」

「すまん恭平。遅くなつたな。待ったか？」

「いや、そんなことないさ。俺も今来たところだし。」

「そっか。まあそんなにかかんないぞ。近いしな。」

ホームで待つこと数分。やってきた電車は結構空いていた。ラッシ

ユの時間でないのはラッキーだ。

ラッシュ帯の電車ってのはホントにすごいんだぞ。あれはもう闘いだな。

電車の中でたわいもない話をしているうちにあっという間についてしまった。ホントに近いな。

電車を降りて改札を抜けると、二人の男子がこっちに向かって手を振ってきた。

「よう一夏。久しぶりだな。」

「ん？そっちの奴は・・・？」

「ああ、こいつが恭平だ。」

「えっと、有澤恭平だ。よろしく。」

「おお！いつも一夏が世話になっているな！」

どうやら気のいい連中のようなのだ。まあ一夏もいい奴なのだ。その友人たちもそうなのだろう。

と、赤毛の男子が声をかけてきた。・・・地毛か？

「俺は五反田弾。今日は俺んちに来ることになってんだけどいいよな？」

「ああ、だけどそんなに長いはできないぜ。ご飯とかあるし。」

「」「フフフ・・・。安心したまえ。心配は無用だ。」「」

「・・・？」

「五反田食堂にて」

「家が食堂だったのか・・・。」

「そゆこと。ここでメシ喰ってけって。」

「俺もよくごちそうになったんだぜ？」

成る程。じゃあせつかくだしごちそうになるとしよう。ほんといい奴だな。

今いるのが俺と一夏と弾、あと御手洗数馬。全員気が合ういい奴らだった。

「「「おじゃまします。」」」

「おう。上がってけ。」

中には真っ黒に日焼けしたイカツイ親父さんが両手に中華鍋を握って料理していた。

知ってるか？あれって結構重いんだ。両手で一個でもまともに持てない人の方が多いのにあんなにも軽々と扱うなんて……。この食堂を長くやってきたのだろう。その手つきは慣れたものだった。それはもう一種の芸術かもしれない。

（ふつくしい……。）

「じゃ、二階な。」

「「「ウィー。」」」

弾の部屋にて

「まあ何にもないけどゆっくりしてけや。」

とはいえ、まあ男子の部屋だ。一応ゲーム機やテレビ、オーディオ機器、あとギターまであった。

バンドでもやってんのかな？けっこう綺麗に片付いていたりする。

「バンドやってたのか？」

「ん？いや全然上手くないけどな。あくまでなんちゃってバンドだ

し。」

へへ。でもギター弾けたりするのはかっこいいよな？おれピアノくらいしか弾けないしなあ。

「でも恭平はピアノ上手いじゃん？」

「あれ？一夏の前で弾いたことあったっけ？」

良く覚えてたな？ていうかたぶん弾いたことはないはずなんだが？

「いや、ときどき昼休みに弾いてたのお前だろ？あれ結構うまいじゃん。」

「へえ！ピアノ弾けんのか！？すげえな！」

「ならキーボードもイケるか？」

「いや、それは流石に・・・？」

「まあいいさ。それよりゲームでもしようぜ？」

ゲームか、いいな。IS学園に転入してからは全く触っていないな。そんな暇が無いほど忙しいし、やるべきことが山積みなのだ。まあでもちよっとくらいはいいよな？

「お？このゲームやったことあるな。」

「へえ、恭平もゲーム好きなのか？」

「おお！？コイツなかなか分かってるな！」

おれが手に取ったのは、『大集合！アルティメットスーパースターズ！』というタイトルのゲームだ。

どんなゲームと聞かれれば簡単だ。いろんなアニメやゲームに出てくる主人公やヒーローたちを同じゲームの中で戦わせるのだ。一度に4人まで対戦できる大乱闘ゲームでもある。細かい仕掛けの施されたステージや、原作ネタや忠実に再現されたキャラが好評を博した名作である。

「さあて、じゃあちやうど四人だしやるとすっか！」

「腕が鳴るぜ！」

「刺激的にやろうぜ・・・。」

「格の違ってものを教えてやろう！」

当然、此処にいる4人もそれなり以上にやりこんだ口である。

此処は何が何でも負けたくない。さっそくコントローラーをつなぎ、デイスクを入れて、テレビをつける。オープニングのムービーなんぞはすっ飛ばしてメニュー画面へ。

「さて、何使うか・・・。」

対戦形式はとりあえずまずは2対2のチーム戦から。

大戦マップは公平を規す為ランダムで選ぶことにした。

「うーん・・・じゃあ俺はジャムパンマンな！」

「だったら俺、ザッキンマンで行くぜ!？」

「ほう？ならばチャッカマンでどうだ？」

「くっそー。じゃあ俺グレートマン！」

どうやら決まったようだ。

一夏の選んだジャムパンマンは「それイケ！ジャムパンマン！」というアニメの主人公だ。

顔がジャムパンでできているのが特徴で、自分の顔を食べることで一定量回復できる技がある。

弾が選んだのはジャムパンマンの宿敵、ザッキンマン。名前から察せられるとおりばっちい奴だ。

自分の配下である、カビハエルンを召喚したり、UFOや様々なロボットに乗り込んだりして戦う、トリッキーなキャラだ。上級者向けのキャラ選択である。

恭平はチャッカマンを選択。一昔前に流行ったという『外道忍者チ

ヤッカマン』というマンガの主人公である。火炎系の攻撃を得意とし、相手を火傷状態にすることが出来る。この状態になると治るまでダメージを与え続けられるので、じわじわ責めるときに真価を発揮する。

さらに数馬はグレートマンを選択。M87星雲からやってくる闇の巨人だ。

こいつらにはたくさんの兄弟がいてさらには両親までいる。このゲームの中でもそいつらの技や能力が使えたり召喚できたりする。さらには特性として一定時間スーパーマーになれるという怪物君。

ちなみに対戦のコンビは
弾&恭平vs数馬&一夏だ。
ステージがランダムで選択された。

「南海の孤島か。」
南の海に浮かぶ島々。それが今回のステージだ。一定時間たつと、島が揺れたり津波が襲ってきたりする。ステージから落ちたら即死である。緊張した空気の中での一戦が楽しめるのだ。

「いけるな? 弾。」
「そのつもりだぜえ・・・恭平!」
「それは良かった。じゃ、行こうか。」
すっかり意気投合した二人。二人の口元が歓喜で歪む。

—————進化の現実を教えてやる。

「くるぞ! 数馬!」
「あわてるな・・・この勝負、負けるとは限らんだろう?」

——ただいま大戦中——

「こ、これを選ばれたものの・・・。」

「くっ！恭平！助けてくれ！」

「手こずっているようだな。手を貸そう。」

「ここはただの素人が来るべき場所ではない！」

「いいだろう。私が相手になる！」

「結果は見えていたが・・・成る程。」

——5分後——

「くっ！ステージの回転か！津波が来る！」

「！？よりによって空中で・・・。だめだ。かわせん！」

（よっしゃ、こいつ墜ちた。ざまあww）

「なんてな？」

「「ダニィ!」？」

襲い来る津波を、二段ジャンプと対空技のコンボでしのぐ恭平。それについていけなかった一夏と数馬が津波に吞まれて死亡。

「貴様らには水底が似合いだ。」

——YOU WIN!——

「だあゝ！あそこで墜ちると思ったのによ！」

「もう一回だ！」

「まあ、一度休憩してからな？」

そう言えば熱中しすぎて時間を忘れていた。喉も乾いたし何か飲み物の一つも欲しいところだ。口には出さないけどね。

「親父に言えば何かあるだろ？」

しばらくして、もらってきたウーロン茶で一息つく一同。熱中し過ぎたためか少し疲労が見え隠れしていなくもない。

「こんどはチーム戦じゃなくてさ、ふつうにやろうぜ？」

「あと、キャラも変えるか？」

「てか、チャッカマンズリィよ！どさくさにまぎれて放火とか・・・」

「なんだよ、いいじゃないか？」

———2回戦目———

「今度は個人戦か。」

「これで最後なー。ご飯あるし。」

「あれ？結局キャラ変えてないじゃん！」

「プライドってもんがあるだろうが！」

「この際プライドは抜きだ！」

「脳みそまでカビたか？」

「うるさいわ！」

「・・・・・・・・・・。」

「おい恭平？お前待ちだぞ？」

どうしたとか、コントローラーを握ったまま動かずに何か考え込

んでいる。

「あれどうやんだっけな・・・？」

「はやくしろよ！」

「あわてるな！」

そのまま黙考すること十数秒。ふと顔を上げると急にコントローラを弄りだした。

「「「???」」」

「えーとたしか・・・→→←←↑↑↓↓BAっと。お?でたでた！」

謎のコマンド入力の後、ピロリーンという電子音がして、キャラクター選択枠が一つ増えた。

「「「こ、これはっ!?!」」」

「フフフ・・・。じゃあおれは『ビットマン』な?」

ビットマン。このゲームの隠しコマンド入力によって使用可能になる隠しキャラ。

しかし、中途半端な性能と他のキャラの性能の良さから入力してまですす人がいない不遇のネタキャラになってしまった哀れな存在である。だが侮るなかれ。神の強者が使いこなせば、たとえ3対1でも負けることはないだろう。※T●S深夜枠にて『企業戦士ビットマン』絶賛放送中。着うた配信中。

—————戦闘開始から10分後—————

「ばかな! 避けているはずだ!」

「3対1だぞ!? 化け物め……。」

「伝説……伊達ではなかったか……。」

「フッフ。遅い! 遅いぞ! 戦場に迷い込んだのか?」

最初は個人戦であったはずなのだが、あまりにも強すぎるビットマンの存在が、残る3人を団結させた。

3人がかりでビットマン殲滅作戦を展開中である。

「侮るな。優秀なキャラと聞いている。——潰すぞ。」

「「おうよ!」」

(さすがにやりすぎたかな?)

——20分後——

「あーあ。3対1じゃそりゃ負けるか。」

「むしろ3対1でどうにかなったレベルが信じられんわ。」

「「同じく……。」」

結局、数の差を上回ることにはできずに敗北。あわれ、企業戦士は、3人の勇者にぼこぼこにされてしまったのであった。いまちょうどおいしくご飯をこちそうになっている最中である。

「じゃあおれはそろそろ寮の方に戻るな。」

「おう、またこいよ! 恭平!」

「……二度とビットマンは使うなよ?」

「ハハハ。じゃあな!」

うん。いい奴らだったな。今度また暇な時にこようかな? もちろん企業戦士として。

ネタ集3・バレンタイン（前書き）

こんにちわ。少し遅くなっちゃいましたが、バレンタインネタを書いてみようかと思えます。皆さんは誰かからもらいましたか？義理であれ、友チョコであれ、もらえるとうれしいですよ。ちなみに自分は合計14個。女子からの分だけなら9個もらいました！まあ義理チョコですけれどね。そんなわけでバレンタインネタです。ネタ集は今回で終了かな？気分次第で継続かも。今回はセシリアがメインです。

ちなみに一個だけ本命だったんだ・・・！返事を少し待ってもらってしまってるんだがどうしたらいいんだ！？

ネタ集3・バレンタイン

「フフフ♪フフン♪フン♪フン♪」

軽やかな鼻歌とともにコンコンッと何かを砕くような音が聞こえてくる。

それに加えて、どこかなじみのある甘い香り。だけど此処は家庭科室でもないし、厨房でもない。

・・・厨房のおばちゃん鼻歌なんて、それこそ末期症状ではないだろうか？

ではここはどこでこの音は何だ？その音の正体はカレンダーを見ればわかる。

2月14日

そう、明後日は「バレンタイン」なのだ。

～自室にて～

「こ、このくらいでいいのですわよね・・・？」

料理の本片手に額に汗を浮かべながら必死にチョコと格闘するのはイギリス代表候補生こと

セシリア・オルコット。普段料理などしないのだが今回ばかりは必死である。

「バレンタイン・・・。この機を逃す手はありませんわ！」

いつもならこんなに気合を入れることなんてない。だが今回に限っ

て言えば別だ。

もともと女子しかないＩＳ学園。ここへ来る前だってあまりバレンタインだからといって何か特別なことをしたわけではない。でも今回は一夏がいる。しかもここ日本にはホワイトデーなるものが存在し、送った相手からお返しがあるのだとか。自分の祖国、イギリスにはバレンタインはあってもホワイトデーはなかった。

「もうすこし。甘くてもいいのではないかしら・・・？」

が、いかにせん料理などしない身。せっくなのだからと気合を入れてもこれでいいのかわからない。

味見をしてもらおうにもいつものメンバーでは計画を悟られてしまう。ルームメイトは外出中で頼みの綱のチェルシーはイギリスだ。彼女からならアドバイスがもらえただろうに・・・。

「どうしたらいいんですの!？」

頭を抱えてうなること十数秒。天空より舞い降りたインスピレーションの神がセシリアに知恵を授けた。その時セシリアは神の声を聞いた。

——手こずっているようだな。手を貸そう——

「そうですわ!こんな時のための方ではありませんの!？」
セシリアの脳裏にある人物が浮かんだ。

く屋上にてく

「ふくん?で、俺に試食をしてほしいと？」

「ええ、その、皆さんには内緒で・・・」

インスピレーションの神が与えた知恵。それは恭平に試食をさせる

というものだった。

まあ男の純情を完膚なきまでに粉碎してしまうのだが、インスピレーションの神はそんなことは配慮してくれなかった。

「————あのモテ野郎が」

ここだけの話、セシリアの料理は壊滅的にマズイ。それ自体が兵器の域に達するほどマズイ。

そんなことはつゆ知らず、差し出された試作品を見る恭平。

「けっこう綺麗に出来てるじゃないか？」

実際、見た目だけならけっこうなモノだった。やり方そのものはチョコを溶かして方に入れて固めるという何の変哲もないものだが、使った型やデコレーションの細かさがなんとも女の子らしい。

「じゃ、頂きます」

「ど、どうぞ！」

パクッ・・・

モグモグ・・・

ゴクン・・・

（不味すぎる。・・・修正が必要だ・・・ッ!？）

「ゴハッ!？」

「恭平さん!？」

そのまま床に倒れ伏し、ビクンビクンと痙攣し、そのまま動かなくなる。

————しばらくお待ちください————

「お、俺はなにを・・・？」

「その、どうでしょう・・・？」

消え入りそうなこえで尋ねるセシリア。

「あ、ああ個性的な味だったな・・・。悪くないと思うぞ？」
だがそんな言葉も額に汗を浮かべていては説得力ゼロである。

「嘘・・・なのね・・・」

「ち、違う！そんなことは！」

「役に立たない男・・・」

――ブチィ

「うるせえ！まともに料理できない奴が！」

「じゃあ恭平さんはできますの！？」

「ああできるさ。少なくともセシリアよりはな！」

「そんな・・・」

思わず聞いてしまったことだったが自分より料理ができるということにショックを受けるセシリア。

でもたしかに今のままではいけないのは自分も薄々感づいてはいる。

（この際プライドは抜きですわ！）

「恭平さん！」

「！？何だいきなり」

ずずいっと顔を寄せてくるセシリア。近いつて……。その表情は真剣だ。

「わたくしに特訓をつけてください！」

「・・・強引だな、お前も」

かくして、セシリアのお料理特訓が始まった。

（恭平の自室にて）

「ようこそ、我がキッチンへ。歓迎しよう。盛大にな！」

「お、おじゃまいたします」

やってきたのは恭平の部屋。その手にはしっかりと料理の本やら何やらが抱えられている。

（こういうのが男の子の部屋なんですね・・・）

すっきりと綺麗にかたづけられた部屋。それほど物が多いというわけではないが、大きなピアノが一台あった。

「これは？」

「ああ、ピアノが趣味だな。いつもは学校のを使ってるんだが最近ちよつとこれをもらってな」

できればいま聞いてみたいところだがそれよりもまずは特訓に集中しなければ。

「まずはチョコを溶かすところからだな」

「こう、ですか？」

「いや、もうちよつとお湯の温度は高くていいな。冷めると作業しづらいし。熱すぎても駄目だぞ」

「お、お砂糖とかはいれませんか？」

「いろいろ入れ過ぎても駄目なの。最小の材料で最大限の工夫を
てね」

「はあ・・・」

「つまり、小細工や余計な手出しは厳禁ということ」

（てか、なんで俺に教わるんだよ？俺に作るわけでもねえのに・・・
（；|…））

その後も特訓？は続きどうにか食べられるものができたそうなの。
しかし悲しいかな、せっかく協力した恭平本人には1個もチョコが
来なかったそうです。
めでたしめでたし。

「小さな存在だな・・・私も・・・チョコも・・・」

ネタ集3・バレンタイン（後書き）

こんな感じです。いかかでしょうか？

後皆さんに聞きたいのですが、7巻が3月27日に出るらしいのですが、作者さんの体調不良でまた延期になったりしないですかね？

そうしたらこの小説も更新が遅れてしまう・・・。

いつそのままオリ主要素満載原作無視で逝くか？

それとも7巻の出方を見守るか。

どっちがいいですかね・・・？

あと設定を追加しました。よろしければどうぞ。

近づく災い（前書き）

久しぶりの本編更新ですね。とりあえずオリジナル展開で行こうかと。

7巻でイロイロ設定が詳しくわかったらまた考えます。

近づく災い

side 千冬

「情報が少なすぎる・・・」

目を走らせていた書類。そこには今回の一件に関する報告がまとめられ、上層部からの事実上の緘口令が敷かれた。

「一連の騒動に関する全ての情報の機密ランクがA??だと!?!?馬鹿な!?!」

怒りとともに叩きつけた書類には、政府からの指令が事細かに記載されていた。

現在日本の機密情報のランクはE~Aまでの5段階が存在し、それ以上のもの、つまり、複数の国家間や条約に関する物といった最重要機密にはEXと言うランクが与えられる。

——日本国政府よりIS学園教員各位——

先日の米軍およびイスラエル共同開発機暴走の件（以後、福音事件と呼称）は、重大な機密情報を含むため日米間の協定により、一切の情報の開示、転送、その流用を禁止する。

また、分析のため採取したデータはすべて政府へ譲渡の後削除せよ。教員及び作戦に参加した生徒全員に緘口令を敷く。これに違反した場合、最長7年の監視と厳罰、国家代表候補生資格を剥奪する。

また『有澤恭平』については、機体のデータはすべて削除せよ。一切の情報の閲覧を禁ずる。

以上。

「こんな要求が飲めるものか！」
拳を机に叩きつけて怒りをあらわにする。だがどうしようもないことも事実だ。

これ以上のことは自分ひとりの力ではどうにもならない。いくら戦^{ブリ}乙女と謳^{ユンヒルデ}われてはいても、一教師にすぎないのだ。今は。

「先生・・・まずは、全員が無事だったことを喜びましょう？」
山田先生が優しく慰めてくれたが、そういう本人の声色も不安と疑念に満ちている。

いつもは穏やかな微笑を浮かべているその顔も曇っていた。

「もうじき『キャノンボール・ファスト』も開催されます。今はそれに集中しませんか？」

さりげなくコーヒーを勧めながらそう促す摩耶。

表面上は落ち着いてはいても、生徒思いの彼女のことだ。その胸中は察するに余りある。

「あまり一人で背負ってはいけませんな、MS千冬」
そう言って声をかけてきたのはローディ先生だった。

かつては空軍に属し、粗製と蔑まれながらも地道な努力と、豊富な経験によってトップクラスの実力を得たエース。独自の理論や経験からの指導には定評がある男だ。

「ですが・・・」

「今は焦らずに。いずれ彼からも何か聞けるかもしれませんが」
数少ない男性職員であるがその経歴や、懐の広さから彼を尊敬する人間は多い。

私自身、ISでの経験であれば上だが、戦士としてであれば彼の方が優れていると考えている。

かつて代表候補生であった摩耶も一目置いている。

「今は弟さん達についていた方が良いのではないかね？」

「・・・ありがとうございます」

さりげなく手の書類を持ち去って、目配せをしてくる。

（気を遣わせてしまったか・・・）

「フッ・・・老兵は気にせず好きにやりたまえ」

かれはそう言って部屋を出て行った。



「全員席に着け。HRを始めるぞ」

相変わらずの調子で着席を促す千冬。最近では声を聞く前にすでに全員が着席、そして背筋ピンである。ふむ、よろしい。

「さて、今後の大きな予定としては諸君らには『キャノンボール・ファスト』が待っている」

毎年行われるキャノンボール・ファスト。簡単に言えばISで行うレースだ。もちろん妨害アリのガチンコである。

「せんせー、有澤君は今日も休みですか？」

「・・・体調不良だ。もうじき復帰するだろう」

あの一戦以来、恭平は学校には来ていない。もう意識は戻ったはずだし、いまは有澤重工の施設で治療中らしい。

「では、この後アリーナで実習を行う。遅刻しないように。以上だ」

seide???

「一体何が起きている!？」

「状況を報告しろ!!」

「ダメです!こちらからの信号が拒絶されています!」

「くっ!何故だ!このままでは!」

どこかの研究室。常に冷静な研究者たちが慌てふためいていた。これがどこなのか。現実なのかそれとも夢なのか。全てがあいまいではつきりしない。あたりにいる人の顔も、わかるようで分からない。思い出そうとしても、記憶が像を結ぶまえに四散してしまう。散乱する書類。駆け回る研究員に押されて倒れる機材。だがそんなものに気を配る余裕などないかのようだった。

「どうした!何が起きている!」

「社長!ダメです!せめて御子息は外に!」

「お父さん？どうしたの？なにがあったの？」

だが答えは返されることなく無理やり部屋の外に押し出される。父は振り返ることなく部屋の中に消えていき、自分だけがのけ者にされる。

「イヤだ！離してよ！お父さん！」

閉じられていく扉。その隙間からわずかに見えた人影。

「放してってば！！」

乱暴につかむその手を勢いよく振り払い、そして――――

side 恭平

「母さん！？」

気づけば叫んでいたおれは勢いよくベッドからとび起きた。全身が汗でびっしょりだ。今すぐにシャワーを浴びたいくらいだ。

「・・・夢か」

知らない天井だ。今いるのは病室だろうか？

「思い出した。ここ、ラインアーク内の病院だっけ？」

幼少のころ、一度ここに来たことがある。

今が何月何日の何時なのか。時計もなく、カーテンの閉められた部屋ではそれは分からなかった。

白で統一されたこの部屋には余計なモノは一切なかった。ベッドと何も置かれていないサイドテーブルだけだ。それがひどく寂しく映った。

「・・・一夏達どうしてるかな？」

自分がここにいてるってことはあの後、俺はここに搬送されたのだろう。

なんだか体が石みたいだ。動きたくない。

俺はそのまま疲れに任せて再びベッドに身を横たえる。

久しぶりに見た夢。見たくはなかった夢。今も忘れられない心の傷。

「なんで死んじゃったんだよ・・・」

幼いころに死んだ母親の夢。今となっては顔だっておぼろげにしか思い出せない。親不幸な息子だなと自嘲気味に嗤った。いまだに真相はわからない。扉の向こうで何が起きたのか。

それから父は変わった。涙一つ流さず、謝罪も、説明も、弁明も一切なかった。

ただひたすらに仕事に打ち込んでいった。自然と会話は減っていき、やがてほとんど話さなくなってしまった。

「あのクソ親父が・・・」

けれど寂しくはなかった。母の死後しばらくして預けられたラインアーク。そこにいたフィオナのもとに預けられたのだ。自分にとっ

てフィオナは、姉であり、同時に母のような存在だった。と、

「元氣そうですね？」

「・・・フィオナさん？どうしてここに？」

病室に入ってきたのはフィオナだった。噂をすればなんとやら、である。

「お見舞いに来ちゃまずかったかしら？」

「そんなことないですよ」

「フフ。今はゆっくり休んで。こんなことになるなんて想像してなかった・・・」

ベッドわきの小さな椅子に腰かけるとカーテンを開けてくれた。サツと入ってきた光に目を細める。

変わらないな、と思う。気づかいが細かくて、いてほしいときにはすぐそばにいてくれる。

「そうですね。自分もこんな風になるだなんて想像してませんでしたよ」

「あの頃は、全然そんな風に見えなかったのに。懐かしいね・・・」
スツと俺の顔にかかっていた前髪をかきあげて、微笑む。

きれいな指だな、そう思った。白くて細い指。きれいにマニキュアが塗ってあった。

「ねえ、お父さんからは何か言われた？これからのこと」

額をなでた手で今度は俺の手をそっと握ってきた。直接感じるその柔らかさと温かさに、なんだか無性に安心してしまった。

「・・・何も。ただ、この機体を使って学園生活を送れ、としか。あの人が何を考えてるかなんて分かんないですよ」

「そう・・・」

もうずいぶん前のことのように感じる。IS学園に来る少し前。突然呼び出された俺に親父はこう言った。

——この機体を使って学園生活を送れ——

親父が何を作っているのか。その頃俺は少ししか知らなかった。

親父の仕事になんて、これっぽっちも興味が無かった。

せいぜいが、『男でも使えるIS』を作ってるんだという風にしか思っていなかった。

ただ、いざそれが完成して、その訓練をしたりするうちにこれがそんなものではないと気付いた。

気づいても何も感じはしなかったが。このまま無為な日々を過ごすのか。それとも少しでも変化に富んだ日常を選ぶか。俺は迷わなかった。母が死んでからの無為な日々はここで終わりを告げた。

「本当に何も言われなかったの？」

全てを見透かすような視線。でもそれか決して不快なモノではなく、静かに諭すようでもあった。

「これを渡されたときに、『これで織斑一夏を、いや、お前の目に映る人々を守って見せろ』と」

その時は何を言っているのかまるで分らなかった。今もその真意は分からない。

でも、何かを守るそれによって自分の存在に意味を見いだせた気がしたのも事実だった。

「そう・・・私はこれで帰るわ。お大事にね？」

「はい。気をつけて」

そういうと、ドアのところまで歩いていく。と、おもむろに立ち止まって

「『不知火』の代りの機体ができたの。『雪風』っていうんだけど。退院したら渡すわ」

もう一度振り向いて、手を振ってくれた。それがなんだか嬉しかった。

「そういえばキャノンボール・ファストまでもうすぐなのか・・・間に合うかな？」

side???

「エム？聞こえるかしら？」

どこかのオフィス。一人の女がゆったりと椅子に腰をかけ誰かに電話していた。

ハツとするような女性だ。街を歩けば10人中10人が振り向くだろう。

優雅に足を組んで話すさまは、さながらどこかの姫君であった。

——もつとも育ちのいい姫様は足を組むなんてことをしないだろうが。

「ええ。キャノンボール・ファストに合わせてやってほしいのよ」
あいては誰なのか。エムと呼ばれた相手の声は、通信機からは漏れてこない。

「そうねえ。スコールからのお願いよ。もちろん援軍もつけるわ。」

「今代わるわね」

そのまま通信機を差し出す女。スコールと言うらしい。土砂降りとはなんとも品のない名前だ。

コードネームだろうか？

差し出された通信機をどこからともなく現れた男が受け取った。

「よう、首輪付きィ。IS学園を襲撃する。付き合わないか？」

ようやく平穏を取り戻した学園に、新たな厄災が近づいていた。

近づく災い（後書き）

7巻速く出ないかな？亡国企業に関する設定が7巻当たりで詳しく出そうなので

場合によっては長期にわたって更新が停止するかもです。あと期末テストがあるし・・・。

感想もどしどし書いてください。ご意見もお待ちしています。
ではまた。

二人きりの夜（前書き）

えーこれから期末テストになるのでしばらく停止するかも？
これから忙しくなるから途切れがちになるかなあ？

後書きに大事なアンケートがあります。

アンケートの回答が十数件くらい来たら更新再開しようかと。
結果は活動報告にて。
ではどうぞ！

二人きりの夜



「あっ！恭平じゃないか！」

夕食を食べ終え、寮の自室に戻ろうとしていた一夏の視界に飛び込んできたのは、退院してきた恭平の姿だった。包帯を巻いているわけでもなく、普通に制服を着ているということはもう大丈夫なのだろう。

「ああ、一夏か。スマンな心配かけて」

「そんなことないさ。みんな待ってたんだぜ？今呼んでくるよ！」

「お、おいっ！そんなこと——」「いいからいいから！」ああもう・・・」

言うが早いか、今来た道を逆戻りしていく一夏。それを呆然と見送る恭平。程無くして凄い足音と共にいつもの面々が突っ込んできた。——いや、廊下は走っちゃいけないんだよ？君たちわかってる？

「恭平！よかった・・・」

「心配してたんだよ？特にラウラが♪」

「なっ！シャルル！？そんなことはっ！」

「あつれえ？！いっつも心配そうな顔してたのは誰だっけ？」

「鳳まで！それはっ！その・・・」

「心配でしたのしょう？素直になればよろしいのに」

真っ赤になってしまったラウラをここぞとばかりに弄り倒す一同。微笑ましい日常がようやく帰ってきた。

「いや、心配かけて悪かった。もう何ともないからさ」
ポンポンとラウラの頭を撫でながら笑って見せる恭平。

「もう晩御飯食べたのか？」

「いやまだだ。これから職員室に呼ばれててな。忙しいのよ」

まあ、あれだけのことがあったのだ。むしろその後何もない方が不自然であろう。

「・・・千冬姉にか？」

「まあねん♪・・・生きて帰れるかな・・・」

「そっか。なら仕方ないな」

「え！？心配してくれないの！？」

「じゃあ、千冬姉にどうやって対抗するんだ？」

「マッハでハチの巣にしてやんよ！」

「・・・言ったな？」

「ウソですごめんなさい」

そういつてヒラヒラと手を振って彼は職員室に歩いて行った。



「・・・来たか」

「失礼します」

職員室のドアを開けると、そこには千冬が待っていた。どうしたところか、他の先生や職員の姿は見えない。

「こんな時間にすみません」

「構わん。もともと私が呼んだのだからな」

言いながら手招きでついてくるよう促す千冬。おそらくそこが千冬のデスクなのだろう。

そこへ来ると椅子に座るように促し、コーヒーを出してきた。

勧められた椅子に腰かけ、差し出されたコーヒーを受け取る。受け取ったコーヒーは適度に暖かった。

「回りくどいのは嫌いでな。単刀直入に済ませたい」

静かにコーヒーを啜ってからおもむろに放たれた一言。

それとともに、恭平を見据える視線は今までにないほど鋭いものだった。

「有澤恭平。お前は何者だ？」

「——どういう意味でしょうか？」

数瞬の沈黙の後、静かにそう聞き返した。千冬のまるで刃のような視線にさらされながらも、臆せず答えられるこの胆力。あの、飄々とした恭平とは別人のようであった。

「ならば質問を変えよう。あれは本当にISなのかね？」

不意に背後から聞こえた男の声。恭平と千冬以外にだれもいないはずの室内からそれは聞こえた。振り向くとそこには、一人の男性職員と、その背中に半ば隠れるような形でもう一人先生がいた。

「Mr, ローディ、それに山田君まで・・・ここには立ち入らないでくれと——」

「すまないMS, 千冬。これは私の判断だ。私もどうしても気になっ
てしまっ
てね」

そこには恭平の副担任である山田先生と、ローディ先生がいた。

その男、ローディは今しがた奇妙なことを聞いた。

——あれは本当にISなのかね？——

おかしいことだ。ここは『IS学園』。ISの開発及びデータ収集、その搭乗者の育成を目的とした教育機関であるのだ。そこに属する者に対してはたしてそれがISなのかという質問。

だがその顔にはどこか確信めいたものが見え隠れしていた。

「・・・・・・・・・・」

「君の機体は『有澤重工』の方からデータの採取、その解析のすべてを禁じられている。これは異例のことだがね。無論、入学に際しての最低限のデータと、安全基準の保障はこちらも確認しているがね。だが、先日の方の事件の際のこれは何かね？桁外れの火力、従来の物とは異なる機動性に防御力。そして最も気になるのはこれだ」

沈黙を続ける恭平に対して、ローディはゆっくりと、だがはつきりと語った。

手元のリモコンを操作して職員室内のディスプレイを起動させる。そこに映し出されたのは、先日の一件を映像化しまとめたものだった。さらに拡大された一つの場面。

それは、淡い緑の粒子が一夏の『零落白夜』を受け止めているまさにその瞬間であった。

「もう一度聞こう。君は何者かね？」

「・・・・・・・・・・」

再びの沈黙。三人の視線が揺らぐことなく恭平に向けられている。

「・・・・・・・・ハア」

どこかあきらめたようにため息をつく恭平。髪をかき上げ、グシャグシャとかき回す。

イライラしたり、追い詰められたりした時の恭平の癖だ。

「ここでの発言は外に漏らさないでくれますか？」

「無論だ。私は初めからそのつもりだ」

「わ、わたしもです」

「承知した」

3人とも承諾した。これでここでの発言が外部に漏れることはない。少なくとも今は。

もう一度大きくグシャグシャっとかき回すと、こういった。

「ここに至って隠すようなことはしませんよ、ええ。でも、自分が知る範囲でしかお話しできませんよ？自分だって多くを知っているわけではありませんから」

「構わん。話してくれ。私はお前を信じる」

やはりどこかにためらいのようなものがあるのだろうか？確認するように前置きをしてから、確かにはつきりとかういった。

「あれは『アーマードコア・ネクスト』有澤重工が開発した、次世代型人型機動兵器です」

sideラウラ

「ハア・・・」

らしくない、と思う。溜息なんて自分らしくない。

自室でシャワーを浴びた後、思わず出てしまった溜息。幸いルームメイトのシャルルは戻る途中で友達に呼ばれて行ってしまった。

今のため息を聞かれなくてよかった。余計な心配はかけたくない。

「ハア・・・」

恭平が無事に戻ってきた。そのことにホッとしたのが半分。そして自分、ひいてはみんなになにか隠し事をしているのではないかと言う疑念。

「まったく・・・何を考えているのだ私は」

今でもはっきりと思い出す保健室での出来事。心の闇にとらわれた自分を救いだしてくれた人。

あのときの恭平は、ぶっきらぼうで、まともに視線を合わせてくれなかった気がする。

それでもここにいていいと。自分の存在を認めてくれたその姿に心底惚れた。

飄々としていて、案外面倒見が良くて、ちょっとスケベで。いやかなりか？

そして何か必ずやらかしてしまう。でもどこか憎めない。それが恭平という人間なのだと思っていた。

「私は彼のなにを知っているのだろうか・・・」

だがその考えは先日的一件で変わってしまった。あのとき見た彼の姿はまさに狂戦士のそれだった。

異形の機体に身を包み、衝動のままに破壊を繰り返すそれが、かつての自分と重なって見えたのだ。

言われてみれば気になる点はいくつもある。

後に一夏から聞いたことだが、恭平はシャルルが男であることを知っているようなことを言っていたと。

そしてそれが本人の口から語られた時もあまり驚かなかったと。それについては、周りの人間も本人を気遣い、不必要に騒ぎ立てたり、根掘り葉掘り聞かなかったから、考えすぎということのあるのだろうが、それでも一度考え出してしまうと止まらない。彼の機体のことも、そう言えば

——一応、会社の最重要機密なのよね？——

と言って誤魔化された気がする。

「……………」
無言で、バスローブの上から制服の上着を羽織り、そのまま部屋を出る。
行き先？そんなもの、初めから一つしかないじゃないか。

side 恭平

「あゝ疲れた……」
とは言ったものの、実際に疲れたの先生たちの方であろう。聞かされた方からしてみれば、目からうろこどころの騒ぎではない。自分たちの常識を根底から覆すようなことを聞かされたのだ。世界がひっくり返ったと言った方が正確なのかもしれない。

「あゝそういや、新型の機体を渡されてたな……」
小型の端末を操作して機体のデータを呼び出す。

機体名…『雪風』

搭乗者…有澤恭平

「構成パーツ」

右腕武器… MR-102

左腕武器… EB-O305

右背武器… (なし)

左背武器… EC-O300

肩武器… (なし)

右格納武器… (なし)

左格納武器… (なし)

頭部.. HD-HOGIRE
コア.. SOLUH-CORE
腕部.. AM-JUDITH
脚部.. LG-JUDITH

「ふうん・・・」

それとなく目を走らせている。と、

——コンコン——

ドアをノックする音が聞こえた。

「ん？誰ですか？」

——ガチャ——

「わ、私だ・・・」

「何だラウラか。こんな時間にどうしたよ？」

部屋に招き入れ、ドアを閉める。来ると思っていなかったから何も
ないがまあ仕方が無い。

——てか、バスローブに制服の上着って……。他の無かったん
かい！

そのままベッドに腰掛け、ラウラもそれにならって隣に腰かけた。

「な、なあ恭平」

「ん？何だよ？」

ためらいがちに放たれた言葉。小さい声ではあったがちゃんと届い
ていた。

「なにか、隠し事をしていないか？いや、別に疑っているわけじゃ

ないんだ。ただ、私では力になれないのかと思ってな」

「・・・・・・・・」

「私はお前のことをそれほど知らない。でも、お前がそうだったように私もお前を助けたい」

今度は小声ではなくはっきりとそう言ってくれた。

それに対して答えを返さず、そのままベッドに倒れこむ。天井を見つめながらひとり言のようにして俺はしゃべりだした。

「別に隠し事ってわけじゃない。秘密にしていることはあるけどな。でも、俺はラウラ達を裏切ったりするようなことは決してしない。それだけは信じてほしい」

視界に入るラウラの銀髪。腰のあたりまであるそれは今も無造作に下ろしたままだ。

湯上りのしっとりとした髪は、いつも以上の輝きを持っていて、彼女の頬を紅さと相まって俺はなんだか落ち着かなかった。

「言葉を飾ることに意味はない。でも、私はお前と一緒にいたいんだ。それじゃダメか？」

「・・・・ラウラって優しいんだな」

どうしてこんなに気にかけてくれるんだろうな。なんか、フィオナさんみたいだ。

その銀髪を見る。フィオナさんよりは長いんだな・・・。

と、ふわっとその銀髪が踊る。

「ラ、ラウラ!？」

「い、言うな／＼／」

そのままベッドに、つまり隣に倒れこんできた。あわてて背中を向ける。

視線だけ動かしてみると、女子用の制服の上着がかけてあった。――

——バスローブも一緒に。

(い、いやこれはマズイだろ!!???)

女子特有の甘い香りが鼻孔をくすぐる。なんだろう? あんなに焦つてたのになんだか無情に安心しちまった。そういえば預けられてた頃はフィオナさんと一緒に寝てたっけ・・・?

一個だけお話を聞かせてもらって、もう一個もう一個って駄々こねてたな・・・ハハ。

「恭平・・・私だって傍にいたんだ」

そつと後ろから腕をまわしてこちらに振り向かせたラウラ。互いの息遣いが感じられるほどの距離。

もともと電気はつけていないこの部屋。薄暗い部屋の中で、絹のような肌と美しい銀髪が目を惹いた。

ラウラの呼吸が、浅く上下するその胸が、透き通るようなその瞳がハツとするほど綺麗だった。

「ラウラ・・・眼帯取ったんだな。そう言えば」

「・・・嫌か?」

「いや。きれいだよ」

そういえば『ドイツの冷水』って言われてたんだっけ? そうは見えないよな。

「ラウラ」

「なんだ?」

「風邪ひくぞ」

肩あたりのきわどいところまでしか掛ってなかった毛布をかけなおす。と、その手をラウラが握ってきた。

——あったかい。

小さくて、柔らかくて、あったかくて。

それが無性にうれしくて。なんで嬉しいのか自分でもわからなかったけど、安心してしまった。

ラウラも年相応の女の子なんだな・・・。

その手をしっかりと握りかえし、その髪を撫でる。触れれば溶けてしまいそうな髪は、まるで上質な絹のようだった。

そのぬくもりが。柔らかさが。匂いが。その確かな存在が、こんなにも嬉しいだなんて。

この感覚、久しく忘れていた気がする・・・。

「・・・ZZZ」

もうすっかり眠ってしまったようだ。安らかな寝息を立てるラウラの肩を抱き寄せる。

「言葉を飾ることに意味はない、か」

毛布をかけなおし、そっと手を握りなおす。

今は。今この瞬間はその温かさに甘えたい。

「嬉しかったよ」

今隣にあるこのたしかかな優しさを感じていたい。ああ、こんなに心が落ち着いたのはいつ以来だろう。

周りには機づ勝てていないつもりだったのにな。ハハ。ラウラにはかなわないな。

そう思うと急に瞼が重くなってきた。今日は、久しぶりによく眠れそうな気がする。

「お休み。ラウラ」

そう言っ て俺も ゆっくりと 眠りの淵に沈んでいった。

——その手をしっかりと握りしめて。

二人きりの夜（後書き）

こんかいは調子に乗って、ちょっとアレなシーンを入れちゃいました。

どうでしょうか？ちなみに恭平がシャルルの性別に突っ込まなかった件については一応自分の中では伏線のつもりでした。回収できてるかな？

さて、ふと思ったのですが、弓弦先生って体調不良とかで時折発売が延期になったりするそうですね？そうなるとこの先書けなくなってしまう！

と言うわけで、またしてもアンケート！（この前もやったとかいわない！）

1、あくまで原作に沿って時折アマコア要素をクロスさせる方向で進める。

2、原作無視オリ主全開で、フロム脳汁垂れ流しで逝く。

3、ひとまず7巻が出るのを待ってそこで判断する。

さて、読者の皆様はどれがいいですか？

感想の制限は解除してあるので、どなたでも書き込めるはず・・・？最近試してみたんだけど、さり気なくPSPからもアクセス&書き込みができるのね、このサイト。

ではまた次話で。

アンケートのご協力、お待ちしております。

緊急事態！ ※29話復活！

先日投稿した第29話がぶっ飛んだ事件について

感想欄にてくろや様から「機体アセンのデータに脚部が無いのは仕様？」

とご指摘を受け編集しようと思って開いてみたら、肝心の29話のほとんどが消し飛んでいました。

原因は未だわかっておりません。バックアップなどが無いためまた一から書き直しになりますので、もしかすると一部がもとの文章と異なってしまうかもしれません。

読者の皆様に多大なご迷惑をおかけしたこと、心からお詫び申し上げます。

こんな事件のさなかですが、アンケートの回答は引き続き募集しています。

現在は、

・恭平の機体が『ネクスト』であることを千冬と山田先生、ローディ先生に告白

・ラウラとの親密度がぐっと上がって、学校に復帰。と言ったところです。

この後辺りに楯無先輩をだそうかなと。

肝心の機体データの方ですがこんな感じですよ。

機体名…『雪風』

搭乗者…有澤恭平

「構成パーツ」

右腕武器..	MR-R102
左腕武器..	EB-O305
右背武器..	(なし)
左背武器..	EC-O300
肩武器..	(なし)
右格納武器..	(なし)
左格納武器..	(なし)
頭部..	HD-HOGIRE
コア..	SOLUH-CORE
腕部..	AM-JUDITH
脚部..	LG-JUDITH
FC S..	FS-JUDITH

なにか、お気づきの点がありましたら感想欄にてご連絡ください。

なお、アンケートは29話の後書きにあります。(そこは無事でした)

アンケートの回答が10数件くらいになったら、活動報告にて発表、その後更新を再開しようと考えています。

ご理解とご協力をお願いいたします。

※29話復活しました。

バックアップが無かったため1から書き直しました・・・。

そのため最初の文章と内容が少々異なっているかもしれません。何かあれば感想欄にてお願いします。

東北地方太平洋沖地震について

こんばんわ。

緊急事態につき、手短な更新のみを行わせていただきます。

現在発生している東北地方太平洋沖地震については、岩手県、青森県沖合の震源に加え、茨城県沖の震源の両方がそれぞれ大きな地震を発生させ合い、それに誘発される形で大きな余震が続いております。

書いているいまも余震が絶えません。

現在も情報が錯綜しており、これも自分が必死になって集めた情報でしかありません。

皆さんも十分にお気を付け下さい。

また、大きな被害を受けた東北各地の皆様にも、心から無事を祈るとともに、お亡くなりになられた方々に心からご冥福をお祈りします。

地震の影響で最悪、今後更新ができない可能性があります。

今後の予定については完全に不明です。

企業設定追加 3/26設定追加（前書き）

皆さんお久しぶりです。地震の被害はありませんか？無事であることを祈っています。こちらは地震、計画停電、期末テスト、新入生歓迎準備と大忙しで更新が止まっていました。申し訳ないです。ようやく天童に（宮城県）の父と連絡が取れました。無事でよかった。25日の7巻発売前に企業側の詳細設定を追加します。ただ、あまりだし過ぎると混乱するので、出ない企業もあります。インテリオルとか。一応ここではGAとメールアドレスが世界シェアを二分していると思ってください。本格的な本編再開はそれ以降になるかと。でも、このままだと発売を自粛したりするのかな・・・？みなさんの無事と、被災者の方々の一刻も早い救助と支援を願っております。

企業設定追加 3/26 設定追加

『企業統治連合』

・世界的な大手企業の連合組織、とはいったものの、その実態は一部の財閥や政界のトップで形成された集団。その財力と人脈で世界を裏で牛耳っている。表側では途上国支援などを行っているが途上国からの不満は多い。ひそかに奪取したネクスト技術を各企業に流しているらしいが真偽は不明。

『GA (Global Armaments)』

・環太平洋を拠点とする大規模な総合企業。食品、衣料、兵器など各分野に進出しており多数の子会社を有する。ISの装備開発にもいち早く着手している。生産する装備は実弾系の信頼性の高いものを生産している。デュノア社に対しても支援を行っていた。主な傘下の企業としては『クレスト』や『ミラージュ』がある。

『オーメル・サイエンス・テクノロジー』

・西アジアを主な拠点とする総合企業。GAと同様に様々な部門に進出を果たしているが、政治方面に対しても影響力を持ち、企業連合においても強い発言力を持っている。有する技術水準は高く、実弾のみならずエネルギーにも対応の技術を持っている。傘下に複数の企業を有し、社名自体が一つのグループとなっている。

『ローゼンタール』

・オーメル傘下の優良企業。古くからオーメルと協力関係にあった。ISが開発されてからはその武装やフレームの設計に対しても支援開発を行ってきた。精密な設計とバランスのとれた扱いやすくレベルの高い製品に定評がある。リリースする製品は全て西洋の騎士を

モチーフとしている。

『アルゼブラ』

・旧社名イクバル。社長の辞任により社名が変更された。他の企業には見られない特異なパーツを開発している。ショットガンやマシンガンといった近距離での戦闘に適したパーツを開発している。

『トールス』

変態。

『有澤重工』

・日本が誇る大手IS企業。おもに実弾兵器に定評があり、とくにグレネードやミサイルの生産を主としており、その性能と実績は誰もが認めるほどである。

その前身は『有澤技研』という、小さな工場であった。第二次世界大戦時に戦車や戦闘機制作を行っており、戦艦の主砲などの設計も担っていた。有澤の実弾兵器のノウハウはここが始まりであった。その後、大戦時に大きく成長し、終戦後、米軍の兵器の修繕・開発の発注を受けて名を『有澤重工』と変える。自衛隊に対する装備の開発や、支給などが主な取引である。

現在の社長は、『有澤隆文』恭平の父親である。

かつて、運営資金の不正利用を追及されたが、不正は見つからず、資金が何に使われていたかは解明されていないままである。傘下に『キサラギ』『ラインアーク』『ムラクモ・ミレニウム』を有するGA、オーメルどちらにも属さず、一つのグループとして成り立っている。『BFF』とは協力関係。

『BFF』

・現在、有澤重工と協力関係にある企業。古くから、人工衛星や航空機、スペースシャトルなどの精密部品の製作を主に請け負ってき

た。そのため、この企業の特徴としては精密部品、兵器に強い。協力関係を結んだあとはおもに内装系の精密部品を手掛けている。

『マグリブ解放戦線』

・アフリカ諸国の義勇兵（実質的にはテロリスト）集団。ISの開発以降、資源採掘のため急激に流れ込んだ外国資本によって国家が安定を失い、失業者があふれた。ISによって立場を失った軍関係者らも最近流れ込んだため、もはや一介のテロリストとは一線を画す存在となった。元々は、王制の打倒や、不当な弾圧に対抗するためのレジスタンスであったが、外資参入を機に、国家、宗教を超える団結。自らの国家と文化を防衛するという大義名分の下、外国企業に対して過激な抵抗運動を続けている。空軍関係者やもとパイロットなども近年流れており、現在もつとも危険とされているのは元戦闘機パイロット「アマジীগ」

企業設定追加 3／26 設定追加（後書き）

いまはとりあえずこんな感じ。今後ガツガツ修正・追加されると思います

アーツ!! part 1 (前書き)

いつかはやらねばならんと思ひまして・・・

アッ!! part 1

◇

「こ、これは・・・一体・・・？」

「そんな・・・どうして一夏さんが・・・」

「断じて許さん!!」

「一夏の馬鹿! 馬鹿! バァーカ!!!」

寮の部屋の廊下。夕食を終えて今頃いつもであれば部屋でそれぞれ寛いでいる時間帯―――のはずが、何故かいつもの面々が一夏の部屋の前で顔を真っ赤にして固まっている。

ドアに耳をぴったりくっつけているのはシャルルだ。もう茹でダコを通り越していまにも爆発しそうなほど顔が真っ赤である。

どうしてこうなったのか。ことの発端は数時間前にさかのぼる。

「き、恭平と!!」

「同じ部屋で!？」

「「一緒に寝たあ!!!!?」」

あの夜から一夜明けた朝。いつもより少し早く目が覚めた恭平とラウラは朝食のため食堂へとやってきた。が、そこを運悪く他の女子生徒に見られていたのだった。うわさ好きの女子の情報の伝達は早い。あっという間に食堂の女子に発信され、それは朝食を食べていた箒やセシリアたちにも伝わった。

「ん? なんのことかねえ？」

ごはん、わかめと豆腐の味噌汁、焼き鮭に冷奴。たくあんと熱いお茶という、いかにも日本人らしい朝食を食べながらそうはぐらか

す恭平。その目はどこことなくからかっているようにも見える。

「ラウラさん！聞いていますて！？」

業を煮やしたセシリアが隣に座るラウラに問い詰める。そういえば以前は鈴やシャルルと並んでいたはずなのだが、今日は恭平の隣りである。

「・・・つまりはそういうことだ」

「「」ッ！？」

恭平にならってズズッとお茶をすするラウラ。さりげなくプイツと視線をそらしたのはご愛嬌だ。ちなみに余談であるが、ラウラは初め、お茶を音を立てて飲むということに激しく違和感を感じたんだとか。これはセシリアやシャルルもそうだった。一番違和感が強かったのはイギリス出身のセシリアかもしれない。頬を赤く染めてボソッつぶやいた一言だったが、それでも彼女たちを驚かせるには十分すぎる破壊力があつた。

「恭平！ダメだよそんなことしちゃ！お、男の子と女の子が一緒に部屋なんて・・・その・・・」

「み、見損なつたぞ！恭平！」

「アンタがスケベなのは知ってるけど、ここまでするなんて・・・」女三人集まれば姦しいとはよく言ったもので、朝から三人組の激しい非難の嵐にさらされている。が、当の恭平は何とも思っていないようである。

「いや、それをお前らが言うなよ。なあ一夏？」

「え！？お、俺に振るなよ」

ニヤニヤしながらおもむろに一夏にふる恭平。いきなり振られた一夏は三人組に詰め寄られてたじたじである。

「どうなのよ一夏ッ!!」

「そうだ!この際ハッキリしようではないか!」

「答えてください一夏さん!」

「え!?!いや、だからその・・・」

我関せずといった調子でゆったりと朝のひと時を堪能する恭平。別段、朝からいちやつくわけでもないのだが、こう、ラウラとの息が合っているというか、違和感がないというか、そう、うまくかみ合っているのだ。うらやましいくらいに。

「幼馴染ならいいのね?」

「へ?」

ズズッとお茶をすすると、素の顔のまま鈴に向けてそう言った。

「箒がいるのにそこへ割って入ろうと——」

「ちよっ、な、なんのことかしら???」

「まだあるぞ。シャワー室のことか。な?シャルル?」

「え!?!し、知らないよ!?!」

ニヤニヤしながら過去の恥ずかしい事件を列挙していく恭平。

ボツと顔を真っ赤にしながら慌てふためく一同。そして最後にこう締めくくった。

「まあ、悔しかったらお前らも頑張るんだな!」

ここで冒頭に戻るのである。そうかそれならばと寝t(r y もとい、一夜を過ごそうと我先にと一夏の部屋に駆け付けた。そこでこの騒ぎである。最初はなんであんた達が!?!となったのだがそんなことは部屋から聞こえてきた声で吹っ飛んでしまった。

蹴破るほどの勢いでドアを開けて中に入る。と、そこには――――

アーツ!! part 2 (前書き)

やっところさ7巻出ましたね。いいねえ楯無さんはお姉ちゃんでしたかw

妹もなかなかの逸材・・・そして最後に出てきた地下特別区画・・・ってまさかインターネス（ry

ってなわけで今回は前回の続きから。どうしてこうなった・・・。それから更識家の絡みはどうでしょうか？なにかいいアイディアないですかね？

出すのはまだまだ先でしょうけど。

アーツ!! part 2



「あっ・・・うう・・・そこ・・・はっ・・・だめなお・・・」

「そうなのか？その割には嬉しそうだよな？」

「くっ・・・ああ・・・一夏の・・・ばかあ」

「バカって何だよ。こんなに喜んでるぞ？体は正直だよなあ？」

「あっ・・・くあ・・・もう・・・ムリ・・・よ・・・」

「ふうん・・・まあこのくらいでいいかな？」

「「「「・・・」」」」

冒頭からこんな官能小説張りの書きだしで申し訳ない。間違ってもここは健全な青少年が読んでも何も問題のない作品であったはず。そして舞台は花も恥じらう、うら若き乙女の学び舎であったのだ。

どううしてこうなったか。

ドアを蹴破らんばかりの勢いで部屋に入ってみると、そこには

「ん？どうしたんだみんな？」

「ハア、ハア、一夏・・・俺・・・もう無理・・・」

「「「一夏ッ！！」」」

「わあ、待て待て？俺はただマッサージをしてただけだ！なににもやましいことはしていない！」

（（（なんだただのマッサージだったのか・・・）））

そう。中で行われていたのはただのマッサージであった。理由を聞

いてみれば、ISの訓練で溜った疲れを取った方がいいという一夏の勧めで、恭平がマッサージを受けていたのであった。分かってしまえば何のことはなかったのだが色々具体的な想像をしていた彼女たちは顔が真っ赤であった。その後、なら自分たちにもと、言うことになり順番に一夏のマッサージを堪能することになったのだ。

はじめは男性の前でこんな風に体を触られるのは抵抗があったのだが、彼女たちの一夏に対する想い（執念ともいう）はそんな理性の働きをものの見事に打ち砕いた。

で、今はちょうど鈴の番であった。着ていた寝巻を腰のあたりまで脱ぎ、うつ伏せになって寝ている。

ただマッサージするだけならこんな格好にならなくてもよかったのだがそこはそれ。恋する乙女の精一杯のアピールである。まあその努力は一夏の鉄壁のA・Tフィールド（アルティメット・唐変木フィールド）によって永久に届かないわけだが。

「ふう・・・これでよしと。お疲れ様」

「アンタねえ・・・もうちょっと加減ってモノを知らないよ!!」

「ふつうはこんなもんだと思うぞ？しかし鈴ってけっこう凝ってるのな」

「え!?!? そうなの・・・」

「こういうときはぬるめのお湯につかったりするのがいいんだぞ」

一通りみんなの疲れを癒し終わった一夏。癒す側が疲れているのもどうかと思うがかなりマッサージはうまいのだ。

「ういゝ一夏、サンキューな」

「おう。そう言えば新しいISの試運転やるんだろ？」

「んゝ今からやって間に合うかねえ・・・キャノンボール・ファス

トもそろそろだし」

来たる一大イベント、キャノンボール・ファスト。国内外のトップや各企業の代表なども観戦に訪れるほどの物だ。当然、各自が万全の対策を持ってそれに望むわけなのだが、そこへ来ていきなり新型を持ってこられても正直ものにできるかは怪しい。恭平だって決して飲み込みが悪いわけではない。むしろかなり早い方である。だが、基本的にISの操縦練度は活動時間に比例していくものだ。そこには使い手の技量と同等かそれ以上にISコアとの同期と成長が関係する。恭平の機体に関して言えばそこについての心配はないのだが、やはり不安は残る。

「まあいいや。じゃ、俺は部屋に戻るわ」

そう言うところ恭平は未だ恍惚とした表情で床に伏したままの鈴やセシリアに手を振るとそのまま部屋を出て行った。

side 恭平

「うーん。本気でどうしようかね・・・」

新型の機体のことだ。現時点で自分の機体の秘密を知っているのは千冬と摩耶、それにローディのみ。

アイツは知らないし、知らなくてもいいことだ。別に訓練してあげられるようなことではないが、機体の調整などで整備科の生徒に渡りでもすれば色々面倒なことになってしまう。

「ラウラにでも付き合ってもらうか・・・」

彼女だって本国に戻れば一部隊の隊長なのだ。自分一人くらいなら色々教えてくれるだろうし、教え方だって上手いに違いない。そう

思って自室のドアを開ける――――！！？

「やあ♪」

「（。Д。）！？」

―――バタンッ！！

おちつけ。ここは俺の部屋だ。帰ったらとびっきりの美少女がお出迎えなんてフラグを立てた覚えは欠片もない。そんなフラグを乱立させるのは一夏だけで十分すぎるほどだ。

「やあ♪」

「（。Д。）！？」

―――バタンッ！！

ハハハ。いやいや勘弁してくれ。そうだ、きっとおれは疲れているんだ。これは日ごろの疲れと欲求不満（↑おい）から来る哀しき男の幻想にすぎないんだ・・・まずはその幻想をブチ壊す！！

オラァ！！っと思いつきドアを開けようとしたその瞬間――――

「捕まえたあ♪」

「うおお！！」

勝手に向こう側からドアが開き、たたらを踏んだ恭平の体を謎の美女が部屋に引きずり込んでいく。

思いつきり引っ張り込まれた恭平の体は慣性に従って女子生徒の胸にダイブしてしまう。

決して狙ったわけではない。ここ重要ね。勘違いするなよな？

(テラ巨乳・・・)

一瞬で抵抗の意志を失ってしまった。

「じゃなくて！誰ですかアンタ！？」

いきなり抱きついてそのまま引きずりこむなんて一体何事だ！？嬉しくないワケでも無くも無い訳では無いのだが生憎とそんなフラグを立てた覚えはない。

「ん？天下無敵の生徒会長だよ♪」

「・・・え？」

「いやあ、カッコイイ男の子がいるって言うからちよっとお邪魔しちゃった！」

「・・・それでしたら織斑君のお部屋に——」

「ああ、それならもうお邪魔したんだ♪」

(なん・・・だと・・・？)

——パチン

あれ？

なんで電気を消すんでせうか？

「ところで恭平君？」

「いきなり下の名前ですか・・・」

「楯無ってよんでね！」

「人の話聞きましょうよ！？」

あれ？

なんかこういう匂いが・・・

「ISの訓練で苦勞してるんだって？」

（なぜ知っている！？）

「一夏君が言ってた」

（あの野郎・・・）

「てか心読むのやめましょうよ！！」

おい・・・？

衣擦れの音がするのは・・・気のせいじゃないな。

てか近づいてきてる！？うわ！電気電気電kおおう！？

「おねーさんが手伝ってあげちゃう♪」

「いや、手伝うって・・・どこ触ってんですか！？」

「軽いスキンシップだよお」

「ああ、やめて・・・いや、そこは・・・」

「ウフフフ・・・」

・・・どこを触られてるんでしょう？

「だからなんてことしてんですか！？」

「えゝ日本人たるもの裸の付き合いってものが――――」

「そんな関係じゃないでしょう！！」

・・・何をされてるんでしょう？

「素直になっていいのよ・・・？」

「せ、生徒会長！？」

「フフフ・・・」

「えっと？あの、え？いやそこは――――」

「ア
ッ
ー!!」

という夢を見たんだ。

アーツ!! part 2 (後書き)

いいえ夢ではないです。久しぶりに描いたから質が下がりまくり。
トンデモナイ駄文ですな。後に修正すると思います。

更識家の絡みはどうしようかな? なんかいいアイディアおちてない
かな・・・

弾幕、薄くなかったですか？（前書き）

きつといい訓練になるとおもうのですヨ

弾幕、薄くなかったですか？

◇

「だ、くっそ。ちよろちよろすんな！」

「しっかり狙えば当たるぞ？俺なんだし」

「……挑発してんのか？」

IS学園内の訓練場。今ここにいるのは一夏と恭平である。何をしているのかと聞かれれば訓練としか言いようが無いのであるが、今日はどうも様子が違うようである。

「ッッ！」

「残念。俺の勝ちだな、恭平」

なんと恭平があっさり負けていた。

別に恭平が訓練をさぼったり、手を抜いたりしたわけではない。問題はその機体にある。

使い始めて間もない機体では慣れないことも多く、新しく搭載されたシステムや微妙な計器の調整のずれなどのせいで思うように機体を操れないでいたのだ。

「なんかこう、軽いんだよなあ」

「慣れれば平気だろ？」

模擬戦では一夏を的にして、制限時間内に落とせなかったら攻撃を仕掛けていい。というルールでやっていたのだ。無論、全部が全部当たらなかったわけも無いし、避けきれなかったワケでもないのだが、なれない機体ゆえに小さなミスが目立ち結局負けてしまったのだ。

「むう・・・回避機動に磨きをかけるか？」

実際この機体での稼働時間はかなり少ない。にもかかわらずおおよそのところはすでに把握し、あとは時間とともに落ち着くであろう問題しか残っていない。

『不知火・雷電』のような堅牢な装甲がない『雪風』である。ここで恭平が選んだのは「避けて撃つ」であつた。

「セシリアにでも付き合ってもらったらどうだ？」

「いや、今はやめた方がいいだろう・・・」

最近セシリアは一人で訓練をすることが増えてきた。みんなでいる時間にはそんな無理をしている様子は微塵も見せないが時折アリーナで見かけるその表情には鬼気迫るものがあつた。そんな彼女に練習の依頼など無粋もいところだ。

「けどなあ・・・他に付き合ってくれそうな射撃型の人っているか？」

シャルルも候補として挙がるのだが、シャルルもシャルルで来たるキャノンボール・ファストに向けての調整をしているし、それはラウラも同様であつた。つまり、助けてくれる人がいない！

「はあ、射撃型の人か・・・この際誰でもいいからいないかな・・・？」

「いるわよ♪」

「「うおおう！？」」

突如背後から湧いて出てきた謎の女性・・・ではなく我らが生徒会長更識楯無。

ズズズっとふたりが勢いよく後退する。

「あら？おねーさん嫌われちゃった？」

（おい、一夏！お前が何とかしろ！）

（え！？いやいや、ロクなことにならないだろ！？）

（いいだろ！先輩のムッチリボディを楽しんで来い！）

（あ！こら恭平！！）

実はこの二人、もうすでに楯無によってイロイロされちゃっているのである。そこを例の4人組に見つかったりさらに楯無がその場をかきまわしてややこしくしたりと、それはもう散々な目に遭っているのだ。

「あゝ先輩、実は急用があつてですね——」

「でねでね？」

「聞けーっ！！」

「・・・・・・・・」

「あん。そんなこと言わないの。おねーさんのアドバイスは的確なのよ？」

（（嘘だ！））

何時の間にやら自身のI Sを展開させ、手をワキワキさせながら目を輝かせている楯無さん。

すごく・・・怪しいです・・・。

「うふふ。実はねえ、スッゴイ助っ人を連れてきてあげたんだよ？」

「「助っ人？」」

「じゃじゃ〜ん♪」

「こんにちは。呼んだ？サラ」

「あ、紹介するね。こちらが強力な助っ人のえいぷーちゃん」

「えいぷー・・・？」

「・・・ちゃん？」

やってきたのは少し小柄な上級生の女生徒だった。楯無が呼んだのだろうから上級生なのは当然なのだが。整った顔立ちと、綺麗な栗色、いや、栗色と言うよりかはブラウンと言う方が正しいのだろう。背中の中ほどまで来ている髪をポニーテールにしていた。目は透き通るような蒼。サファイアブルーとでも言えば分かるだろうか？制服を一分の隙も無く着こなしていて乱れが全くない。上品さを漂わせた美人である。縁がカラーの眼鏡をかけているのだが、それがまたよく似合っていた。

「はじめまして。あなたが有澤恭平君と織斑一夏君かしら？」
よくとおる綺麗な声で自己紹介をされた。

「あ、はい。えっと織斑一夏です」

「有澤恭平と言います」

「ふふ。ありがとう。私はエイプル。サラと同じクラスよ」

「「サラ？」」

「ああ、サラって言うのは———」

「おねーさんのことよ。更識の‘さら’でサラ。日本人の名前は発音しにくいんだって」

「ごめんなさいね。慣れてきたつもりなんだけど、日本語は難しいわね」

そう言ってさわやかに微笑む。苦手とは言いながらもその発音は十分に流暢であり違和感を感じさせない。

「エイプル、で、えいぷーなんですか？」

「そうよ。ちなみに命名はウチの本音よ」

(のほほんさんは渾名つけるのすきだよなあ)

「今日は訓練に付き合ってほしいってほしいのよね？」

「そうです。一応機体を変えたので、回避軌道の訓練をしようかと」

「ふうん。それで私を呼んだのね、サラ」

「そうなの。適任じゃない？」

「そうね。じゃ、始めましょう」

〈訓練開始〉

「配置につきました」

「こっちもOKです」

「はい。一夏君は一応ここで見学ね――――――――――巻き込まれるから」

「あ、はい。……って、え!？」

「……なんでもないわ」

両者が位置につく。まだISは展開させていない。その間にルールを説明していく。

ルールはいたって簡単。制限時間内に恭平が全ての攻撃を避ける、もしくは迎撃できれば合格、というもの。

「この子はヴェーロノーク。宜しくね」

「雪風です。お手柔らかに」

言うなり勢いよく舞い上がる二人。相手が上級生であっても、恭平は物おじせずについていく。

対するエイルプールも綺麗な軌道を描いて空を舞う。

「こちらが繰り出す攻撃を避ければいいわ。行くわよ」
「了解です」

レーダーに映る複数の反応。機体から送られてくる警告音。

——ミサイルか！

総数6。機体を旋回させてやり過ぎ。それでもなを追いつがる2基を手にしたライフルで撃ち落とす。が、

——警告——

後方より熱源接近。

回避を優先して戦闘を行ってください。

「またかよッ！」

今度は逆方向に機体をひねって回避。レーダーでヴェーロノークの位置を確認するも、相手はそこから動いていない。

——警告——

再度熱源接近。

総数九。回避困難。フレアの使用を推奨します。

（さすがにフレアはこの訓練じゃなし・・・だよなッ！！）

「うん。いい反応ね。もうすこしペースをあげるわね」

「え！？ ちょ、タンマ！！」

「ふふ♪」

（くそく美人のクセにやること派手だなッ！！）

だがそんな恭平の言葉には耳をかさずにミサイルが迫る。総数はな

んと十二。

機体を包み込むようにして全方位から迫りくる。

「回避が無理ならッ!!」

片手のみならず両手にライフルを呼び出し迎撃する。ターゲットマ
ーカーが視界を埋め尽くす。

それを撃ち落とす。サイドブースターとバックブースターを駆使し
て機体をその場で旋回させる。

(これで4つ!!)

トリガーを引く。空に炎の花が咲き乱れる。その爆炎の中を白亜の
機体が舞い踊る様は、さながらワルツのようですらあった。もっと
も本人にはそんな余裕はかけらも無いだろうが。

(6つ!7つ!)

「どう、一夏君?すごいでしょ」

「あんなに撃って平気なんですか・・・?」

「大丈夫よ!-----多分」

(10、11!)

「あと一基ィィ!!」

——警告——

後方より高速で接近する熱源あり。

総数三十。回避困難。迎撃不能。OBによる離脱を推奨します。

「ッ!？」

（間に合わねえ!!）

「はい！そこまで！」

こうして訓練は惜しくも恭平の敗北で終わった。

「あゝいいとこまで行ったんだがな」

「ふふ。お疲れ様。弾幕、薄くなかったですか？」

「いえ、十分です。はい・・・」

その後も二回ほど訓練をやって、途中から一夏も参戦したが、結局一度も勝てなかった。

後に聞くとところによると、彼女の弾幕をかくぐってこれる猛者はそうはいないらしい。

ちなみに楯無さんはイケるとのこと。

「それじゃあ私はいくわね。じゃあねサラ」

「うん。おつかれさま♪」

「「ありがとうございます」」

「えいぷーはいつも来れるわけじゃないのよ。だから、いないときは私が――」

「「全力でお断りします」」

「あん。つれないわねえ」

しかし今回の訓練で得られたものは大きい。恭平も今回の随分と感覚をつかんできているようだし、

磨きをかければ持ち前の射撃戦の強さを生かして戦って行けるはずだ。

キャノンボール・ファストまで、あとすこし。

殺人予告（前書き）

後書きにて重要なお知らせあり。

最近は新学期と言うこともあつて忙しいお・・・
一週間に一度になっちゃうかも？

殺人予告



「はぁ・・・疲れた・・・」

そう呟いて恭平は椅子の背に体を預ける。何をしていたかと言えば訓練である。つまりは例の弾幕避けである。あれから暇を見つけては何度か練習に付き合ってもらい、その甲斐あってこの短期間になり上達することができた。ちなみに彼女曰く「弾幕はパワー」なんだとか。

「ぬう。まあ間に合ったのだからよしとするかね」

キャノンボール・ファストまで残すところあと数日。この数日間も、会場設置や機体調整、安全確認や参加申請、その他諸々であつという間に過ぎてしまう。直前のギリギリではあるがこうして操縦をものにできたのは大きい。

一夏も、自身のスタイルに合わせて楯無さんが直々に（半ば趣味）特訓をつけていたようである。

「ん？　そういえばいつものメンツがいねえな・・・？」

少し遅いとはいえ何時のものこの時間の食堂には、シャルルや箒、セシリア達がいるはずなのだが姿が見えない。まあ、いつも食事が一緒というわけでもないし、特に気にすることも無いかと思いメニューに視線を落とす。

「おお！　天ぷらそば残ってるのか！　これはラッキー」

ニコニコ顔でおばちゃんのところへ。体に残る疲れも、天ぷらそばのためならば気にならない。

しかも今日はだるれもない。この幸せを独り占めしていいのだ。

これだけ訓練を頑張ったのだからこのくらいの贅沢はさせてくれる罰は当たらないだろう。

ダダダダダッ

「・・・何気にすることはない」

ダダダダダッ！！

「・・・（汗）」

ダダダダダダダッ！！！！！！

「グスッ・・・俺の・・・平和が・・・」

「「「恭平！！！」」

「何をしに現れた？ここはただの暇人が来るべき場所ではない！！」

哀しいかな、今ようやく手にした幸せと平和は、無粋な足音とそれについてきた5人組によって奪われようとしていた。

「恭平、今すぐ一緒に来て！」

「はやくしなさいよ！もう大変なんだから！」

「いやだ。ボクはここにいたい。ここにいていいんだ！」

——ガンッ！！

「グズグズするな。はやくこい」

鉄拳制裁をかましたのは鬼教師こと織斑千冬である。

かくして、待ちわびていた天ぷらそばは、そのまま片付けられてゆくのであった・・・

——職員室——

「全員そろったな？」

駄々をこねまわす恭平を、力ずくで取り押さえてやってきたのは職員室であった。

そこにはすでに、一夏、セシリア、ラウラにシャルロット、鈴と箒もいるし、その上楯無までいた。

てつきり説教でもかまされるものだと言悟を固めていた恭平は肩透かしを食らったような気分だ。

「本日未明、我がIS学園宛てにある手紙が配達された。この郵便物の内容は一部の者しか知らない。各人、それを理解したうえで話を聞くように」

真剣な声色の千冬をみて、恭平のみならず、その場にいる一同がにわかには表情を引き締める。

そのまま千冬は、内ポケットから一枚の封筒を取り出した。何の変哲もない、それこそ市販されているような茶封筒である。それを机の上に置くと再び口を開いた。

「差出人は不明、いや、正確に言うならばここに記された者ではないという事が分かっている。」

そこにおかれた茶封筒の中から一枚の紙を抜きとる。みたところ特段変わったところのない普通のコピー用紙のようなものだ。そこにワンプロで何かが印刷されている。

「これは・・・」

そこに書かれていたのは苦情でも無く、ましてや激励や感謝の言葉でも何でもない。

そう、一言で言うならば――――

「そうだ。ここに書かれているのは紛れもなく殺人予告だ」

びっしりと文字の打ちこまれたワープ用紙。それとは別に、封筒の中にはもう一枚紙が入っていた。

それにはいっさい文字は印刷されておらず、思わせぶりのエンブレムのようなものが描かれていた。

赤い血にまみれ、生贄に捧げられる山羊の絵がそこには描かれ、それに群がるかのように赤い蜘蛛が描かれていた。正直見ているだけで気分が悪くなるような代物だ。

「先生・・・これは一体・・・？」

おそらくは自分がここに来る前に一度見ていたのであろう。自分以外の反応が予想よりも静かであったことに内心驚きながら恭平は千冬に問いかけた。

「そのままの意味だ。このエンブレムがそれを示している」

そう言うっておかれた紙を顎でしゃくる千冬。だが赤い山羊の紋章がどうして殺人予告になるのだろうか？

「反対から読めばいいのですわ」

答えを教えてくれたのはセシリアだった。

「もともと山羊は古くから儀式や祭りの際に生贄として使われてき

ましたの。つまり赤い山羊の意味するところは“犠牲”と“生贄”。そして―――」

「そして決め手は差出人の名前だ。よく見てみる」

たしかによく見れば、文字が印刷されている方の紙には名前と思しき部分のみ手書きで、しかも英語で記されていた。

「そこにはRed Rumとかいてありますの。筆記体では読みづらいでしょうけど・・・」

言われてみれば、確かにそう読めないことも無い。だが反対から読めというのはどういうことだ？

恭平は頭の中で、その綴りを反対から並べ直していく。

「―――murder?」

「そうだ。murderとは英語で殺人者、もしくは悪意を持っての殺人行為を意味する単語だ。ご丁寧にここに書かれたワープロの文章も全て英語で、しかも反対から読むように逆さに書かれている」

「・・・それをどうして俺たちに？」

「そうだ。問題はそこだ。ここには来たるキャノンボール・ファストへの襲撃予告も同時に記載されている。それについては現在楯無が、全力で警備体制の強化と監視を行ってくれている。そして先日 の福音の一件も含めてお前たち専用機保有者は各国からかなり厳しいマークを受けている」

「「「「「・・・」」」」」」

「そして、これは非常に言いにくいことだが・・・。殺人予告の標的は―――」

「――お前だ。有澤恭平」

???

「あら？ エムじゃない・・・ええ、そうね。・・・わかってるわ。もちろんよ」

聞こえてくるのは妙齡の女性の声であった。声だけで判断するのであればまだ若いであろうことが容易にうかがい知れる。

「そんなこと言わないで。もちろん、こちらにもメリットが無い訳

じゃないわ・・・」

持っているのは小型の情報端末だ。誰かと会話しているのだろう、そこから漏れ聞こえる声も女性の物であった。女の視線の先、窓の外、町並みは、土砂降りの雨にさらされていた。にぎわいを見せているはずの商店街や、美しいレンガ造りの町並みも色あせて見える。その町並みは明らかに日本の町並みではなかった。

「そうね。今頃届いてるんじゃないかしら？」

女はどこか嬉しそうに、窓辺の椅子に体を預けると、紅茶を一口含みながらその口元に微笑を浮かべる。

「相手の方についてはあなたに任せるわ。じゃあ・・・」

???

「ほう？ ついに動きますかな？」

「連中のことだ。周到な計画を立てているに違いあるまいよ」

「亡国企業か・・・面倒なことよ」

そこには20名ほどの男たちがいた。暗く、照明を絞られた会議室のような大きい部屋。

中央の大型ディスプレイを囲むようにして高級なスーツを一部の隙も無く着こなした者たちがそこに揃っていた。

「————その格好はまるでどこかの企業の代表のようですらあったのは気のせいだろうか？」

「よい。それよりも“例の機体”はどうなっているのかね？」

「ククッ・・・今もそこにあるわい。今は息子が使用しているようだがな」

「これはこれは・・・なんとも滑稽な話だ!!」

部屋に木霊する男たちの哄笑。そこには明らかに侮蔑と嘲りの色が隠そうともされていなかった。

ひとしきり嗤うと男たちは咳払いをして場を鎮める。

その会話がいかなる効力を持ち、何を意味するのか。それは余人には到底理解の及ばない話であった。

「いや、失礼した。あまりにも滑稽なのでな。ククッ・・・真実を知らぬか、はは！」

「まあな。だが我々も無関係ではあるまい？もとはヤツの播いた種とは言えそれを持ち去り広めたのは我々ぞ？」

「なに、そこは大きな問題ではない。学園側は何も知らんのだろう？無論小僧も」

「そのようだな。真実を知った時、あの小僧がなんと吼えるか・・・ククク、実に愉快だ」

「奴にもそろそろ知らしめる必要があるのではないか？我々の力を」

「我々、企業連合をあまり舐めないでもらおうか？有澤隆文――」

――職員室――

「話は以上だ。ここでのことは決して口外するな。不要な混乱を招くところになる。いいな？」

千冬の言葉にうなづく一同。そのまま楯無が「学園長との相談がありますので」といって部屋を出ていく。セシリアやラウラ達も、本来なら入浴後、早ければ寝ている時間であるため、部屋へ引き返していく。

「有澤はこのままのこれ。少し話がある」

「・・・・・・はい」

誰もいなくなった職員室。他の面々は氣を使ったのかそれとも察してくれたのか、何も言わずに引き払っていった。

いつぞや自らの機体の機体のことを話した時はローディや山田先生もいたがそれもない。

「聞きたいことは一つだけだ。――――心当たりはないのか？」

「ありません・・・・とは。ただ、あるとするならば・・・・」

「その機体、か？」

「はい・・・・」

実際のところ本当に恭平には心当たりなど全くない。確かに先日的一件も含めて確かに専用機組は目立ったのは認める。が、それが即殺されるなんて言う話になるワケがない。

と、するならば、原因として考えられるのはこの機体と自身のこと以外考えられなかった。

「そうか――――。お前の方も注意だけはしておけよ？最悪出場停止も覚悟しておけ」

「・・・・了解しました」

高まる期待。持てる自らの技術を駆使しての大舞台。全生徒が心待ちにするその大舞台に、今静かに暗雲が立ち込めてきていた。

殺人予告（後書き）

え〜アンケートの結果、皆さん色々投票していただきましたが、原作沿いかオリ主路線でというのが多かったです。僅差で（感想欄以外にも直接言ってくれた方もいました）オリ主路線が多かったのでその方向で。

と、言うわけで、ここらでオリキャラ及びオリジナル武装を募集したいと思います。

キャラや武装、その他スキルなど鋭意募集中です。

ちなみに投稿初期の段階でサザンクロス様よりアイディアをいただいております。本当にありがとうございます。登場がまだ先なのがホントに申し訳ないです。

というわけでもし何かありましたらどしどしおくってくださいー
自分も色々考えております。
ではまた

キャノンボール・ファスト（前書き）

最後に出てきたあの方の名前。分かりますよね…？
え、分からない？ スンマセン。自分の書き方が下手なせいです、はい。
てなわけですがどうぞ。

キャノンボール・ファスト



『皆さま、大変長らくお待たせ致しました。只今より、本校恒例のキャノンボール・ファストを開催致します。』

満員の会場。雲ひとつなく晴れ渡る空に、大会の開始を告げるアナウンスが響き渡る。

朝早くからの生徒有志による会場案内によって、IS企業関係者および各国代表、またその他生徒や一般観戦客が、ここ、IS学園内のアリーナに来ていた。

『開始に先立ちまして、本校理事長より御挨拶があります。その後選手宣誓、大会諸注意を執り行い、試合の開始となります。詳しい日程につきましてはお手元のプログラムをご覧ください。なお、観戦席は禁煙とさせていただいております。喫煙される方につきましては指定の喫煙席にてお願いいたします。』

生徒会の案内アナウンスが流れ、壇上に理事長が立つ。会式のあいさつと日ごろの感謝を述べ、生徒への激励を終え、一同で礼。本来であれば、ここには国歌斉唱や校歌斉唱が入るのだが、そこはそれ。いかなる国家、団体に帰属しないという名目上、また、様々な国家および文化圏からの生徒に対する配慮として、こういった式典の際にはこういった物は省かれている。

「はぁ・・・話長げえよ」

とは言ったものの、こういった式典につきものな長々いお話。大抵飽きてくるとそわそわして手悪さをする奴が一人二人いるものな

のだが、ここにもその例にもれず飽きてしまった愚か者がいた。まあ、そこは幼い彼の心ゆえ。どうか見逃してやってほしい。

さて、話は変わるが、今日のプログラムは少し変わっている。まあ毎年この編成なのだが、最初に2年生のレースがあるのだ。その後に、1年の専用機持ち、一般生徒。そして最後の目玉が3年生のレースなのだ。自らの学園生活のシメとして、どの生徒も熱いレースを繰り広げ、毎年のようにこの会場を沸かせてきたのだった。



「えっと・・・あたしの席はどこなのかな・・・？」

入場口で渡された案内図と、自分のチケットの番号を照らし合わせながら、歩く少女。

年齢のほどは中学生くらいであろうか？少し赤っぽい茶髪をアップにまとめたかわいらしい少女である。彼女の名は五反田蘭。このキヤノンボール・ファストのチケットを一夏から貰いやってきたのだ。ちなみに、前日は嬉しさと待ち遠しさとで眠れなかったのは内緒である。

「はぁ・・・ここってこんなに広いんだ」

自分の通う中学だってきれいで立派な物である自負はある。が、ここはやっぱり凄いなあと思うのは仕方のないことだ。もっとも、超国家機関であるIS学園と、一介の中学校を比べても仕方が無いのはあるのだが。

「きゃっ!!」

「わあっ!!」

しまった。周りを見ていなかったせいで誰かにぶつかってしまったみたいだ。

全く。どうも今日の私は浮足立ってるなあ。生徒会長たるものいつも冷静沈着にと思っていたのだが。

「「ごめんなさい!!」」

ぶつかった相手も、すぐに頭を下げてくれた。よく見ると自分と同じくらいの背格好の女の子だった。誰かに招待券をもらったのだろうか？

「ごめんなさい。自分の席が分からなくて・・・」

ああ、なんだ。自分と同じだったのか。なら――

「ねえ、だったら一緒にさがそう？私、五反田蘭と言います」

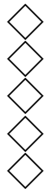
「え？あ、うん。ありがとう」

そういつてこっちを向いてくれた。私と違って綺麗な黒髪。肩の辺りで切りそろえたショートカットのよく似合う娘だった。

「あ、そうだ。名前言ってなかったよね？」

屈託のない笑顔。その笑顔に吊られて自分も笑った。うん、笑顔のきれいな娘だ！

「私、七咲綾子。よろしくね」



『お待たせいたしました。続きまして今年度の第一学年専用機保持者によるレースとなります。同学年内の非専用機保持者との基準に公平を期す為———』

第二学年の白熱したレースが終わり、専用機持ちによるレースとなった。会場のアナウンスもこのレースの解説を始めている。間もなくレース開始と言ったところか。会場の観客たちも、先ほどのレースで盛り上がってきている。これほどの群衆の前でレースをするかには何とかして格好をつけたいところである。

「みんなやる気満々だなあ」

いつもと変わらぬ調子で（でも内心はヤル気で満ちている）一夏がみんなに問いかける。

すでにそれぞれのISを展開させ、準備を終えている。装備されているパッケージもキャノンボール・ファスト仕様と、意気込みの高さを感じさせた。セシリアにしるシャルルにしる、本国から今日この日のための専用装備が送られてきているのだ。それだけ世界が目しているということでもあるし、それだけこの大会が持つ意味も大きいのである。

「当然よ！こいつの最高速度はセシリアにも負けないわよ！」

自慢げに笑う鈴。以前にも増してごつい感じがするのは気のせいではない。増設スラスターを四基搭載した高機動型パッケージ「風」。主武装である衝撃砲が横に向けられているのはおそらく妨害攻撃のためなんだろう。

「こちらも負けてはいませんわ！」

対するセシリアの自信も相当なものである。が、それは決して過大評価や奢りから来るものではない。

本来のセシリアのIS「ブルー・ティアーズ」は実験機的な意味合いを大きく含みながらも狙撃型である。今回においては本来の用途とは少し外れた高機動強襲型パッケージ「ストライクガンナー」を装備している。こいつの叩きだす速度はそれここにいる7人の中では最高速と言っている。無論、それを扱うに当たっての訓練や調整も入念に行ってきたのだからこそその自信なのだろう。

「ふん。闘いに必要なのは武器ではなく心だ。それなくしてはどんな武器も役には立たん」

そんな言葉をはさんできたのは箒だった。多くの生徒が追加装備を選択した中で箒は、（といっても一夏と箒は追加武装がない）そのままの状態であった。結局、課題であったEN不足は調整する中でどうにかクリアしたらしい。

「その通りだ。さらに言えばその上で流れをつかんだ者こそが勝者たり得るのだ」

「そうだね。もちろん手加減はしないよ？」

ラウラとシャルルはやはり追加装備を選択していた。それぞれ増設されたブースターやスラスターのおかげで随分と大きく見える。

「ん？恭平は何にもないのか？」

ここで一夏は恭平も自分と同じように追加装備をしていないことに気付いた。

「俺か？まあ無い訳じゃないんだ。ただ今は秘密だ。とっておきは最後に取っておくモンだろ？」

そういつて自信ありげにニヤリと唇の端を持ち上げて見せる。どう

やらこっちにも何か秘策があるらしい。なかなかどうして皆油断が
ならないのだ。

「ほう。それは楽しみだな。私の成長もしっかり見てほしいな」

「おう。ラウラは最近一人での訓練が多かったよな？その間に成長
させてもらったぜ？」

『みなさうん？準備はよろしいですか？そろそろスタートしますよ
？』

そうこうしているうちに頭上から山田先生の間延びた声が聞こえ
る。

各自、無言でうなずくと指定されたスタートラインに並び立つ。

目の前に広がる会場。そこにいる大勢の観衆。緊張すると言う方
が無理である。

『それではこれより、第一学年専用機保持者によるレースを開始致
しますッ！！』

威勢のいいアナウンスに続いて、レーストラックのシグナルランプ
がカウントを始める。

3…

2…

1…

「ッ！！」

急激な加速。静止状態から一瞬でトップスピードまで加速する瞬間加速。

一瞬視界がねじ曲がり、一夏は自分の立ち位置を見失いそうになるもどうにかこらえ食らい付く。

「お先に♪」

まず先頭に飛び出したのがシャルルだった。スタート後すぐの第一コーナーを絶妙なタイミングで駆け抜けていく。負けじとこっちもスピードを上げる。が――――

「逃がしませんわ!」

視界の端に映った蒼い機影。そしてそれに並走するかのように鈴の甲龍が追いつがる。

「俺だって負けてられるか!」

なおも加速するその後ろから、箒とラウラが、チャンスを虎視眈々と狙っている。早くも激戦の様相を呈し始めた先頭集団。が、そこから遅れたところに映る白い影。先頭集団の混戦を避けたのか、あるいは純粹にその速度についていくことがかなわないのか――――
―――?

「おいおい、いきなり飛ばしすぎんなよ・・・ッ!!」

果たしてその白い影とは恭平の駆る『雪風』であった。背中に装備されたOBによる加速を行ってなお先に行く集団に嘆息するも、あきらめた風には見えない。それどころかこの状況を楽しんでいたかのようにすら見える。

(さて、そろそろ頃合いかね・・・。V・O・B点火。出力最大ッ!!)

——“Vanguard Overed Boost”——

それはISの全長より大きな追加型の大型ブースター。

突然あらわれたそれは『雪風』の背部に接続され——

「「「なっ!?!」」」

「ハッ!お先に失礼!」

嫌味なほどに爽やかに言い捨てるとそのまま一気に一夏やラウラ、
箒を抜き去る。

瞬時加速や、他の追加装備を圧倒するほどの凄まじい加速。第一コーナ―を曲がったすぐの直線コース。ここへきての大きな巻き返しに会場が沸き立つ。

「ははっ!まるで止まってるようにしか見えねな?」

「嘘!?!」

「恭平さん!?!」

想いもしない急激な追い上げに動揺を隠せない二人。その隙を恭平が逃すはずも無くそのまま抜き去る。

(とはいえ、これにも欠点があるんだよな・・・)

超絶的な加速を可能とするVOB。だがこれにはある欠点がある。その一つが基本的に直線でのみ使用できないこと。つまりところカーブできないのだ。その速度故に曲がろうものならたちどころに体がボロボロになるのだ。そしてもう一つが限界時間。正確に記すならば、VOBは追加装備ではなく、ただの後付け。おまけにすぎない。それ自体に搭載された燃料が尽きてしまえばそれ以上の使用が

できないのだ。よって使用するタイミングを間違えれば全くの無駄。無用の長物と化してしまうのだ。

（・・・ここで切り離すか）

まだ余力のあるそれを、一気にトップに躍り出た恭平はためらいも無くパージした。

大きな運動エネルギーを持つそれは、ただ切り離しただけではそのまま前方を飛行する『雪風』にぶつかってしまう。そのためこいつは空中分解するような構造になっているのだ。そしてそれが恭平の狙い。

「わあ!？」

「きゃっ!!」

高速で飛行するその目の前にいきなり分解したパーツが迫ってくる。それは一気に視界をふさぎ、速度を落とさせる。そうすると後から追いつける後続がそれと合流しさらに混乱。残すところあとわずかなゴール目前の最終コーナー。まさにそこは激しい修羅場と化していた。混乱に乗じて集団から抜け出すもの。かなわずコースアウトする者。

白熱するレース。まさに恭平がゴールしようかというその瞬間、異変は起きた。

「・・・ッ!!」

飛来する光の束。それは恭平の視界の端を駆け抜けけると、後続のラウラとシャルルを打ち抜いた。

――大会本部――

「何事だ!？」

「不明ですが、アリーナのシールドに損傷を確認。未確認機の仕業に間違いありません」

「至急観客の安全を確保しろ!レースは中止。急げ!もたもたするな!」

レース終盤、それは起きた。

慌てふためくスタッフらに的確に指示を飛ばすのは織斑千冬その人であつた。

指示を受けた者がパネルを操作し、アナウンスを流し始める。

だがそんなものは千冬の耳にはもはや入ってなどいなかった。そも燃え立つような双眸が見据えるのは

いまだアリーナ内に留まる未知の機体。その瞳は、かつて戦乙女と讃えれたあの頃よりもなお鋭かつた。

「ラウラ!シャルル!」

突然の襲撃。一拍遅れて自体を悟った後続は即座に反転していく。視界にはいまだもうとうと土煙が立ち込め、コースアウトした二人の状態が確認できない。

「・・・テメエ、何者だ?」

恭平は未だ頭上に滞空する機体に向けてそう呟く。おそらくは聞きとつたのだろう。

バイザーに覆われていない口元が歪むのを恭平は見逃さなかった。

「よう、小僧。面白そうじゃねえか——」

「……」

動けなかった。その恐ろしさではなく、驚きがその頭を支配していた。

あるはずが無い。目の前の機体は間違いなくISのはずだ。なのに、なのに——

「————刺激的にやろうぜ?」

それは男の声だったのだから————。

病室にて（前書き）

えゝ友人より、各話のタイトルが迫力に欠けるといわれました。薄々感づいてはいましたがね・・・そのうち大規模な編集をするかもです。

あと、小説のタイトルを変更しようか迷っています。同名の小説やゲームがけっこうあるようなんで・・・どうしようかな？

それからもうひとつ。

・・・古王の口調が書いてみると結構？みづらいんだねこれが＜＜ダレカタスケテ・・・

病室にて

side 恭平

それは突然の出来事だった。高速で飛行する俺の視界の端を、一筋の光が駆け抜けていった。

その光は、自分の後ろをかける後続機に直撃し、そしてその張本人は――――

「どうした？ やらねエのか、ン？」

あり得ない。あるはずが無い。頭上に滞空する機体。それは誰がどう見てもISのはずだ。

ならばなぜ？ なぜそこから聞こえる声が男なのだ？ 驚きは濁流のように脳内を駆け抜け、思考が停止する。瞬間――――

――警告――――

未確認機体からのレーザー照射を確認。

「ッ！？」

「なんだあ？ やりやあでできるじゃねえか・・・そんな顔をもよオ」

（ロックされた・・・いや、いつの間に武装を展開した？）

警告が来た瞬間。その瞬間、衝動に任せて後ろに回避していなければ今頃ヤツの放った銃弾を受けていただろう。先ほどまでは無手だったはずの相手は、今はすでに武装を展開し明らかに交戦の意思を示している。

――敵機体解析不能――――

——所属不明、該当データなし——

「・・・テメエ、何しに来やがった？」

機械的な外見の中に、どこか生き物のような印象を受けるフォルム。曲線的な全体のラインや特徴的な関節部が、さながら昆虫や節足動物を連想させる。人型に近い、洗練されたその機体はおそらく3次元的な射撃戦を想定している。その証拠に、その手には大型のショットガンにアサルトライフル、背部には
おそらくはミサイル、そしてあれば・・・小型のキャノン砲か？

「あァん？ンなモン決まってるだろうが・・・」

「何だと・・・？」

まずい。相手は完全に武装している上にこちらの頭上を取っている。対してこちらはこのレースのために機体を調整している。武装を展開できないわけではないが、基本武装しかできない。

男から発せられる声。皮肉気な、ざらついた声が不快だった。この男とは絶対に相容れない、そんな確信めいた何かが生まれた。

「よせよせ。ただ俺は話をしに来ただけだぜ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

依然として警戒は解いていない。

この男は話をしに来た、といった。これだけのことをして、後数分もすれば間違いなく教師部隊が確実に制圧しにくることなど分かり切っているだろうに、だ。

「簡単な話だ。今回はコイツを渡しに来ただけだ。」
そういつて小さなケースを放り投げる。

おおよそ化粧箱程度の大きさのそれは、硬質な音を立てて俺の掌のなかにおさまった。

「教師部隊なら来ないぜ。細工をさせてもらったからな」
「くっ！」

追撃するか否か――

今ならば一対一。勝機が無い訳じゃない。応援が来るまで持たせればこちらに流れは傾く。
だができるか？この今の状態で・・・

「はなれろ！恭平！！」

鋭い一閃。振りぬかれたのは零落白夜であつた。

その一閃を鮮やかにかわし、

「また来るぜ・・・」

口の端を釣り上げて、ざらつく様な不快な声色でそう言い置くとそのまま亀裂の入ったシールドを飛び出し見えなくなった。

「怪我はないのか、恭平？」

「あ、ああ。体は何ともない」

後に残されたのは手の中にある小さな箱。意味ありげな言葉と、再び訪れることを示唆する言葉。

後の世を知る者は語る。もしこの箱が銃弾に当たっていたら、もしこの箱が取るに足らない物として握り潰されていたならば、こんなにも世界は混迷することはなかっただろうと――。

見上げた空。先ほどまでは雲ひとつなかった青い空は、まるでこれ

からの未来を暗示するかのように曇っていた。

「恭平！」

「無事か？ 恭平」

後ろから声がした。

振り返ってみると、そこにいたのはシャルルとラウラだった。二人とも見たところ怪我などはないようだが、せつかくの装備がズタボロである。いや、むしろ装備だけで済んだことを幸運に思うべきなのだろう。

「大丈夫……ってか二人の方が重傷じゃないか？」

「もう……心配したんだから！」

「まったく。お前と言う奴は……」

二人揃ってぷくーっと頬を膨らませる。もともとがかわいい二人だ。そんなことをしても全っ然怖くない。—————いろんな意味で破壊力抜群ではあるが。

「セシリア達は？」

「無事だって。もう戻ってると思うよ？」

そうか、ならいいんだ。

そう呟こうとして違和感に気付いた。

（あれ？ 体に力が入らない……？）

反転する視界。自分が意識を失っていくのが分かる。

（あちゃー・・・カッコ悪いとこ見せちゃったな）

「ワリイな一夏・・・あとはヨロシク！」

最後の悪あがきに、親指をピッと立てると、俺はそのまま意識を手放した。

side END

「せーの！！」

「一夏、お誕生日おめでとう！————ついでに恭平も」

「俺はついでか！！」

ハッピースマイルのシャルルの声を合図に、景気よくクラッカーが鳴らされる。

さっきの言葉からもわかる通りまあ所謂お誕生会をやっているわけなのだが・・・

「なんでまた病院の中なんだ??？」

説明しよう。恭平のつぶやきももつともである。

あの後意識を失った恭平はひとまず学園内の医療施設に担ぎ込まれた。命に別条はなかったのだが、疲労の蓄積やら何やらで、眠ったままだったのだ。その間一夏達は、それはそれは長い事情聴取を受ける羽目になったわけで。結局解放されたのはどっぴりと日の暮れた夕方。

夕食には早いしかと言って何をするでも無い、と思っていたのだが、

「そういえば今日は一夏の誕生日であったな・・・」

という筈のつぶやきによって急遽お誕生日パーティーを開催することになった次第である。

とは言ったはいいが場所が無い。おまけに恭平が動けないとあってはやろうにもやれないではないか！

と、思ったのだが、病院の看護婦さんが快く快諾してくださったおかげでこうして病室であるにもかかわらずワイワイやっているわけだ。まあ学園内の施設だし、個室だからいいでしょ？ということらしいのだが・・・いいのか？それで。

「しかしまあよくもこんなに集めてきたもんだな・・・」
急な決定であったのにもかかわらず狭い病室内にはけっこう詰め掛けてきた。

整理してみるとこんな感じだ。

セシリア・箒・シャルロット・ラウラ・鈴・蘭・楯無さん・のほほんさん・虚さん・黛さん。

そのほか中学時代の悪友でもあり蘭の兄、五反田弾と級友の御手洗数馬もいる。

んでもって誕生日会と言えば絶対につきもの（というかこれのためにやる？）のがプレゼント交換である。一夏は遠慮していたようだがまあそこはみんなしてコッソリ密かに用意していたのである。

「わ、わたくしからはこれを・・・」

「お？これってティーセットか？それにお茶っぱもついてんのか。ありがとな」

「い、いえ・・・」

セシリアから一夏へのプレゼントはティーセット一式と高級茶葉で

あった。これからしばらくはさぞや優雅に午後のお茶を楽しめることだろう。ちなみに今ここには皆で持ち込んだケーキやお菓子とかがたくさんある。

「ほい、セシリア」

「え？ あ、はい」

「これのお礼だ」

傍にあったロールケーキを切り分けてセシリアに食べさせる。セシリアは腕を怪我してしまったのでこういう風なことは今少々不自由なのだ。

「わあ！ セシリアずるいよ！ 一夏の誕生日なのに！！」
おつといけない。金髪の貴公子ことシャルルに見つかった。

「は、はい。僕からはこれ・・・」

「お？ これって時計だよな？ ちょうど欲しかったんだよな」

受け取ると、シャルルの表情が明るくなる。しかし随分すごい時計だな、アラームやストップウォッチはもちろん、太陽光対応だったり暗闇では光ったりとまあ便利機能満載である。大事にしなくては。

「大事に使ってね！」

「おう。ありがとな」

このあともラウラや箒、鈴からもプレゼントをもらった。楯無さんは「何にもないからアタシをアゲル？」などと言って場を一気に混乱させてくれやがりました。が――――

「くっ・・・解せぬ・・・」

もはや涙さえ枯れたといわんばかりの表情でそう漏らしたのはこの

部屋の主（というか病人）の恭平であった。まあ結論から言えば彼にはお見舞い品はあってもプレゼントはなかったわけで。

正確に言えば、恭平の誕生日は一夏より数日早い程度だから、無くてもしょうがない。が、ついではいえ一緒に誕生会やってるなら俺にもくれ！と思うのは仕方が無い。

「なんで俺にはなんにもないんだYO！」

「―――あるよ」

「「「「ゑ？」」」」

思わず、といった風に病室内の空気が一瞬止まる。入口から聞こえた声。
皆がそこに視線をやると、ショートカットの黒髪の女の子が立っていた。

「あっ！お前・・・」

「ん？恭平の知り合いなの？」

ご機嫌なシャルルが特に気にした風も無く聞いてくるがそんなもの恭平の耳に入っちゃいなかった。

口をパクパクさせたまま硬直する恭平とは対照的に嬉しそうな笑みを浮かべて立っている少女。

「えっと、どちらさまでしょうか？」

困り気味の一夏が、年下であるにもかかわらず丁寧にそう聞いてくれた。

「はじめまして。七咲綾子と言います。いつもお世話になっております」

笑顔のまま、軽い自己紹介をするとその少女はペコンと頭を下げる。が、ここに七咲なんて性はいないし、正直だれもこの女の子を知ら

ないのだ。が、向うは知っているようだし・・・と、なんとも形容しがたい空気が流れる。が、次に出た少女の言葉にまさに病室が揺れた。

「久しぶりだね、お兄ちゃん」
そういつて少女は嬉しそうに笑った。

パンドラの箱（前書き）

今回はかなり短いです。申し訳ない。

パンドラの箱

side 恭平

「・・・さん？聞いてますか兄さん？」

「ん？ああ悪い。全く聞いてなかった」

「もう、今日の夕飯は何がいいですかって話です」

ぬう・・・。

場所は自室。気分も良くなり、パーティの後自室に戻ることを許可された俺は自室に戻って夕食に行くかと思っていたのだが・・・

「だからどうしてお前がここにいるんだ!？」

「招待券をくれたのは兄さんです」

今現在部屋には七咲綾子——旧姓は有澤綾子——がいる。まあ一言で言ってしまうえば妹だ。え？名字が違う?——察してくれ。

「それより体はいいんですか？」

「まあね。ていうか何故にそんなに他人行儀なのよ?？」

「・・・淑女として当然のことです」

ぬう・・・。病室にいきなり現れた時はかなりビビったわ。もうその場のメンツが彼女なのか?とか、後輩?とか、挙句の果てには隠し子疑惑にまで発展しやがって。まったく。

しかも、その、なんだ。どうしてこう兄妹なのに敬語なんか使っちゃって。昔はよく「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と可愛いやつだったのに変われば変わるものだ。

「さて?夕飯は食堂で済ませるぞ?？」

「ダメです。それに兄さんは病人なんですから安静にしてもらわないと」

「いや、だからもう問題無いってさっき——」

「兄さん・・・？」

「はい。私が悪うございました」

しかし今日の自分はうかつだった。こんなにも面白いネタがそばにあるんだ。奴らがそれを見逃しはすがないじゃないか。だから気付かなかったんだ。アイツらがここを覗いてるなんて。

side END

「わあ・・・あのコすごいな。料理できるみたいだよ？」

「むう。私の嫁に手を出すとはいいい度胸だな」

「なによ、そんなに「お兄ちゃん」って響がいいワケ？」

「だ、だがまあ悪くはあるまい？」

「お料理でしたらわたくしにでも出来ましてよ？」

「「セシリアはやめておこうか？」」

・・・年頃の娘がそろいもそろって覗きとは何とも嘆かわしい。先ほどのセリフから誰が誰であるかは分かってもらえると思うが・・・

「ラウラ？まずそのナイフをしまおうよ？」

「ぬ？何を言うシャルロット。密室における制圧戦闘ではナイフの有効性は——」

「はいはい、そんなどうでもいいけど会話が聞こえないじゃない」

「しかし何を作る気だ？」

「わたくしの方が上手に決まっていますわ！」

「「「・・・」」」

しかし、覗かれているとはつゆ知らず。着々と夕飯の準備は進んでいくわけで。

ドア越しに聞こえる嬉しそうな声がなんというか・・・ねえ？

「ふーん？これで何時でもアイツを弄れるわね？」

「や、やめなよ鈴」

「なによ、シャルロットだってもうツ●ッターに流してるじゃない」

「ふむ。つまり制圧後尋問をすればいい訳だな」

「もう！ラウラもそういうことしないでね？はあ、恭平が死んじやうよ」

「殺しはせん。体に訊くこともある」

「「え？」」

・・・一体、何をされるんでしょうか？

「そういえば箒さんが見当たりませんわね？」

「そういえば・・・」

「たしかに」

成る程、言われてみれば箒の姿が無い。いつの間にかこっそりこの場から離れていたらしい。

さて、どこにいったのやら・・・？

「「はっ！！まさか！？」」

この後、抜け駆けをしていた箒が見つかって騒ぎになったのは別のお話・・・。



「さて・・・そろそろコイツの中身を確かめてみるとするか」

深夜。もう12時を過ぎ、皆が寝静まった頃。机の上だけ電気をつけた暗い部屋の中で一人起き出した恭平。その手にはあのときもらった箱が握られていた。

「鍵は・・・ないのか」

別段なにも封や施錠はしていないようだ。そのままあける。

「これは・・・？」

中に入っていたのは小さなデータチップと数枚のフロッピー。

「このご時世にフロッピーとはね・・・」

チップとはともかくとして、フロッピーの方は専用の機器を持ってこないと出来ない。

もう時代遅れとなった記憶媒体だ。いまどきのパソコンではフロッピーの読み込みなんてできないだろう。少し前の型の奴をどこかで見けるしかなさそうだ。

フロッピーを箱の中に戻すと、データチップを抜き取りPCを立ち上げる。

データチップという用語があるかもしれないが、形状としてはUSBメモリーのそれに近い。

異なる点があるとすれば、一般的なUSBメモリーのように縦長ではなく正方形に近いという点であろうか？

「USBなら普通に見られるな・・・」

ちなみに恭平は自室に2台のPCを置いている。普段、レポートや学習で使うのはノートの方だ。

要領や動作の速さなど、スペック的に言えばもう一台のデスクトップ型の方がいいのだがやはり持ち歩けるといふ利点は大きい。普段は使われていないデスクトップなら、覗かれる心配も無いだろう。持ち歩いているわけでもないのだし。

「入っているのは画像データと文章ファイルか？英語なら翻訳かけないとだな・・・」

別段読めないわけではないがこんなにも量がありそうな文章相手ではさすがに夜が明けてしまう。

呼び出した文章に翻訳をかけながら、先に画像の方に目を通していく。

「途上国の画像か・・・これは内乱ってどこか」

中に入っていたのは発展途上国と思われる国の紛争地域を撮影したものらしかった。

これだけでは、何を意図してこのような画像を入れたのかは判断がつかない。

と、画像に目を通してしていると翻訳が終わったようだ。

「こっちが肝心の文章な訳だけど・・・ん？」

画面上に日本語に翻訳された文章が表示されていく。ざっと見たところ結構な量があるようだだがそこは重要な問題ではない。問題なのはその中身だ。恭平自身こうした文章とは全くと言っていいほど無縁な訳なのだが・・・

「これは日記？いや、どちらかというところ報告書みたいだけど・・・」
そこに現れたのは、なるほど。確かに日記と言えば日記ともいえるし、書いてある内容やその詳しさからみても報告書と大差ない。強いて言うならばこれは描いた人間の個人的な手記なのではないだろう。

うか？たしかに普通の日常に起こる出来事ではないようなことが記載されているが概ねそのようなところだろう。これの書き手であろうものの名前が最初に入っている。

フリードマン・レイ（36）フリージャーナリスト

――×月×日

依然として世界は変わってはいない。私がこうして書いている今も経済は循環し、新しい命が生まれそして消えていく。だが私が見る中では今世界は大きく変わろうとしているのではないだろうか？

ISⅡインフィニットストラトス。世界に激震をもたらした存在。女性にしか扱うことのできない絶対的な力を持った存在。その秘密はいまだ解明されてはいない。今私はカナダ北部のある町でこれを書いている。ここではいま大きな変化が起きていた。ここ、カナダ北部は比較的気候も穏やかであり経済的にも非常に安定している。その背景には「レイレナード」の存在があることは誰もが知るところだ。

ISの出現以降彼らは非常に積極的に開発を行っている。もともとが兵器関連、ことエネルギー分野に突出した新興企業だ。そおれが彼らの持ち味と言えばそうなのかもしれない。これから世界は大きく変わっていくだろう。女性優遇の社会、経済の中心がIS産業へと取って代わる日もそう遠くはないはずだ。

「フリージャーナリストの手記か・・・」

随分前に書かれたであろうそれを読み進める。

しかしこれは結構な量がありそうだ。時計を見ればもうすでに1時を回っている。

読みたいのは山々だがこれ以上は明日の授業に支障をきたしてしま

「さすがに今日はこれが限界かな？」

これ以上はやめておこう。

そう思い、恭平はブラウザを閉じて布団に入った。

真実と動き出す者（前書き）

大変申し訳ありません。更新が途切れておりましたね。まあこんな駄文ですから読んでる人はそんなにいないのでしようが・・・

理由としては入院と通院を繰り返していたのが原因です。

真実と動き出す者

夜。

皆それぞれ部屋に戻り各々寛いでいるであろう時間。その時間、部屋には無機質な機械の駆動音とパソコンのマウスをクリックする音だけが響いていた。机の上に置かれたマグカップからは湯気が立っている。中身はどうやらコーヒーのようだった。画面の中に現れる文章を目が追っていく。一見何の寒冷性も見いだせない文章。強いて言うならばその全てがISに関連することぐらいだろうか？その中には他愛のない雑記のようなものあれば、時の大企業の機密情報すら含まれていた。そしてここにまた現れた文章は――

――近代日本におけるIS研究及び開発の経過――

×月×日

・IS研究における開発支援体制、超国家機関の設立を国会が承認。今後国内に超国家施設としての学園が設置されることが可決された。

・IS研究者にして開発者でもある篠ノ之束は依然として行方つかめず。重要人物保護プログラムに従い、篠ノ之束の親族を保護。以後、これに関する個人、団体の情報は許可なき閲覧を禁ずる。

・我が国におけるISの開発及び研究の場は極めて限られている。今後の世界情勢を含め増設や新設は得策ではない。現状は『有澤重工』『倉持技研』への協力を要請するにとどまっている。両者の持

ち得る技術と規模をもってすれば純国産IS初号機の完成もそう遠い話ではないはずだ。

・国際的な大問題が発生した。某高校の受験会場にて受験生の男子生徒が会場に安置されていたISを誤って作動させるという大事件が発生した。これを受け日本政府は緊急措置として該当男子生徒をIS学園に強制転入させることに決定した。

「この国の裏側ってところか・・・」

コーヒーを一口すすると、そう独り呟く。この先も。国内のIS開発の経過に関する事柄がぎっしり書かれていた。

「しかしまあなんでこんなモノばかり・・・」

正直言ってみていて飽きるしまったく意味をなさないものばかりだ。しかしそんな感情はその先に続く文章を見た瞬間消し飛んだ。

——有澤重工ネクスト開発過程における死亡報告書——

×月×日

・実験用ACネクストの開発に成功。同某日、試験運用を開始。経過は良好。

アクチュエーター複雑系およびAMSに改良の余地あり。

×月×日

・AMS適性をもつ人材の発掘。現在は社内のテストパイロットに

一任。

現在のレギュレーション及びAMSは搭乗者に多大な負担を強いる模様。

×月×日

・改良型AMS搭載型打鉄によるテスト稼働————失敗。搭乗者は死亡

同様のテスト稼働を異なる適性値設定のAIにて100回試行————失敗。

×月×日

・試験型AC『陽炎』テスト————搭乗者死亡
・試験型AC『紅姫』テスト————搭乗者死亡

・ ・ ・ ・ ・ ・

「なんだよこれ・・・搭乗者死亡って一体」

映し出されたのは間違いなく有澤重工の社内機密文書。

血生臭い実験の報告書には搭乗者死亡の文字がそこかしこに見て取れた。

そして最後の項目。そこには決して見てはならない事実が書かれて

いた。

×月×日

・完成型ACネクスト一号機『雪風』テスト————実験稼働中
制御不可。搭乗者死亡
搭乗者名『有澤楓』

???

「ええ、構わないわ。でもほどほどにね？あなたも意地悪ね。そんなことをして何が楽しいのかしら」

独特の艶のある声が明りの落とされた部屋に落ちる。

どこかで聞いたような、でも思い出せない。そんな声だった。

「あなたも物好きね。わざわざ偽名まで使って。でも殺しちゃだめよ？彼にはこちら側に来てもらいたいの。名前は確か————」

彼。それはいったい誰なのか。名を発したであろう瞬間、外を通る

車のクラクションがその音をかき消していった。

部屋に音が戻る。その時すでに女は耳元から通信機を放していた。相手がどこの誰であったかは分からない。だが彼女は満足げにほほ笑みながら一人つぶやく。

「そんなにこの世界が退屈なのかしら。まあ、あの人には何もかも“止まって”いるようにしか見えないのかもね」

???

「了解した。なに、こちらにもそんなつもりはない。無論殺すつもりなどないさ」

男の声。どことなく皮肉気に聞こえるのは、おそらく気のせいではないだろう。

男は丸い机――円卓とでも言えはいいのだろうか？――に腰かけていた。

薄暗い部屋の中でも彼以外に腰かけている者がいることはぼんやりと見て取れた。

「ああ、それで構わない。だが一つ確認していいかな？」

男の口元が一瞬歪む。それが愉悦から来る物なのかそうではないのか――

「別にアレを倒してしまっても構わんのだろう？」

男は席を立つ。既に通話は終わっていた。

小さな嵌め殺しの窓からは薄暗い曇った空が見えた。

男は席にいる者に背を向けたまま誰ともなくつぶやいた。

「我々のお披露目も近い。あとわずかでこの世界は変わる――」

真実と動き出す者（後書き）

最後の方のあれは中の人ネタです。元ネタが分かった人はいるかな・
・・？

そのうちそれを題材にしたクロス物書こうかな・・・

まあその中の人が出るということはつまり・・・？

裏設定的な何か（人物設定など） 7／26設定追記しました（前書き）

あれば色々と便利かと。今後多々更新あります。

でもこういうのやると「後付けでしょ」って言われちゃうのよね。

一応言っておきますが後付けではないです。

さらにいうと後付けではないです（大事なことで2回ry

物語の進行に合わせて追記などを行っています。

たまにはここも見てくださいと嬉しい^^;

人物紹介

◆七咲綾子

・旧姓有澤綾子。有澤恭平の実の妹。名字が違うのは養子に出されたから。

養子に出されたのは男手一つでは女の子を育てるのは難しいと思った社長の判断。

早くからケータイを持っていたのでよく兄とは連絡を取っていた。そのため歪まずひねくれずまっすぐ素直に育った。他人には言えない秘密として近親相姦だという事実がある。

要は実の兄である恭平を男として好いているというコト。

むろんこれが所謂「禁忌」であるということは本人も自覚している様子。そんな自分の気持ちに整理をつけるべく半ば自分から望んで養子に出されてる。ちなみにIS適性は低い模様。

ORCA旅団

No. 1 マクシミリアン・テルミドール／オッツダルヴァ

・ORCA旅団団長にして、旅団を創設したメンバーの一人でもある男。物語中盤あたりから動きを見せ始める。後半にて、世界に対し宣戦布告とも受け取れる声明を発信する。ラインアークにて、一度恭平と交戦しているが、恭平の方は彼の素性を知らない。自ら打って出る戦闘者でもありながら、内面はロマンチストな、時には政治的、あるいは扇動家のような側面を見せる人物でもある。普段は偽名であるもう一つの名を名乗って行動している。正体を隠すため

か、乗機も二機あるようだ。後半にて恭平との直接会話を求め接触を図ってくる。

No. 2 ? ? ?

No. 3 ? ? ?

No. 4 オールドキング

・ラインアークに身を置いていあこともあるらしい男。以前は一武装勢力を率いたリーダーでもあった。

恭平に対して自身の母親の死の真相や、それに関する真実を知るきっかけを与えて揺さぶった。

極端な思想の持ち主でありながら、独自の哲学をも持つ異端者。旅団内からも、その在り方を疑問視する声が出ている。

No. 5 ? ? ?

No. 6 ? ? ?

No. 7 ? ? ?

No. 8 ? ? ?

No. 9 ? ? ?

No. 10 ? ? ?

大事なお知らせ（前書き）

とりあえずガチです。

大事なお知らせ

突然ですがこのたび入院することになりました。いやほんとに。

片頭痛持ちなんですすがこれがどうにもひどい。この間学校から急患で運ばれたりもしまして、4月から数えて5日くらいしか学校行っていないんですね・・・

検査入院やら通院、薬の処方やら本格的な入院やらにまで話が逝ってしまいました・・・

他にも気管支炎やら蓄膿症やら捻挫やらを現在進行形で抱えておりましてね、もうダメなんですな！

これからは月単位で更新ができなくなりそうです。無駄に話引つ張った駄文の結果がこれだよ！

まあ、こんな駄文を読んでいる人がいるのかは分かりませんが。

でも完結をあきらめたわけではないです。時間かかってでも完結させたいです。いや、します。

と、思うのでお知らせした次第です。本当に申し訳ありません。

今までご愛読いただきました皆様に心よりの感謝と、精一杯の謝罪をさせていただきます。

もし、またいつか復活した時に読んでいただけましたらこれほどうれしいことはないです。

では最後に一つだけネタバレを。最終回、というか最後に一夏達の目の前に立ちふさがるのは←

『○○○○○○』です！さあなんでしょうね・・・

ではみなさん今までありがとうございました。復活したらまたお会

いしましう。

動き出す者たち（前書き）

ようやく退院。でもまだまだ通院が必要だったりorz
みなさんも体にはお気をつけて。しかし久しぶりだったからかなり
質が落ちた。

スンマセン^^;

動き出す者たち

◇

「あ、みなさんきましたね」

「忙しいところをすまない。全員、こちらへ来い」

大会の襲撃から十数日。平穏を取り戻した学園生活を送る一夏たちは、授業中であるのも関わらず呼び出しを受けていた。今回に限っては悪いことをしたわけではない。それどころか悪事とはおおよそ無関係であろうシャルルやラウラ、箒に鈴といった面々まで呼び出されている。つまるところ専用機持ち全員が呼び出しを受けているわけだ。

「」「」「失礼します」「」「」

7人が声を合わせて入室を告げて、職員室に入る。時間としてはちょうど3限目になるところだ。

おそらくは授業のためで払っているであろう、職員室は人が少なかった。

「えーと、皆さんいますよね？ではちょっとお部屋を移動しますよ」「えっと、山田先生？俺たちはなんでここへ呼び出されたんですか？」

「どーせまたお前がなんかやったんだろ一夏」
「それはむしろ恭平じゃないのかなぁ・・・」

呼び出された理由も話からにままとりあえず前を歩く山田先生についていく。

向かう先は小会議室のようだ。普段の職員会議や成績会議は教科担当ごとに違う部屋でやるから、ここは普段使われていないのだった。ドアを開け、中へと足を踏み入れる。と、そこにはすでに先客がいた。

ビジネススーツに身を包み、ファイルを片手にこちらへ軽く会釈をしてきたのは、

「フィオナさん！？ どうしてここに？」

フィオナ・イエルネフェルト。海上都市ラインアーク技術主任であり、恭平の母代りでもある女性。一体どうしたというのであろうか。

「そうか、有澤は顔見知りだったな。こちらは海上都市ラインアーク代表のフィオナ・イエルネフェルト技術主任だ」

「よろしくお願いいたします」

丁寧に頭を下げるその様子に、つられるようにして皆頭を下げる。千冬はそのまま着席を促し、山田先生が「わ、私はこの辺で」と、退室していく。

「さて、集まってもらったのは他でもない。こちらのフィオナ主任からお話がある」

どうやらあつまった理由は彼女にあるらしい。千冬はフィオナに視線をやるとおもむろに窓のカーテンと暗幕を閉じた。それに加えて手元のリモコンでスクリーンを降ろし始める。

「お話というのは他でもなく、我がラインアークのことです」

スクリーンが完全に降りたところでフィオナは唐突にそう切り出した。

抱えていたファイルから一枚の紙を取り出し、スクリーンにプロジェクターで映像を映し出す。

「この用紙に記載されているとおり、我がラインアークは研究開発機関であると同時に、日本の海上交通の要所でもある、いわば貿易拠点の一つでもあります。そのラインアークで近日中に企業連合による会談が執り行われます。無論これは容易に口外してはならないことです。ですが――」

彼女はそこでいったん話を切るともう一度モニターを操作し映像を切り替える。

最初はただラインアークの全景が映っていたそれが、上空からの俯瞰になり、都心からの詳細な地図と対比してみるそれは、美しい鳥瞰図そのものであった。

「詳細は話せんがこの会談を狙っている一派の存在が指摘されています。いえ、あなた方になら話しても問題はないでしょう。亡国企業。我々の会談は彼らに狙われているのです」

説明を終えスクリーンを上げる。席を立った千冬が暗幕を開けると、外からの日差しがこれでもかというほどに眩しかった。その眩しさに目を細めながら、7人は話の続きをきく。

「お願いです。ラインアークにあなた方の力を貸してほしいのです。ISに対抗できるのは同じISだけ。あなた方に、我々の切り札になっていただきたいのです」

◇
夜。

一日の授業があつという間に終わつた。これほど時間が過ぎるのが早く感じるとは思ってもみなかったことだ。

「亡国企業、か」

一人になった部屋の中で恭平はつぶやいた。最近はずっと使っているPCも今は閉じている。あの記録。あれを見たときにもう二度と見ないことに決めたのだった。

あれを渡しに来た男の顔は今でもはっきり覚えている。

まるで、何もかも知っているかのような、そんな顔。あいつはきっと全部知っていたのだ。

そのうえでこれを渡した。

「何してんだろうな、俺」

こんなことになるなんてこれっぽっちも考えていなかった。

いつの間にかこんなことに巻き込まれていて、気づけばその真っ只中にいた。

親父の、ひいては母の事件の真相も何も知らぬままに。

「確かめてやる——」

亡国企業。奴らがくるというのなら、間違いない。あの日大会を襲ったあいつらもきつと来る。その時だ。その時、何としてでも問い詰めてやる。

そう決意すると、恭平は明りを消した。



「恭平がおかしい？」

部屋に戻った後。ラウラの口からそんな声が漏れた。いつになく真剣な顔つきのラウラに、ルームメイトのシャルロットも、髪を梳かす手を止め聞き返した。

やわらかな金髪が、部屋の照明を受けて輝く。この髪が、シャルロットのちよつとした自慢でもあった。

「い、いや、そのなんていうかな」

視線をさまよわせ、言葉を選ぶように、何とも歯切れの悪い言い方をする。

シャルロットはせっつく様なことをせずに、傍らに腰を下ろすと無言で続きを促した。

「思い詰めているっていうか、余裕がないというのだろうか？その、らしくないんだ」

ラウラは気になっていた。いつもは明るく屈託のない恭平が、大会後、どこかぎこちないというか、思い詰めた表情を浮かべることがある、と。

今思えばその場で聞いてみるのも良かったかもしれない。だけど、そんな表情を浮かべた恭平に話しかけるのはためらわれたのだ。

「なら、ラウラがすっかりしなくっちゃね」

「え？」

唐突にシャルロットはそういった。ココアを片手にっこり微笑むいつもの顔で。

「恭平が落ち込んでるなら励ましてあげなよ。こういうときは女の子がしっかりしなくちゃね」

「・・・そうか。うん、そうだな」

やっぱりシャルロットにはかなわないな。

そう思いながら、寝る前のココアを楽しむことにした。



夜。

ここにもまた、動き出す者が一人。

月明かりのさしこむ窓辺に腰かけ、手にした写真をみやる。写されているのは次なる標的の写真。海上都市ラインアーク。

「政治屋共・・・リベルタリア気取りも今日までだな――」

手にした煙草を口元へと運び、ゆっくりとその紫煙を味わう。

どこか憂いを帯びたようなその顔のまま、またゆっくりとその紫煙を吐く。

窓辺の手すり。そこへ煙草を押しつける。と、そのまま落ちる煙草に視線を投げかけることもなく、その場を去る。

既にその顔は、数瞬前の憂いではなく、戦いに臨む戦士のそれであった。

「――貴様らには水底が似合いだ」

呟く。

ただ誰でもなく、まるでそこにいない何かに語りかけるように紡がれた言葉は、しかし誰にも届くことなく闇の中に消えていく。

動き出す者。阻止するもの。

徐々に役者はそろいつつあった。あと少し。海上都市ラインアークからすべてが動き出す。

企業連合首脳会談まで、あと、わずかであった。

ラインアーク防衛（前書き）

ようやく体調が安定してきた・・・ホッ。

だがしかし随分書いてなかったから質が落ちたねエ。

もともと文才の無いこの身ですが、最後まで頑張ります。

※新作でリリカルなのはと空の境界のクロスも始めちゃいました
ハ；

ラインアーク防衛



海上都市ラインアーク。

海の真ただ中に建つそれは、まさに洋上の孤島と言ってよかった。各施設をつなぐ大きな高速道路の様なものが見える。それがラインアークの流通の要であり、その下や隣接する施設も、コンテナ船などのための施設だ。

謳い文句である研究関連施設は、実はこの全体からみれば4割程度である。

陽光を照り返し、眩しく光る海面から目を放し、恭平は部屋の中へと視線を返した。

「さて、ほんとにここを狙ってくるのか・・・」

いまいるのは自分たち専用機持ちにあてがわれた、いわば待機室だ。部屋の中にはそれぞれ一夏や箒と言ったいつもの面々が待機している、とは言ったもののいつも通りおしゃべりをしているのはいささか緊張感に欠けるのかもしれない。

「恭平、アンタもこっち来なさいよ！このままだとアタシが大貧民よ！」

「・・・俺が行っても変わんないだろ？」

「う、うるさいわね！少なくともアンタよりは強い自信があるわよ！」

奥ではセシリアと鈴、シャルルが大富豪に興じていた。

箒は紅椿の様子を見てくると言って部屋を出ていき、一夏は今トイレのはずだ。

「よっしゃ。いいだろう、俺の方が強いに決まってるだろう」

「ふーん、じゃあ負けたら晩ご飯奢りね」

「あら、私がいるのを忘れてますわよ、鈴さん」

今のところ三回連続で鈴がビリ。シャルルとセシリアがいい勝負を繰り広げているのだ。

鈴としてはTVゲームよりこっちのカードとかボードゲームの方が得意なのだが、どうしたことかさっきから負け通しである。

「でも一応待機中なんだから、いつでも動けるようにはしないとね」

そう、もうすでに会議は始まっているのだ。

いや、性格には首脳陣が集まりきった、と言うあたりか。

本格的に会議が始まるまでまだ少し時間がある。それにここは海上保安庁やらの警護も受けているのだ。

もし自分たちが呼ばれるとしたらよっぱどの時である。

「じゃあ今度はセシリアからね」

手際良くシャルルがカードを配り終え、手札を確認する、と。

（うわぁ・・・こりゃとんだザコ引いちまったな）

そんなことを少しも周囲に漏らすことなくあくまで平静を装う。ちようどそこへ一夏と箒も戻ってきた。

「なにやってんだ、みんな」

「ほう、大富豪か。あとで私も混ぜてもらおう」

隅で本を読んでいたラウラも顔を上げてこちらへ加わってくる。

「おい、恭平それ・・・」

「ばっか、余計なこと言うんじゃない！」

思わずといった風に恭平の手札を覗いた一夏がそう漏らすのを鈴は聞き逃さなかった。

「はっはーん、さてはザコばっかなワケね？謝るなら今のうちよ？」

「ほっとけ！こういうのはな、カードよりも本人の頭がモノをいうんだよ！」

「じゃあ、セシリアからスタート♪」

シャルルの声を合図にゲームが始まる。

ここでセシリアはまずはダイヤの3　続くシャルルがスペードの5

（さてどうすっかな・・・）

今自分に回ってきたが正直手札が弱い弱い。

隣で鈴がニヤついてるあたり、強いカードはあっちに固まったのだろう。

ならば。

「ほいさつと。これで縛りな」

出したのはスペードの6

これでスペードの7以外は出せない。その肝心のスペードの7は今自分が持っている。

「あゝあ、アタシはパス」

「私ですわ」

「僕もパスかな」

ここでいったん切られてそのまま自分のターン。俺のターン、ドロップ！！

「ほいさつと」

まずは無難にクロバーの4。

続く鈴がここで一気にハートのクイーンを出してくる。

「っ！やりますわね鈴さん・・・」

「今度ばかりは負けないわよ！」

そうは言いつつもさらりとダイヤのキングを出すあたりセシリアの手札もなかなかのもの。

「うゝん、もったいない・・・かな？」

苦笑しながらホイッと出したのはダイヤの2

「・・・パスだな」

「じゃあまた僕からね」

海上都市での穏やかな時間。その姿をまるで鷹のような目で見る者がいることに彼らはまだ、気づかない――――

◇

「無事、執り行えそうではあるな」

「ご協力、感謝します」

生徒の待機室とはまた別の部屋。スタッフたちが詰めているそこにいたのはフィオナと千冬だ。

「ただまだ油断はできないでしょう」

「そう、ですね・・・」

こうして待機しているとはいえ、2人はもちろん彼らが出張る羽目になどなってほしくはない。

IS、それも専用機持ちが出張るというのはそれほどの緊急時であることを意味し、同時にそれだけの危険の中に教え子をさらすことになるからだ。

「なにも、起こらなければいいのだがな・・・」

「はい・・・」

だがその淡い望みは無残に打ち碎かれる。

ひとたび動き出した歯車は止まらない。たとえそこへ小さな石ころが挟まったってそれを力ずくで押しつぶして進んでいくのだから――

◇
人気のない、ラインアークを貫く橋の欄干に建つ男が一人。否、その男に影のようにつき従う者がもう一人いた。

「――行けるな、フラジール」

「はい。敗率はほとんどありません」

「そうか、それはよかった」

皮肉気に口元を歪め、男は手に持つ煙草を、宙へと放る。

美しい放物線を描いて海へとおちるそれに目をやることもなく、欄干から離れ歩き出す。

その手には黒く鋭利なナイフ。だがそれは通常のそれではない。あるはずのない、ありえてはならない力の原型。

その目に映るものすべてが“止まって”見えるほどの力――

「じゃ、行こうか・・・」

その視線の先。天を貫くかのようにそびえるラインアークのメインタワービル。

中央を走る道路を挟むようなその中に、標的がいる。

ならば容赦はいらない。ただ目的を、果たすのみ――

「――時間だ、ステイシスッ!!」

《Yes. My master》

瞬間、男は光に包まれる。

時間にしておよそ3秒ほどであったはずだ。

だがすでに、光の消えたその場所には、男の姿はなかった。

ただ、その身を切り裂くかのような突風と共に――

◇

「主任ッ！レーダーに反応あり。こちらからの誘導に対し反応がありません」

「ッ！！ 呼びかけを続けて、MS、千冬」

「分かりました」

その一言ですべてを察すると、千冬は素早く部屋を出、専用機持ちの待機室へと駆ける。

――ボタンッ！！

「「「「「ッ！？」「」「」「」」

「全員速やかにISの状態を確認しろ。確認次第A―105エリアに集合しろ、いいな！」

それだけ言い置くと、皆の返事を聞くことなく取って返す千冬。

「ウソ・・・ホントに・・・？」

「呆けている場合ではないぞ！急げ！時間はないんだ！」

一番早く行動を起こしたのラウラだった。

既にその顔は平治に見せる穏やかなそれではなく、ドイツ精鋭IS部隊隊長のそれだ。

ドイツの冷水とうたわれたその目はすでに見えざる敵に向けられている。

「ああ、いくぞみんな！」

「うん！」

「わかってるわよ！」

一夏の声にはじかれたように部屋を飛び出す。
A-105エリアは、すぐ、そこだ。

◇

「本部ッ！本部ッ！こちらA-106エリア警備隊！支給応援を――ぐああ！」

「未確認機、A-106エリア警備隊へ発砲！このままではメインストリートまで突破されます！」

「学園の生徒は！？」

「たった今向かわせた。まもなく会敵するはずだろう」

突如、否、予告通り現れた襲撃者は、圧倒的なスピードでこちらに迫っている。

該当区画の緊急閉鎖に加え、避難誘導も行っているがこれでは間に合わない――

「A-106エリアに専用機を確認。会敵します！！」

（死ぬなよ、お前たち・・・）

モニターに映るその光景に、無意識のうちに手を握り締める。
今の自分は一線を退いた身だ。今はただ、あいつらに託すしか方法がないことを悔みながら。

◇

「見つけた・・・セシリア、シャルル、援護頼む。鈴と箒、一夏は
応援要請のあった場所へ」

「私も行かせてもらおうぞ」

システムクラックで開閉不可能になっていたハッチをちからずくで
突き破り、瞬時加速を行う。

傍らを飛ぶラウラにアイコンタクトし、飛ぶ。

その身にかかる加速に耐えながら、その視界に黒く鋭角的な機体が
映る。

——アイツだ。

すでに敵はこちらの防衛機能のあらかたを封殺していた。
ここまでわずか十数分。ISの圧倒的な性能があったとしても、驚
異的な早さだ。

「貴様、何者だ！こちらからの誘導に従わないのであれば発砲を許可されている！」

開口一番、ラウラの怒りとともに吐き出された言葉が、その黒い機体に叩きつけられる。

両者の距離は100メートルほど。ISの戦闘であればまだ近距離に入る距離だ。

こちらに体に向けて動かない敵に、ラウラの大型レールカノンが照準を合わせる。

と、突然それは言葉を発した。

「――有澤恭平か。なるほど面白い素材と聞いている。期待させてもらうぞ」

（俺のことを知っている、コイツ・・・）

「貴様、警告を無視するのか！それ以上近付くならば――」
「よせ！ラウラよけろッ！！」

もはやそれは本能だった。

ISからの警告よりも早く背筋を駆け抜けた悪寒。

冷たい刃にも似た感覚に、気づけば自分は叫んでいた。

「ラウラッ！」

「え――？」

もはや怒号に近かったその叫び。しかしそれはあの黒い機体の前にはあまりにも遅すぎた。

吹き抜ける突風。大型のレールカノンの砲身が半ばから真っ二つに

され、凄まじいダメージを受けてラウラがゆっくりと倒れるのが、まるで絵のように鮮やかに映った。

「デメエ・・・ッ！」

ギリッと奥歯をかみしめて凝視する。

その黒い機体は自分の遙か背後にいた。その動きの一つを見せることもなくいとも簡単に。

「その機体、なかなかの物のようだな。だが」

既に展開された武装。両手に銃を構え、背部に4つの砲身をもつ武装を選択した機体。

——迫る。

鮮やかな瞬時加速。予備動作すら見せないその軌道を、半ば倒れこむようにしてかわす。

（こいつ・・・強い！）

乾いた男の声が紡ぐ。

フルスキンの機体から発せられたその声は、どこかに憂いと、そして期待感の様なものが入り混じっていた。

「進化の現実ってやつを教えてやる——」

かくして役者はそろった。
——激戦の幕が、上がる。

白からの輝還（前書き）

はぁ、試合負けちゃったorz
県のベスト8でしたよ。

これからは後輩の面倒見たり試験の勉強あったり、病院行ったりと
忙しい！！

クオリティ落ちてるかも知れませんがどうぞ

※感想や批評バッチこいです。初投稿なので勉強させていただきま
す。

それから、サザンクロス様、アイディアありがとうございます。
使わせていただきます。

白からの輝還

◇

「がっ!!」

「どうした? こんなものではあるまい」

戦闘開始から数分も経っていないだろう。だというのに、既に恭平は満身創痍だった。

対する男の機体は、徐々に弱っていく恭平を弄ぶかのように情け容赦のない攻撃を加える。

(レベルが・・違いすぎるッ!!)

視界の端に映る機影に照準を合わせるも、一瞬にして目の前から消え失せる。

単純な話だ。あまりにも早すぎるのだ。その機動も、攻撃も。そのすべてに無駄がない。

そのあまりにも速すぎる機動の中に弄ばれる恭平は、もはや限界と言ってよかった。

―右腕部損傷―

―AP70%減少 回避重視を推奨します―

「クソツたれ!!」

無情にも機体を守るシールドのEN残量は減っていく。

その防御力の大半をシールドに依存するIS。ひいてはそれを模して造られたネクスト。

絶対的な戦闘力をもつ両者が有する致命的な弱点がそれだ。

たとえどんなに強くても、たとえどんなに早くても、ENが切れて

しまえばただの鉄屑にすぎない。

「いい加減に、堕ちろよッ!!」

手にしたライフルを連射する。しかしその弾幕をいともたやすく潜り抜け、相手の放つミサイルに翻弄され、レーザーが機体を掠める。

(これ以上はマズいな・・・)

右腕武器… MR-102…残弾ゼロ

左腕武器… EB-0305…異常なし

左背武器… EC-0300…残弾ゼロ

頭部… HD-HOGIRE…処理速度低下

コア… SOLUH-CORE…シールド出力低下

腕部… AM-JUDITH…右腕部損傷

脚部… LG-JUDITH…損傷拡大

残弾の尽きたライフルを宙に放り捨てる。登録された武装をコールすれば、まだ戦える。『不知火』で使用できた武装の大半はこの『雪風』でも使用可能だ。

だが遅い。その武装をコールする瞬間すら惜しい。

海へと落ちるライフルに視線をやることもなく、残る左腕のブレードですれ違いざまに、敵のレーザーライフルを切り落とす。

「はあはあ、これで、どうだよ・・・？」

「ほう？まだ動けるか。ならばその心を踏み砕く！」

瞬間、目の前から機体が消える。

「がはっ!!」

「限界だな。それ以上戦うならば命の保証はできんぞ？」

直後に走る衝撃。

全方位からのミサイルとライフルによる乱射をともに浴びたことを、思考のまとまらない頭でかろうじて理解した。

視界がぶれる。

敵が何かを言っているのが聞こえる。でも届かない。理解できない。霞む視界の中で、敵が背を向けるのが見える。

（こんなところで・・・）

だが、その意志に反して体は言うことを聞かなくなっていた。握るこぶしに力が入らない。

恭平は、今自分が飛んでいるのか、それとも落ちているのかさえ分からなかった。

段々と暗くなっていく視界の中に敵の機体が遠ざかっていくのが見えた。

（わるいな一夏・・・みんな、ごめん・・・）

そのまま、恭平はゆっくりと意識を手放していった。



「落ちた！？恭平が！？」

「そんな・・・馬鹿な！！」

「一夏！気を抜いちゃだめだよ！」

「コイツ、いい加減しつこいわよ！」

味方機を示すアイコンが消える。それが何を意味するのか――それが分らないほど、彼女たちも幼くはない。

恭平が墜ちた――

驚愕は動揺へと変わり、そして迷いにつながる。そして、その迷いを見逃してくれるほど、目の前の敵は甘くなかった。

「これで終わりですか。何ともあつけない」

異形。一言でいえばそれだ。目の前に浮遊する敵の姿はあまりにも異様だった。

おおよそ人型とは思えないような構造。

簡略化されたマニピレーターに、ほぼ機能していないと言っている脚部。

極めつけはそのコア部分だ。

空力に特化したと思われるそれは、もはや装甲などないに等しいだろう。

だが、その空力特化構造が生み出す空戦能力の高さは、現存する全ての機体の上をいくだろう。

名をフラジール。

英語で、“壊れやすい”という意味だ。空力に特化し、半ば防御を無視したこの機体を一言で表すならば、まさにこれであろう。

「一夏、アンタは行って」

「ここは僕と鈴で押さえるから」

「シャルツ！鈴ッ！」

恭平が墜ちた今、これ以上ここで足止めを食らうことはできない。鈴のとっさの判断は、状況をみた正しい判断であった。

「箒とセシリアは一旦戻って！ここは僕が押さえるから！」

その言葉にうなずくと、箒とセシリアが本部へと取って返す。後を追う一夏も、すぐさま恭平のいた方位へ反転していく。

「逃がしませんよ」

「させないッ！」

追撃を掛けようとする敵に向けて、鈴の衝撃砲が火を噴く。つづくシャルロットがアサルトライフルの一斉射を浴びせ、その追撃を押しとどめる。

追撃を阻む二人の猛攻が、次第に敵を追い詰めていく。

海上に乱立する、道路を支える柱。その間を縫うように飛び交い、互いの武器を乱射する。

だが、いかんせん2対1。さらには継戦能力を重視した甲龍相手では、フラジールも押されるしかない。

「プランD。いわゆるピンチですね」

劣勢にありながらも、戦況を冷静に判断するその心の強さはさすがと言える。

だが、その思考に埋没し。目の前の甲龍だけを見ていた彼は、上空から接近するラファール・リヴァイヴ・カスタムⅠⅠに気づかなかった。

「はあああッ！！」

その手には大型のショットガンが握られ銃口をこちらに向けている。すぐさま離脱すると、そのまま弾幕を張りながらお構いなしに突っ込んでくる。

「これはいけませんね・・・」

このままでは勝てないと見切りをつけ、離脱のタイミングを計る。と、不意に射撃を中断し、眼前のリヴァイヴが離脱していく。

「一体どういことです・・・？」

轟音。

気づいた時にはすでに手遅れだった。

自らのすぐ横の柱。海上を無数に走る道路を支える柱の一つ。

その一つが、轟音とともに崩れ落ちる。

鈴の衝撃砲に加えて、大型ショットガンの連射を浴びたそれは、道路の重みに耐えきれず瓦礫の山になって降り注いだ。

必死に機体をひねり回避を試みるも、広範囲に降り注ぐ瓦礫を避けることは不可能だった。そして、空力に特化したその機体に、これを受けて生き残れるだけの防御力はなかった――

「AMSから光が逆流する・・・！ギヤアアアアッ！！」

◇

「恭平ッ！」

駆け付けたその先で、恭平の機体がゆっくりと海面へ向けて落ちてゆく。

たとへI Sを装備した状態であろうと、この距離から海面に叩きつけられればただでは済まない。

だが、先の戦闘で消耗した白式には、さらに加速するだけの余力はない。

そして、落下してゆく恭平に背を向け離脱を図る機影が一つ。

「あれが恭平をやったのか？」

拡大して映し出された黒い機体は、こちらに気づきながらも攻撃をしてくなかった。

今ならまだ間に合う。

「間に合ってくれ！」

もどかしさを抱え、恭平へ向けて手を伸ばす。

いつもならあつという間に詰められるはずの距離が、いまは果てしなく遠く感じる。

この体を感じる空気さえ、まるで水飴のように絡みいてくる。

「恭平ッ!!」

叫んで手を伸ばす。もう海面まであとわずかしかない。
もう後先を考えず、瞬時加速を使おうとしたその時だった。

「なんだ・・・これ・・・？」

一夏の目の前に、光が広がっていった。



（ああ、俺墜ちたんだ）

驚くほどに冷静だった。自分でも驚くほどあっさりとその事実を受け入れている。

練習の時はもっと、「落ちたら痛いんだろうな」とか思っていたのに。

体の感覚はなかった。まるで宙に浮いているような感覚。

無重力というものを味わったことはないけれど、味わうとしたらきつとこんな感じなのだろう。

熱くはない。でも寒くもない。

苦しくはない。でも何かが足りない。

何もない。ただ、真っ白いだけの空間。ここはもしかしたら天国なのだろうか？

半ば本気でそんなことを思った時だった。

——もう、諦めるのですか？

（声！？ いったいどこから）

——まだ、戦えるものではありませんか？

女性か、はたまた男性のものか。

耳ではなく脳に直接語りかけるようなその声は、はじめて聞くはずの声なのにそう思えない何かがあった。

——力を、望みますか？

（力ってなんだ・・・？）

語りかける声は、なにも強制はしなかった。

力とはなにか。あまりにもシンプルな、だけどとても難しい疑問だろう。

力とは、なにも物質的なものだけではない。

その心、その言葉、その在り方。

この世にあるすべての物が持つ“力”

それは時に暴力となる。

でも時には友愛の力にもなる。

善悪が表裏一体の存在。振るう者に全てを委ねる無色のモノ。

それが力なのだろうか？

（力は、欲しい）

——何のために？

（護るために）

——誰のために？

（この目に映る人のために）

そうだ。聞かれるまでもない。始めから答えは自分の中にあっただ。

ただ、それに気づかなかっただけで。

この、誰とも知れない声に、不思議と敵意も警戒心も持たなかった。ずっと昔から知っている、そんな気がしたから——

——迷いは、ないわね？

（ないよ。俺がやるべき事はずっと変わらないから）

振り向いた。何となく、そこにいるような気がして。

果たしてそれはそこに在った。居るのではなく、在ったのだ。

カタチのない、でも自分にはわかるその存在。

光に包まれたその視界の中で、なお輝きを放つそれに触れる。

（あったかい・・・）

わずかに鼓動の様なものを感じた。まぎれもなく、生きているのだと実感する。

命のカタチ。

——行きなさい

声が、聞こえる。

行かないや。俺はここにはいられない。だって、まだ待っている人がいるんだから。

いつだって、帰りを待っている人がいる。だから――

――さあ、いきなさい！！

俺は走り出す。ふり返ることも、言葉を返すこともなく。

一瞬、その視界の端に映った微笑み。

その微笑みとともに、微かに香る花の匂い。

ああ、そうだ。俺はこれを知っている。ずっと昔からそばにあった、大切な記憶。

そうだ、これは――

「ありがとう。――母さん」

その微笑みに別れを告げて、その光を飛び出した。

◇

「はっ!!」

耳元で唸る風。

覚醒した意識は、一瞬で現状を把握する。

落下する機体。迫る海面。その瞬間まであと――――

「うおおおッ!!」

あの光の中でもらったあの輝き。

その輝きをイメージしろ!

イメージしろ。最強の自分をイメージしろ!!

勝てないはずがない。同じ人間だ、やれるはずだ。

負けられない。負けてなんかやらない。お前が俺より強いのなら、

その強さを超えるイメージを作り出せッ!

《Return from the white》

system all green.

pilot name is Kouhei Arisawa.
weapon's date.

Head parts.. WHITE-GLINT/HEAD

Arms parts.. WHITE-GLINT/ARMS

Core parts.. WHITE-GLINT/CORE

Legs parts.. WHITE-GLINT/LEGS

Main weapons

051ANNR

063ANNR

日本語に言い換えるならば、まさに『白からの輝還』
視界を覆う光。

それは、あの場所で感じたあの光と同じものだった。
分かる。これが何であるのかが分る。理解できる。体が理解する。

体の隅々まで満ちていく力強さ。

ぶれる視界がはつきりとし、握るこぶしに力がもどる。
光が消える。

そこに建つのは純白の機体。

滑らかな曲線を描き、背中に背負ったブースターが目を引く。

調和の取れたその美しいフォルムは、兵器ではなく、一つの芸術で
すらあった。

(これでいける!!)

瞬時加速。

未だかつてこれほどまでの加速を成し得たことはなかった。

体が軽い。自分の体のように、いや、体そのもののように自由に動
く。

今ようやく、この機体は完成した。

これでこの機体は俺のものになった――

さあいこう。戦いはまだ、始まったばかりだ。

◇

「再起動だと・・・？あり得るのか、こんなネクストが」
そんなはずはない。

確かにこの手で撃ち落とした。その手ごたえに偽りはなかった。
ならば。

ならばこの状況は何だ？

男は自問する。

絶対の一撃を以て葬った敵が、いまだ健在。そして、一度落とされてなお光を失わないその瞳が、射抜かんばかりの力強さでこちらを睨みつけている。

「——いいだろう」

男は覚悟を決める。

その手に握っていたはずのレーザーライフルは既に失った。
のこるは背中のみサイルとアサルトライフルのみだ。

だが、そんなことは男にとってはどうでもよいことだった。
銃を握りなおす。敵を見据える。鼓動を感じる。ただそれだけ。
ただそれだけで、男は覚醒する。

——遙かな昔。

侍たちは、刀を抜いた時点で斬る、斬られるの関係を当然のように受け入れた。

それは、戦いの前に覚悟を決めるなどと言うことではない。

極限まで鍛え上げられた、戦闘意志の切り替え。

かくして、肉体はその血流に至るまでが戦いの為に作り変わり、その頭脳は、生き残るために最適な手段を模索する。

「いくぞ。――今度こそ容赦はしない」

純白の機体と、漆黒の機体。

交わるはずのない視線が交わる。

波の音すら、その裂帛の気合の前に静まり返る。

全てが静まり返ったその瞬間――

「「おおおおッ!!」」

再び、激戦の幕が切って落とされた――

明かされる真実（前書き）

気づけばg d g dと話数が伸びている件。本当に申し訳ない。
話をまとめられなかったり、表現や文章が幼稚なのは、初投稿ゆえ
の不甲斐無さです。こんな自分ですが末永くお付き合いくださいま
すよう。

なにはともあれ完結目指して頑張るゾ！

明かされる真実

白と黒の機体が交差する。

目にもとまらない高速で繰り広げられる戦いは、さながらワルツのようでもあった。

（軽い！まるで羽みたいだ）

恭平は自身の機体の変化に驚愕する。

基本的に、ネクストは絶対に『第二形態移行』をしない。いや、正確に表現するならばできない。故に、初期状態で最高の性能を発揮できるように設計しなければならぬのだ。

だがどうだ？

今こうしている自分の姿は。

先ほどまでの耳鳴りも消え、視界がクリアになる。その動きの全てが理解できる。

「そこっ！！」

「なにッ！？」

自信の資格へと回りこむ鋭い機動。だがその動きを逃さない。

背後から迫りくる銃弾をかわし、手にしたライフルで弾幕をはる。

後退するその隙を逃さず、分裂ミサイルによる追撃でさらに迫いする。

おかしいな感覚だった。

今までにないほどの高速戦闘を行っているはずなのに、感じる感覚は今までにないほど穏やかだった。クリアになった視界は、敵の指

の動きすら見逃さず、その頭は叩き込まれる情報を速やかに処理し体へと伝達する。

研ぎ澄まされた聴覚は、いまにも敵の鼓動が聞こえてきそうだった。

「見えてるって言ってんだよッ！」

ミサイルの爆炎にまぎれ、密着状態からの一斉射を浴びせかける。たまらず後退し、背中を見せる一瞬。

「逃すかッ!!」

「くっ!このままでは・・・」

その背中にライフルの弾丸を容赦なくぶち込む。

背中からまともに攻撃を浴びた敵が、必死に上昇を図るも、既にメインブースターを潰した。もうこれ以上の飛行は不可能だ。

「メインブースターが完全にイッてやがる!・・・ダメだ、飛べん!」

「やったの、か・・・」

海中に没していく機体を見ながら呟く。

「終わったのか・・・ッ!??」

安堵した瞬間だった。

頭をハンマーで殴られたかのような激しい頭痛が襲いかかってくる。先ほどまでのすがすがしさは消え去り、グルグル回る視界と、激しい頭痛が意識を持って行きそうになる。

「あ・・・ぐッ!」

思わず呻き声を漏らすも一向に頭痛は治まらない。

やがて、手足の感覚すらなくなってきた。

（これはヤバいな・・・）

まるで他人事のようにそんな事を思いながら、恭平はゆっくりと目を閉じた。

そして数時間の後――



「仕事中失礼。有澤社長」

どこか高圧的な、だがしかし良く通る声がその部屋に響く。

品の良い調度品の置かれたその部屋は、一目でそういった人間に集う部屋であることを理解させる。

「・・・ここは君の様な教員の来る場所ではないのだが？」

「必要とあらば躊躇いはしない」

「・・・」

男―有澤隆文は自らの秘書から突然の来客があることを告げられる。それに驚く間もなく、こちらから招いたわけでもなく堂々と社長室に踏み入ってきた者がいた。

「成程。恭平の事を聞きに来たわけだな？」

「話が早くて助るが、洗いざらい吐いてもらおうぞ」

織村千冬。IS学園教員にして、かつては世界最強の称号をもったその人にこりともせずさらりと受け流すあたり、相当な場数を踏んでいるであろうことは想像に難くない。

「それで。一体何の用だ？織村千冬君」

「簡潔に言うのであれば、アレが何であるかについて教えて頂きたい」

言葉こそ丁寧はあったが、千冬言葉には有無を言わせぬ迫力があつた。

自分は大よその所を掴んでいる、とでもいうかのように。

「・・・知ってどうする？」

「別にどうも。というよりはできないというのが正しいだろうか？」

社長に対してもなおいつもの口調で話すその胆力は並みの物ではあるまい。

疑問形で聞かれたはずのそれさえ確認するような響きを以て放たれる。

隆文は自らの計画が露呈したことを悟る。もはやここまで来て隠し通すことはできない。

「いいだろう。そこまで知っているといるのであれば最早隠しだてはせんよ」

「・・・」

無言で先を促す千冬を見据え、隆文は静かに語り出す。

「もう掴んでいることだろうが、恭平の機体はISではない。そう

だな、強いて言うなれば擬似ISとでも言えればいいのか」

ISではない。その単語に視線を鋭くする千冬。
だがそれを意に介した様子もなく隆文は続ける。

「かつてある計画があった。ISが開発されて間もない頃の話だ」

「当時の軍関係者や技術者らはその存在に危機感をもった。それは圧倒的な戦闘力をもつからではない。何故だか分るか？」

「・・・技術の独占、だな」

「そうだ。圧倒的な性能をもつISは、ただ一人の天才によって生み出された。その技術を一人が独占するということはすなわち、ただ一人の手によって世界が激変することを意味していた」

ただ一人の天才。明確に名など出さずとも、誰であるかなど分りきったことだ。

それに千冬はおそらくこの世の誰よりもあの天才の事を知っている

「限られたコアの総数。限られた適正保持者。そして明かされることのない天才の持つ技術。その有能さを見せつけていくISは、同時に世界を危うくさせた。開発のための資源獲得競争にはじまり、市場の急速な拡大。女性の立場も急速に押し上げられた」

そうだ。そこまでは教科書にも載っている。だが重要なのはそこではない。その裏にある事実こそ、千冬が求めるものだった。

「多くの企業がIS産業に参入した。我が社だけではない。GA、BFF。現在も世界有数の企業として成長した企業の多くはISに関わる企業ばかりだ。日本は、そのIS操縦者育成のためにと超国

家機関の設立を余儀なくさせられる。国家がたがいにも優秀な操縦者を育成し、限られたコアを争奪し合う。そんな中でこの計画はスタートした」

「それが、『project of Links』か？」

「・・・どれだけの技術を持とうとISの総数は変わらない。ならば、より安定した大体戦力を各国は求めたのだ。ISはどれだけ強くとも表向きは兵器としての運用を禁じられているのが大きな理由だ」

結局、考えることは皆同じだったわけだ。ISは確かに強いが表立っての兵器運用はできない。だがしかしここでISを手放せば、自国の持つ戦力、戦争の抑止力を失ってしまう。

危ういバランスの上にある安定が崩れてしまう。そんななかで、ISに替わる代替戦力の開発はむしろ必然と言えた。

「開発は極秘裏に進められた。だが、うまくは行かない。ISを似せたフレーム、武装などはいくらでもできる。だが、決してできないものがあつた」

「ISのコアパーツか・・・」

「そうだ。国を挙げた研究を行ってなおコアのブラックボックスは解析できなかった。コアの解析が出来なければISをISたらしめる主要な機能が使えない。だがそれでは代替戦力としては不十分だ。結果、我々は研究の方針を一転させた」

「一転させた・・・？」

「簡単な話だ。ISコアの解析が出来ない。ならば、可能な範囲内でISコアに変わる機能を作ればいい。いや、兵器として運用され

るならば、操縦者に合わせた成長機能など不要だ。純粹に、ただ機体と操縦者を結び付けるシステムを作ればいいと考えたのだ」

「なんということを・・・」

ISのコア。いまなお解析が不可能とされ未知の力をもつそのパーツ。時にISを成長させ、時には操縦者の生体回復すらやってのける。だが、そんなものは兵器には不要だ。

当時の開発者たちはそう結論づけた。成長させるならば最初から強くあればいい。

回復するくらいなら、攻撃を受けなければいい。

より効率よく機体と操縦者を結び付けるために研究が繰り返された。それは一步間違えれば非道な人体実験にもなり得るものすらあった。国を挙げた研究でさえ、あの天才にはかなわなかったのだ。

「かくして計画は成功したよ。試作機として放棄されていたISのフレームにそのシステムを融合させた。予想以上の結果だったよ。我々はこれを『Next』日本語にするならばまさに次世代機だな。そう呼称した」

「・・・それが、有澤の機体の正体か」

千冬はふつつと湧き上がる怒りを抑えきれなかった。その様なものを実の息子に扱わせるなど・・・ッ！

「だが、我々は愚かだったのだ。行き過ぎた研究はそれ以上の物を生み出し、そしてISに替わって国を守るはずだったネクストは、いつしか国を脅かす存在になった」

「なに？」

「機密が漏れたのだ。漏れた先はかつてのIS企業レイレナードだった。気づいた時は既に遅かったがね。かくして極秘裏に進められていた計画は露呈し、世界にその技術を拡散させてしまった。当然それは企業連合の耳にも入る。技術は複製され世界に散らばった。そして恐れたのだらうな、その力を。そして、あの事故が起きた」

「それは・・・」

「知っているのなら言わなくてよい。表向きには事故だ。たとえばその実態が暗殺だったにせよ、な。・・・あの機体、『雪風』はかつて恭平の母親が実験していたものだ。すでに完成していたものだったが、データの採取が目的だった。事故など起こるはずもない」

事故など起きない。当たり前だ。既に完成を迎え、後は稼働時間の蓄積とデータ採取が目的の実験機に事故の要因などはなかったのだ。

「大破した機体のプログラムには巧妙に悪性のプログラムが仕組まれていた。いまだに犯人は不明だがね」

長い語りが終わった。

社長室のいすに、大きく息を吐きながら腰かけて、壁にかかる時計の針をみると、すでに千冬が来てから1時間がたとうとしていた。

「・・・それが例の組織にも伝わっているわけか」

「そこまで掴んでいたか・・・。どうやらただの教員ではないらしいな」

「・・・」

「まあいい。結論から言えばそう言うことになる。ごく一部に名を知られる組織『ORCA旅団』その構成員がネクストを使用しているのは間違いないだろう」

「ではなぜ！なぜそのような機体をご自身の――」

「対抗できんからだよ」

「なに・・・？」

対抗できない。一瞬千冬は何を言われたのかが理解できなかった。

「・・・ネクストはISを擬似的に再現したものだ。よってその性能も使用されるエネルギー源さえ違う。通常稼働時は特殊なバッテリーの様なものでシールドや武装を運用する。だが、それでは性能の3割程度しか出せず、持続時間も第二世代のIS程度だ」

「エネルギーだと？」

「『コジマ粒子』発見者の名前から名づけられた。この粒子はそれ単体では何の利用もできない。だが、これを特殊な環境下で反応させると膨大な電気エネルギーが発生することが分った。だがこれにはある致命的な欠陥が存在するため公で使われることはない」

「致命的な欠陥・・・」

「確かに少量で大きなエネルギーを発生させはする。だがその代償に人体に有害な物質をも発生させてしまうのだ」

「ッ！！」

「わかるか？これは操縦者に対しても影響を及ぼす。無論、戦闘を行った環境、相手に対してもだ。その為、通常時は超高密度水素吸蔵合金による燃料電池で稼働している。だがひとたびコジマを使えば、その出力、持続時間ともに現行の第三世代を上回る。その代償にコジマ汚染を引き起こすがな。コジマは・・・拙い」

「有澤の機体はそれを・・・？」

「搭載はされている。が、使用は固く禁じている。故にあの機体を学園に入れることには抵抗もあった。だがそうでなければならぬ事情もあった」

「その事情とは？」

一拍置き、隆文は語る

「いつか来る戦い。ISの劣化品でありながらISを上回るネクスト。それを以て連中が何もしないはずがあるまい？間違はなく奴らは我々を潰しにやってくる。その為にIS学園に入れた。3年間だけではあるが、いかなる国家、機関の干渉を受けず、データを採取し、必要な経験を積めるのはあそこだけだ」

「・・・」

「聞きたいことはそれだけか？ならば去れ。もうここに貴様の求めるものはない」

「・・・そのようだ」

背を翻し、来た時と同じく無造作に扉を開け放つ。

退出の際にすら何も言うことなく黒い背中が消えていくのを、有澤隆文はじっと見つめていた。

宣戦布告（前書き）

一か月経ってしまった・・・だと!？
ホントにスンマセンッ!!!!（土下座）

親に書いているのがバレ、絶賛反対されています。

親は絶賛反対中。俺は絶賛抵抗中。そろそろ受験勉強しなさいだの
大学どうするの等々色々ね・・・

読んでいる人がいるかは分かりませんが、どうかよろしくお願いいたします。

こちらも完結目指して頑張るので m（　　） m

※持病（？）の偏頭痛は徐々に治りつつあります。

7/26 誤字及びミスの修正をしました。

宣戦布告

◇
歴史にもしもは無い、と人は言う。

歴史とは、既に積み上げられた不変の事実であり、I Fを考察することに意味は無い、と。
そこにある事実を受け止め、そこから何を得ていくかが重要なのだと。

だがそれでも人は誰もがI Fの可能性を求め続ける。
それが人の性であり、同時に本能とも言えるのかもしれない。

もしも、あの時こうであったのなら、と――――

◇
《おはようございます。今朝は予定を変更して、延長してのニュースとなります――》

画面に映るニュースキャスターが、心なしか緊張した面持ちで渡された原稿に目を通す。
カメラの背後にはひっきりなしにスタッフが怒号を飛ばしあっている。

だがそのニュースを見ているモノは誰ひとりとしていない。

いつもならばこの時間、ここIS学園の食堂は、一日の始まりと共に、多くの生徒たちが集う所であるはずなのに。

ネコ一匹いない閑散とした食堂は、その誰もいない空間にニュースの音声を反響させ続ける。

ここだけではない。

寮にも、教室にも、アリーナにさえ、今は生徒たちの姿は無かった。閑散とした部屋はあまりにも寂しく、まるで死んでいるかのようにだった。



「諸君。集まってもらったのは他でもない。皆も知っていると思うが緊急事態だ」

体育館に集められた生徒。一学年だけではない。全校生徒が肩を寄せ合うようにしてそこに集まっていた。

その表情は、心なしか、怯えているようにも見えた。

「今朝のニュースや各国での報道は真実だ。これからは生徒は全員教員の指示で動いてもらうことにもなる可能性がある」

壇上でマイクを握っているのは織斑千冬だ。

本来、一教員に過ぎないはずの千冬だったが、今そこにいるのは教員ではなく、かつて世界最強と謳われた戦乙女であった。

「昨日深夜、国籍不明のテロリスト集団による全世界への宣戦布告が放送されたことは諸君も知ってのとおりだ」

壇上に立つ千冬は、声を抑えるでもなく、また荒げるでもなく淡々と事態を説明していく。

「テロリストの詳細は不明だが、各国はこれを重く受け止めている。一教育機関であり、同時に超国家機関たる我がIS学園も、相応の事態と見て警戒に当たることとなった」

「今後は、単身での外出は一切禁止だ。ISの使用やデータの管理にも厳重な警戒が必要となる。以上だ」



普段ならまだ授業が行われている時間にもかかわらず、俺―有澤恭平は自室に籠っていた。

俺に限った話じゃない。今日はそもそも授業どころの騒ぎではないのだから。学園の教職員は全員対応会議に出席をしている。

今更ではあるが、この部屋は二人部屋だ。最も男子が俺一人（一夏を除く）の現状では、相方がいないと言った方が正しいか。

まだ日も暮れていないのにもかかわらず、カーテンを閉め切ったその部屋で、俺はずっとテレビの画面を見続けていた。

「終わったな・・・何もかも」

ベッドの上で膝を抱える。俺は、今日ほど自分が嫌いになった事は無い。

ずっとこの日が来るのが怖かった。ずっと知られるのが怖かった。

チャンネルを回したって意味は無い。

どこの局にしたって同じだ。昨日の、あのニュースをずっと流している。

「俺は、ずるいな・・・ホントにさあ」

ずっとここで、3年間生きていけると思っていた。

いつかその時が来るのは分っていた事だ。自分はみんなとは違う。みんなと同じ世界にはいられない。

「はは、終わりだよ。ホントにもう、何もかも」

力なく笑う、その口からこぼれた声は自分のものではないかのようにだった。

ふと、枕元のケータイになる。

一体誰であろうか？

「もしもし・・・？」

その向こうから聞こえた声に、俺は言葉を失った。



「大事に、なってしまったようだな・・・」

「ああ、そうみたいだな」

珍しく、箒の方から部屋に来てくれたのはついさっきの事だ。
心なしか、その表情は硬かった。

「私達には、所属する国が無いからな・・・どうなるのやら」
「そうか、箒のは東さんが造ったんだもんな」

あのニュースがあってから、学園の中の空気は一変してしまった。
それだけあのニュースがもたらした影響は大きかったのだ。

「そういや鈴やラウラは？さっきまで一緒だったじゃないか」
「ああ、一夏には言って無かったな。みんなは本国との連絡に忙しいぞ」

「そっか。まあそれもそうだよなあ」

いつもと変わらない、穏やかな笑みを浮かべる一夏。
その微笑みに、箒は少し驚いたようだった。

「一夏は、あまり驚いていないのか・・・？」

「ん？ いや、俺がすることは変わらないぜ。お前を守る」

「一夏・・・」

その言葉に顔を輝かせるも――

「もちろん鈴やセシリアたちもな！」

「・・・一夏」

ぱあっと輝いた顔が一瞬で曇っていくのをまるで分っていない一夏ではあるが。

まあそんなところが一夏の良さでもあり悪さでもある。

「そういえば恭平はどうしたんだろうな」

「そういえば顔を見ていないな・・・」

◇

「あ、ラウラおかえり」

「ああ、シャルロットか」

ガチャリとドアを閉めると、背後からシャルロットの声が聞こえた。

どうやら自分よりも先に部屋に戻っていたらしい。

「ラウラの方はその、大丈夫だった・・・？」

「クリラッサの方が何とかしてくれるようだ。私の部隊はそこまでヤワではないぞ！」

誇らしげに胸をそらして見せる！部隊長としてはこういう時こそ能力が求められるのだ。

だが、いまはそれよりも心配な事があった。

「コホン・・・それで、だな。その、相談があるのだが・・・」

「うん。恭平の事でしょ？」

「・・・・・・・・／／／」

ニコっとした笑顔のまま、ココアのマグカップを二つ持って、シャルロットは目の前のいすに腰掛ける

バレバレであつたのが何とも悔しいが、凶星なので言い返せない。

「その、な。最近の恭平が、特に昨日のニュースを見てから凄まじく落ち込んでいるというかなんというか」

「ああ、そういえば僕達のコト避けてるような気がする・・・のは大袈裟かな」

ズズッとココアをすすりながら、どう説明した物かと悩んでいると、どうやらシャルロットにも覚えがあるらしい。

「どうしたらいいのだろうか・・・？」

「うーん。聞いてみたらいいんじゃないのかな？きっと答えてくれ

るよ！」

「そうか・・・うん。そうだな！」

やはりシャルロットは頼りになる。いつも何だが頭が上がない気がするのだが・・・

こう、全身から漂う母性と言うかなんというか。

シャルロットに礼を言うと、私はそのまま部屋を飛び出した。

◇

「あゝアンタうつさいわねえ。いい加減静かにしなさいよ！」

「鈴さんこそ。・・・さっきまでブツブツ独り言ばかりだったでしょうに！」

「アンタに言われたくないわよ！」

「わたくしも鈴さんには言われたくありませんわね！」

ふたりしてギャアギャアと言い争いながら器用に自国の大使と器用に連絡を取るのは、セシリアと鈴である。肩で器用にケータイをはさみ、耳を引っ張り手を出し足を出しの小競り合いは、みてるとうまあなかなかに面白い。

「はあ、それにしても面倒ねえ。例のテロ集団だっけ？ボッコボコにしてやろうかしら？」

「そこは同感ですわ・・・本当でしたら今日は・・・」

「―――今日は何よ？」

ジロリと睨みつけられたセシリアは、器用に視線をテレビに逃がす。

視線の先にあるテレビでは、昨日のニュースが繰り返されている。

《犯行声明の一部をくり返しお伝えしています。

——一部の者たちは巨万の富を得、一部の者たちは劣悪な環境下に残され、未だ発展を遂げられないでいる。企業の体制を維持するために、途上国と先進国の差はさらに拡大し、それは、正常な世界をも浸食し始めている。今の企業は矛盾を抱えた独裁体系にすぎない——ご覧の映像は策や深夜に突如発信されたモノであり、声明の中で、IS保有国に対する武力介入をも示唆する発言を——》

「何言ってるのかわかんないけど、いい迷惑よねえ・・・」

「まったくですわ。そもそもIS保有国に対しての宣戦布告など正気とは思えませんわ」

ボリュームを下げながらため息交じりに背筋を伸ばすと、ボキボキと、鈴の背骨が豪快に鳴る。

この声明が世界に与えた影響は大きかった。

国籍、規模、人員。そのすべてが不明なテロリストからのいわば宣戦布告ともとれる声明。

IS保有国に対する武力行使を示唆する発言は、平時であれば悪い冗談とみなされたであろう。だが、こうまでも自信ありげな犯行声明を叩きつけるのであれば、なにか秘策があるのではないか？

各国がそうした不安をもつのにそう時間はかからなかった。

これを受けて各国は、自国の代表候補生の入るIS学園に対し、徹底した対策と、安全を要求したのは当然の流れであっただろう。

「そういえば恭平はどうしたのよ？アイツここの所元気ないじゃない」

「大方、鈴さんのうるささに辟易しているんじゃないくて？」

「なんですって!？」

「ほくら二人とも。ケンカはお終いだよ？」

キリツとまなじりを吊り上げて怒る鈴を止めたのはシャルロットだった。

いつの間に入ってきたのやら、いつもと変わらない微笑を浮かべたシャルがそこに居た。

「なによ！せっかくいいところだったのに・・・」

「鈴さんこそ！いつもわたくしを目の敵のように・・・」

ぐぬぬ、と額をくつつけるようにして睨みあうも、2人の仲が良い事はシャルロットもよく知っている。

（二人とも素直じゃないなあ・・・）

「織斑先生が呼んでるよ。専用機持ちは全員集まるように、だって」

「ふくん。分ったわ。すぐ行くからちよっと待ってて」

「わたくしもいきますわ！」

そのまま3人は、あらかじめ伝えられていた教室に向かう。

その後に起きる騒ぎなど知る由もなく――

◇

「ほう？直接話すのは初めてだったか・・・初見となる。こちらマクシミリアン・テルミドールだ。こちらの指定する場所に、この時間に来てもらいたい」

「な！？アンタは・・・一体」

聞こえてきたのは男の声。まるで自分を知っているかのような口ぶりに一瞬、警戒するも、すぐに話の続きに引き戻される。

「君の事は聞いている。いや、君も知っていると言うべきかな？まあいい。率直な話、君と直に話をしたいと思っている。用件はそれだけだ」

「あっ・・・おい！って切れてやがる・・・」

言うだけいうと、その電話はすぐに切れてしまった。だけど恭平の耳にはしっかりと残っている。最後に男の発した言葉を。

——同じ力をもつ者同士でな——

「・・・・・・・・・・」

そのまましばし黙考する。時間にすれば5分と無かっただろう。うつ向いた顔をあげると、恭平はおもむろに窓を開け放つ。

外には、人一人いない静かな街並みが広がっていた――

◇

「全員集まったか・・・」

「千冬n・先生、恭平は・・・？」

鈴とセシリアが着いた時には、もう箒や一夏が先に席についていた。

「問題無い。ラウラが呼びに行った。もうじき帰って――」

「教官ッ！！！」

その時だった。ドアを蹴破らんばかりの勢いでラウラが入ってくる。平時では教官などとは呼ばないが、それすらも忘れるほど焦っているのが見て取れる。

「どうした！！それにここでは教官とは――」

「恭平が！恭平が！！！」

息をつく暇もなく怒鳴るようにして放たれた言葉に、今度こそ皆が驚愕する。

「恭平がいなんです!!」

対話と決意（前書き）

またグダグダと話が長くなってしまったorz

こんな駄文を読んでくれている方が一体どれだけいるのかと思っ
ていたりいなかったり。

次話で一夏達と恭平のガチ話になります。上手くいけば古王の登場
もあり。

あと少して完結！・・・できたらいいな

※喫茶店の店名のネタが分かる人いるかなあ^^；

対話と決意

街を行き交う人の中にその姿はあった。

「ここか・・・」

『喫茶アーネンエルベ』

それが、直接対話の為に指定されたポイントだった。

そして、今恭平が立つ場所でもある。

連絡された場所と時刻はあっている。都心の喧騒から遠く、路地の裏にまるで忘れ去られたかのようにひっそりとした喫茶店だった。

なるほど、たしかに『アーネンエルベ』という店名がふさわしいだろう。

（本当に、いるんだろうな・・・？）

今恭平がここに居ることは誰も知らない。

いや、いずれはだれかが気づくだろう。だが、どこへ行ったかそれを知ることはいはずだ。

あのニュース以降、学園の警備は当然固くなっている。

だが、それは外からの話だ。脱け出すことは、日々学園内に居る生徒の側からであればさほど難しい話では無かった。

「・・・入ろう」

意を決して店のドアをくぐる。

ドアを開けると、取り付けられたベルが小さくもよく通る音色で入店を告げる。

（なんか、すげえ場違いな気がするな・・・）

中に入ると、恭平のイメージとはまるで違う喫茶店であった。

古風なアンティークで飾られた店内は、決して古臭さを感じさせず、それでいて経てきた時を美しく彩っている。

やわらかな明かりが店内を照らし、磨き上げられたテーブルがその光を跳ね返す。

喫茶店と言うよりかは、どこかバーのような雰囲気に近いのかもしれない。

恭平のような年齢の客が来るような店ではなさそうだ。場違いに思いうのも無理からぬ話であろう。

「――遅かったじゃないか」

「え――？」

不意に、声をかけられた。

それが自分に対するものであるということを理解するまでに数瞬の時間を要したが、相手はそれで気を悪くするようなことは無かったようだ。

「そう驚くことはあるまい？ 君をよんだのは私だよ」

「ッ！じゃあアンタが・・・」

ふり返るとそこには一人の男がいた。
日本人で無い事は一目でわかった。

短い髪をオールバックに整え、わずかに浅黒く焼けた肌がのぞく。
目にはサングラスをかけていたが、それでも射抜くような、鷹のよ
うな視線を感じるほどに威圧感があった。

「初見となるな。マクシミリアン・テルミドルだ。ここまで来て
くれたこと、まずは感謝しよう」

「・・・・・・・・」

「そう硬くなることもない。今私は君をどうしようという意思
は無いよ」

その時、恭平は不思議とこの男の言葉を信じていた。
そのどこか憂いを帯びた様な声色には、嘘偽りの無いそのままの心
が宿っている気がしたから。

◇

「ばかな・・・・・・・・！！」

既に遅かった。

いや、そんなことはラウラの言葉を聞いた時にすでに分かっていた

はずだ。

「教官・・・」

「すぐに有澤の行くへを調べる！お前たちは全員待機している！」

誰もいない、もぬけの殻となった部屋を見るなり、千冬はすぐにもと来た方へと取って返す。走りながら携帯を握るのをみると、おそらく誰か人を使うつもりなのだろう。

「アイツ、どうしてこんなことを・・・」

「どこにいったんだろう・・・？」

窓のあけ放たれた部屋には、夜の冷たい風が入り込んでくる。それが一層さびしさを増す。

「・・・・・・・・」

「ラウラ？大丈夫！？」

見れば、ラウラの顔は顔面蒼白、今にも倒れてしまいそうだった。

「あ！おいラウラどこに行くんだよ！！」

驚きの声をあげたのは一夏だ。

見れば、凄まじい勢いで廊下をかけていくラウラの後ろ姿があった。

止めようと追いつがるも、軍隊での訓練を受けているラウラに敵う筈もなかった。



「――で、どうして俺を選んだのさ」

「なに簡単なことだ。君と私は同じ力をもっている」

「ッ！じゃあアンタも――」

「ああ。君と同じ“リンクス”だ」

まるでこちらの反応を楽しむかのように薄い笑みを浮かべながらそれを告げる。

ずいぶん前に出されていたコーヒ―は、すっかり冷めてしまっていた。

「私の声明は聞いただろう？ 話は簡単だ。――私の依頼を受けてはみないか？」

「依頼・・・？」

「我々は現在のこの欺瞞に満ちた世界に対し、武力を以て変革を促す。ISの存在は大きすぎた。世界のバランスが崩れるのはそう遠い話ではない」

「・・・ISはまだ管理されてる。それに軍事転用だって禁止だ！アンタが言う様な事なんか何一つ起きちゃいない！」

「―――そうかな？」

その一言に、何故か言い返すことが出来なかった。

問い詰めることも無く、ただ冷静に出たその一言には確信ともとれる響きがあった。

「君は既にその身をもって知ったはずだ。今の世界の矛盾と闇を」
「・・・・・・」

「そう、例えば銀の福音。秘密裏に処理され公になることこそなかったが、あれは紛れもなく軍用だっただろう？そして君は自身の力の制御を失うという事態にすら陥った」

——そうだ。

思えばあの時、確かに織斑先生はこう言っていた。

『軍用』のISであると。

「アメリカが主導で開発した銀の福音。この意味が分るか？世界のトップである米国の水面下ではすでに条約など無きに等しい。共同開発したイスラエルも同様だ。その波紋は不安定な中東や、対立する他の国家にも及ぶ。すでに国家の崩壊は始っている」

「・・・・・・」

悔しいが、事実だ。経済、政治、あらゆる面で世界をリードする米
国が、条約を破棄してまで軍用の機体を開発した背景。

そこには間違いなく不安定な戦力への危機感がある。

表向きには軍事転用を禁止しながらも、誰がその通りに従うであろうか？

いつかはだれかが破るだろう。

いつかはその力を使うだろう。

その不安は、結局ありもしない事態を想定させ、いつしかその不安
だけが独り歩きするようになった。

「こうした例はこれだけではない。・・・キューバ危機を知っているかね？」

「キューバ危機・・・？」

単語だけなら知っている。

ISが開発される少し前の時代。

大国であるソ連とアメリカの間に起こった冷戦の事だ。

その緊張は、あと一歩で世界を巻き込む核戦争にすら至るほどのものだった。

この教訓を生かしてホットラインが引かれたことは誰もが知ることである。

「かつてのこれと一体何が違う？これと同じことにならないと誰が言える？」

「そんな！ISは核じゃない！」

「だろうな。――ならばネクストならどうなる？」

「ッ！！」

そうだ。あのキューバ危機も、両国間の不信感と、過剰な対抗意識が生み出した惨事だ。

かつては自衛のためであったはずのそれは、独り歩きを始めた危機意識によって世界を焼き尽くす悪魔の業火にすらなってしまった。

ISも同じだ。その力は旧来の兵器では相手にならない。

そのちからをもってすれば、一体どれだけの戦力になるのだろうか？そして、一体どれだけの危険が降りかかるのだろうか？

「そしてネクストは生まれた。ISが使えないならば、それに替わる戦力を用意すればいい。

その力は時にISをも凌駕する。その内に秘める危険性には誰も目を向けなかったがね」

「だけど・・・だったら!」

「だとしたらどうする?これを公表するだけでも?甘いな。その瞬間各国の緊張は爆発するだろう。すでに君の知る安全で正常な世界は崩れ始めているのだから」

気づけば外は雨だった。

まるで、恭平の胸の内を代弁するような、しとしとと降り続く雨。

「・・・だとしても、俺はアンタの依頼には乗れない。オレは革命になんて興味は無い」

「ならばどうする?このまま見ている気かね?」

「違う――俺には俺の戦いがある」

それだけいうと、恭平は席を立つ。

それをテルミドールは引き止めなかった。こうなることが分っていたかのように。

「コーヒー、ありがとうございました」

「フツ：話せてよかったよ。やはり鷹の子は鷹と言うことか・・・」

お金を置こうとした手をさえぎって伝票をスルツと抜き去ってしまった。

気を悪くした風もなくこういったことが出来るのは、本当に話があったただけなのか。

「アンタは多分、悪い人じゃないんだ」

「・・・・・・」

「それでも、アンタはやるのかよ」

「愚問だな」

ふり返って、初めて男はサングラスを外した。

そこにあったのは、憂いを秘めながら、決して朽ちることのない自己の強さを秘めた目。

何もかもを見通す様な眼に、初めて恭平は畏怖を覚えた。

「悪いが譲れないな。だが、覚えておこう。――お前の答えも」

「そうですか・・・それじゃ」

ここに、両者の対立は決定的なものになった。

同じ力を持ち、同じ世界を見る二人は、それでも異なる道を選んだ。

一人は仲間のいる世界を。

また一人は、止まらない革命の道を。

回り出した歯車は止まらない。もうすでに犠牲を払わずに止められる段階はとうに過ぎてしまったのだ。

ここで話したふたりが、いつか銃を向けあう日が来る。

それもきつと、遠い話ではないのだろう。

「それでも、俺には帰る場所がある」

最後に。

ドアに手をかけて呟いた一言は、果たして男に届いたのか。
帰るべき場所を失い、革命を選んだ男と、今そこにある帰る場所と
仲間を選んだ恭平。

その違いは、一体いつ生まれてしまったのか――

それっきり、恭平は男へ振り向くことなく店を出ていく。来た時と
同じように、

鈴の音が耳に届いた。

雨は、いつの間にか止んでいた。

外に出ると、雨の後の、濡れたコンクリートの匂いがする。

そこだけが時間の流れから取り残されたようにひっそりとたたずむ
喫茶店。

（アーネンエルベ、か・・・）

古風な看板に描かれた店の名前。

『アーネンエルベ』

ドイツ語で「遺産」と言う意味だった。

帰りを待つ人（前書き）

今回も上手く話がまとまらない：非常に幼稚な文になってしまった
r
z

あと5ゝ6話で話をまとめられればいいのだけれどねえ。

後、最近何故か不幸続きです。練習試合で足の骨を折りました。
折ったと言うよりかはヒビなんですがね。どうしてこうなった：

帰りを待つ人

まるで人形のようなだ、と、他人事のように思う。

喫茶店から学園へと帰る道のりはどうやって辿ったのかすらわからない。

ただ、勝手に足が動いて、それを他人事のように思っているうちにいつしか学園の門の前に居た。

「あ、なんだもう着いてたのか」

今いるここが、自分の学び舎の前であるということにさえ、気づくには数瞬の時を必要とした。

と、校門の奥から駆けてくる姿があった。

小さなその姿は、だんだんと大きくなってそれが誰であるか分る頃にはもうすぐ目の前に居た。

「はあ、はあ、恭平……」

「ラウラ……?」

どうしてこんなところに居るんだろう? 授業は一体どうしたんだ? ああ、もうこの時間なら授業は無いんだな。

肩で息をするラウラをぼんやりと見ながら、そんなどうでもいい事を考えていた。

そうか、そういえば誰にも言わずに出てきたんだっけか? ああ、そういうばそうだったな。

「はは、ラウラ俺実は——ッ!？」

——バシッ!!

続くはずの言葉は、鋭い音と共に消え去った。

信じられないという顔をする恭平は、そこでようやく、ラウラが肩を震わせうつ向いていることに気がついた。

「ラウラ…?」

「どうして! どうして私に何も言ってくれないんだ!!」

「……」

叫ぶラウラの顔は、涙に濡れていた。滅多な事では声を荒げることなど無いラウラが。

そこまできて、恭平は己のしたことこの過ちに気づかされた。

「……ごめん」

「違う! 私が欲しいのはそんな事じゃないんだ! ただ一言でも、私を頼ってくればよかったんだ……」

何かを言おうとして、でもそれを言う事が出来なかった。

肩を震わせ、泣き叫んだこの少女は、たとえ軍の人間であろうと、冷水と言われようと、それでもそうある前に一人の少女であったのだ。

喉元まで出た何かを、でもそれを言う事が出来なくて恭平はまた、ごめん、と呟いた。

不意に、目の前が歪んだ。

「あれ……?」

泣いていた。自分でも信じられなかった。最後に泣いたのはいつだっただろう。母さんが死んでから、泣いたことなんて無かったのに。

「泣いてるのか、恭平」

白く、ほっそりとした指が頬をなでた。

違う、と言いかけて、その唇はやわらかな感触に遮られた。

「————ッ!？」

「ん………」

あわてて離れようとするも、首にまわされた手がそれを許さなかった。

優しく抱きしめる様に、ラウラはそっとキスをした。

「……私は、お前を赦さない」

「…なんだ、泣いても許してくれないのか」

「赦してなんかやるもんか。絶対に——」

誰もいない校門の前で、月明かりだけが二人をそっと照らしていた。



「その、みんなごめん」

ラウラに手をひかれ、恭平は皆が待つ部屋へとはいってきた。

そこには一夏、箒、セシリア、シャルロット、鈴、それに千冬先生とローディ先生が居た。

そして、入って真っ先に恭平は頭を下げた。

自分の勝手な行動で皆に心配をかけた。どんな理由であれ、心配させてしまったから。

「まあいい。処罰は追々考えてやる。まずは座れ」

「はい」

千冬に促され、恭平は席に着いた。

「有澤、そろそろ話せ。お前は一人で戦う訳ではないだろう？」

いつもとは違う、諭す様な、やさしさのある千冬の声に促されて恭平は口を開いた。

高鳴る心臓の鼓動を抑えて、もしかしたら見捨てられるかもしれない恐怖と、皆を騙していたという罪悪感を押し殺して。

「俺は——みんなに言わなきゃいけない事が、ある」

「「「「……」」」」

視線が、痛かった。

言うのが、怖かった。

でも、言わなければいけない。

「あ——」

そっと、ラウラが手を握ってくれた。

その不思議な温かさは、何よりも安心できるものだった。

「俺は、俺のISは——ISじゃないんだ」

「え!?! それってどういう…」

声をあげた一夏を、シャルロットが足を踏みつけて黙らせる。

「あれは『アーマードコア・ネクスト』有澤重工の生み出した擬似ISなんだ」

衝撃は、さざ波のように広がった。

だが、彼らはまだ物語の真相を知らない。

今日、ここで明かされる真実は、彼らに何を思わせるのだろうか――



「随分と遅い帰りじゃないか」

「すまないな。だが中々おもしろい奴ではあった」

「ほう? では――」

「いいや、彼は此方側に来る事を拒んだ。それが答えだ」

煙草の紫煙を燻らせながら、2人の男が話をしていた。

一人は、マクシミリアン・テルミドール。そしてもう一人が――

「フッ。あまり驚かないなメルツェル」

そう、ORCA旅団副団長を務めるこの男の名はメルツェル。

「来るも来ないも彼次第さ。彼が拒んだのであればそれがすべてを語っている」

「そうか――そうだな。どの道我々はもう後戻りはできん」

決別したというのに、どこかその表情は嬉しそうですらあった。

それは、自分と同じ力を持ちながら、違う道を選んだことへの憧憬とも言える何かであった。

「やるのは…明日か？」

「ああ。銀翁とジュリアスには既に配置についてもらった」

「そうか…お前は――そうだな。聞くまでもないことだったか」

「私はここでヴァオーと共に彼らを待つさ」

グラスの中身を空け、メルツェルと呼ばれた男は苦笑気味にそう漏らす。

空になったグラスを弄ぶ。

どこか遠くを見るその顔は、一体何を見据え、何を思っているのだろうか――？



「疑似ISだなんて、どうしてそんなモノを…？」

「ISが世界を危うくさせたからだよ」

「え…？」

ISが世界を危うくさせる。その意味を、一夏達は計りかねていた。

「ISは確かに強力だ。でも、ISの保有数は限られている。それに必ずしも誰もが動かせる訳じゃない。限られたISコア、限られた操縦者。各国が争奪戦になるのは当然だったんだ」

「でも！だからと言って疑似ISなんて」

「必要ない、か？でもその力は圧倒的だ。今や国防の要となるほどに。表立っての軍事転用は禁止だけど、そんなのもう形骸化してるんだ」

かつて隆文が語った事実を、恭平が述べる。

もちろん恭平は千冬がこれを知っている事には気づいていない。

「ISがダメなら他の戦力を。ISに替わる何かを。そう考えるのは自然な事さ。そうしてこのネクストは生まれたんだ」

『アーマードコア・ネクスト』“次世代”の名を冠されたそれは、皮肉にもその託された次世代を焼き尽くすほどの力を持っていた。

「でも完全にISを再現できた訳じゃない。これは欠陥機なんだよ」
「欠陥って…」

ポツリとそう溢したのはシャルロットだった。

「コアが無いから自己進化もしない。絶対防御だってない。だからこう考えたのさ。戦うためだけならそんなものは要らない。ただ強さだけがあればいいってね」

もう五人は何も言えなくなっていた。ただ恭平の独白だけが部屋に響く。

「IS並みの機動を得るためにAMSを。強力な防御と攻撃力を得るためにコジマまで使った。そうしてようやく気づいたんだよ。自分達が造ったものの恐ろしさに」

「AMS？それにコジマって…？」

「AMSは機体と操縦者を物理的に接続させて反応速度を上げるモノだ。コジマはその動力源だよ」

「そしてISとネクストを分ける決定的な差だ」

「織斑先生…どうしてそれを？」

千冬が不意に口をはさんだ。

「私は以前にお前の父親からこの話を聞いた。そこですべてを知ったよ」

「……」

そうか、もう知っていたのか。

そう呟く恭平の声には力が無かった。

「だから俺はISが動かせる男じゃない。俺は…ずっとそれを黙ってた」

騙していた罪悪感が胸を締め付ける。
もうみんなの顔をまともに見る事が出来なかった。

「なあ恭平」

「なんだよ一夏」

うつろな瞳で見上げると、一夏がそこに立っていた。

「それでも、お前は俺たちの仲間だろ？」

「一夏…」

あの屈託のない笑顔で。清々しいほどに言いきった。

「うん。僕のコトだってちゃんと受け入れてくれたよね」

「シャル…」

一夏もシャルロットも、そう言ってくれる。

それがなんだか、無性に嬉しかった。

「らしくないわねえ。アンタはこう、もっとはつらつとしてるヤツ
でしょうが！そんなのアンタらしくないわよ！」

「そうですわ！らしくありませんでしてよ」

「鈴、セシリア…そうか、ありがとう」

そっぽ向きながら、それでも自分を認めてくれた鈴とセシリア。

「そうだな。そういう顔はらしくないぞ恭平！」

「箒…」

フツと胸が軽くなったような気がした。

話してみれば、こんなにも簡単な事だったなんて――

「少し、いいかね？」

「ローディ先生？」

ふと、ローディが恭平に視線をやる。

「君は今までどこで何をしていたかを話していない。それを話すべきではないかね？」

「――はい」

向けられる視線を、今度はちゃんと受けとめながら恭平は再び口を開いた。

「俺はある人に呼び出されて喫茶店に行きました」

「それは？」

「呼び出した男はマクシミリアン・テルミドール名乗りました」

「ほう……」

ローディは、テルミドールの名が出たとき。わずかに相好を崩した。それは懐かしむようでもあり、また哀れんでいるようでもあった。だが、それに気づく者はいなかった。

「彼は自分の計画に俺を誘いました。武力で変革を促すと言って。でも俺ははっきりと断りました」

「そうか……彼もまた、道を選んだか。――時の流れは速いものだな」

最後のローディの呟きは誰の耳にも入りはしなかった。

でも、それでよかったのかもしれない。ローディは礼を言うと、そのまま部屋を出ていく。

それにならって、皆も部屋を出てそれぞれの部屋に戻っていく。
帰るとき、ラウラはずっとその手を放そうとはしなかった。

長い夜の終わりだ。

ここに、ようやく自分の居場所を見つけ、戦う理由を得た恭平。

もう恭平が迷うことは無いだろう。

来る戦いは世界に何をもたらすのか。

決戦はもうすぐそこまで迫っている――――

帰りを待つ人（後書き）

ここでのORCA旅団の人物などには一部オリ設定があったりなかったり。

ローディとテルミドールの関係はまた後ほど。

永久更新凍結のお知らせ

親からP Cの使用を禁止されました。

ケータイも解約、P S Pも捨てるそうです。

今後一切、受験勉強以外のことはしないようにとのことでした。

部活も自主退部するようになってきます。

高2なので、受験生なのですが、マイナスになるとは思っていますでした。
残念です。

完結を目前にしながら更新を凍結しなければならないことが残念ではありません。

※最終話までの話自体はもう完成していたのです。連続で一気に上げるつもりでした・・・

もう今後は更新は二度とないかもしれません。

模擬でいい点取れば話は変わるかもしれませんが、望み薄です。

一応、完結にはしません。望みは捨てたくないのです。

お付き合いいただいた皆様、本当にありがとうございましたm (´
┐ m

稚拙な作品ではありましたが、見守っていただけて嬉しかったです。

最後に、精一杯の感謝をこめて、本当に、ありがとうございました

$$\begin{pmatrix} m \\ m \end{pmatrix}$$

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1392q/>

IS～インフィニットストラトス～『鋼鉄の咆哮』

2011年8月18日08時30分発行